

2018年度(平成30年度)

沖縄県NIE実践報告書



沖縄県NIE推進協議会

目次

【日本新聞協会指定N I E実践校】

沖縄県立宜野座高校	1
糸満市立糸満中学校	15
うるま市立川崎小学校	33
名護市立久辺小学校	39
浦添市立仲西小学校	45
読谷村立古堅南小学校	49

【沖縄県N I E推進協議会指定実践校】

石垣市立石垣小学校	51
伊平屋村立伊平屋小学校	53
那覇市立城北小学校	57
沖縄市立高原小学校	61
沖縄市立比屋根小学校	67
沖縄市立美東中学校	77
名護市立小中一貫教育校緑風学園	81
【資料1】 沖縄県N I E推進協議会組織と運動の経過	87
【資料2】 これまでの実践指定校	95
【資料3】 全国大会・実践フォーラムの新聞記事	98
【資料4】 新聞社の出前講座・N I Eの取り組み	100

ごあいさつ



沖縄県N I E 推進協議会
会長 仲村 守和

本協議会は平成12年（2000年）に設立され今年で19年目を迎えました。本会は「教育界と新聞界が協力し、新聞教材の開発、活用の研究と普及を通して、児童生徒の情報活用能力の育成を図ること」を目的として、N I E（Newspaper In Education）活動を推進してきました。特に、本年度は平敷昭人県教育長のもと県立学校教育課、義務教育課の指導主事を幹事に派遣してもらい協議会組織の強化が図られました。

昨今、N I E活動への県民の理解が深まって参りました。これも県教育委員会はじめ市町村教育委員会や学校、P T A、地域そして沖縄タイムス社、琉球新報社等のご理解とご協力によるものであります。現在、多くの学校で新聞をツールとした教育実践が推進されています。

N I E活動を実践する学校には、本会の事業の一環として、年度毎に、日本新聞協会および県内新聞社と連携して、実践校の指定をし、各新聞を無償提供して実践活動を支援しております。

新学習指導要領の「アクティブラーニング」、つまり児童生徒が「主体的、能動的」に参加する授業づくりのためにも「生きた教材」といわれる「新聞」を授業に積極的に取り入れてほしいと思います。新学習指導要領では「新聞活用」が全ての校種で指導すべき内容として位置づけられていることから不断の研究が求められています。

この度、本年度の実践指定校の実践概要が本冊子にまとめられました。実践指定校では、「新聞」を有効に活用し、楽しく有意義な授業の構築が図られ、子どもたちの生き生きとした活動の様子が報告されています。N I E活動を通して、児童生徒の思考力や判断力、表現力等が培われていることは、N I Eの教育的手法が児童生徒の課題解決能力の育成に大きな効果があることを実証しています。

本報告書のねらいとするところは指定校の実践を各学校で共有することにあります。学習教材としての新聞活用や新聞づくりなどN I Eの教育的手法を取り入れ、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」を培っていく授業実践のためにもN I E活動を各学校で推進していただきたいと思います。

結びに、N I E活動の実践事例としての本報告書が県内の学校や家庭、地域社会など多くの機関で活用され本県の有為な人材育成の一助になれば幸甚に存じます。

NIE Practical Research Report

Okinawa Prefecture Ginoza High School

1 : はじめに

本校は平成29・30年度と2年間、県内の県立高校として初めてNIE実践研究指定校認定を受けてきた。初年度は、県NIE推進協議会のご支援・ご協力のもと、学習者が新聞に接する環境をえることができ、「学習者の社会問題への興味・関心」を喚起できたと言える、土台作りので1年目であった。



本年度は、実践研究指定最終年度である。1年目の成果や課題をふまえ、次のステージへと学習者を導く実践を行った。次のステージとは、最終目的である「主体的・対話的で深い学び」を経験させるということである。学習者に「主体的・対話的で深い学び」を身につけさせることに関して、NIEという手法がどれほどの可能性をもっているのかを主テーマとした2年目の実践事例を報告する。

2 本校の取組（主なもの）

- ・3学年【「はがき新聞」「1分間スピーチ」「ちょこっとNIE」「時事問題絵日記」「伝える力を鍛える」】
- ・2学年【「はがき新聞」「りゅうpon出前講座」「ちょこっとNIE」「時事問題絵日記」「語彙力ビンゴ」】
- ・1学年【「新聞見出し入れクイズ」「新聞課題」】



宮城通就

勤務：5年目

主担当学年：3学年



比嘉啓信

勤務：3年目

主担当学年：1学年



新城 遼

勤務：2年目

主担当学年：2学年

学校紹介



沖縄県立

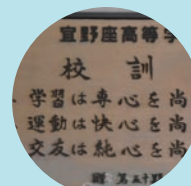
宜野座高等学校

創立：1946年

課程：全日制

校訓

学習は専心を尚ぶ
運動は快心を尚ぶ
交友は純心を尚ぶ



設置学科

学年制 普通科

在校生数 323人

卒業生数 12,000余

部活動加入率は県内トップクラス。ゴルフ部、フェンシング部、野球部、ラグビー部が全国大会出場している。緑に囲まれた落ち着いた雰囲気のある学校。

3 実践事例報告

3学年60名（授業者：宮城）

（日本史選択者：22名、世界史選択者：38名）

「伝える力を鍛えよう！」

～かんちりがんちり むぬあびらんと～

4 成果

- ・第9回いっしょに読もう新聞コンクール
（主催：財団法人日本新聞協会）
県NIE推進協議会 会長賞 大城あのに(3年)
全国学校奨励賞 宜野座高等学校
- ・第8回しんぶん感想文コンクール
（主催：琉球新報社）
琉球新報賞 與那城 壮真 (2年)
優秀賞 瑞慶山 まなか (2年)
入選 我喜屋 結菜 (2年)
- ・第8回県新聞スクラップコンテスト
（主催：沖縄タイムス社）
ノート部門 優秀賞 吉山 美樹菜 (3年)
優良賞 我謝 玲菜 (3年)
切り抜き部門 佳作 佐竹 彩音 (2年)
上地 堇加 (2年)
高江洲 エミリ(3年)
仲間 優美 (3年)
- 新聞感想文部門 佳作 城間 怜里 (3年)
- 「命の大切さを学ぶ教室」全国作文コンクール
（主催：警察庁） 犯罪被害者支援室長賞
赤嶺 椿 (3年)



「時事問題絵日記」誕生エピソード

2012年の9月1日始業式の後、自分の授業が連続して2コマ。「あっ！授業やさ～、ちゃ～すが、準備してない」と私は窮地に追い込まれていた。その時、脳裏に浮かんだのは、親戚の子供が描いていた絵日記だった。「やさ！夏休みの思い出を絵日記にして描かそう」。何とか授業の体裁は整った。それから、5年の月日が流れた。2017年NIE研修会で桃山学院大の今宮先生による「はがき新聞」講座を受講した。すぐに実践した。そして、その手法を私の「絵日記」にも使わせて頂いた（パクった）。お陰様で、生徒が大好きなNIE授業の一つとなった。【宮城】



5 課題（持続可能なNIEとは）

NIE実践研究校の取組を2年間続けた結果、「NIEは、主体的・対話的で深い学びを身につけさせる手法としては、その目的を果たすために十分に機能し、大変有効な手法」であるという事が結論づけられる。1学年で「新聞になれさせる」環境を作り、2・3学年で「NIE学習の成果を発表してみる」という体系的な取組を行った。同時にこの2年間は私たち授業者にとっても「教えることの意味」学習者にとっては「学ぶことの価値」を再認識させられた時間であったとも言える。事後の学習者アンケートからは、「学びスイッチ」がONになり本人も含め身近な友人の学習成果が「形」として表れたことによる「成功体験」もうれしいことであったという趣旨の回答が多数ある。このことから、NIE授業は学習者自身の達成感や自己肯定感の醸成にも一役買っているという事が読み取れる。

「不易と流行」という言葉がある。その言葉を学校現場で例えてみる。「不易＝教育の目的」であり、「流行＝手法」だと考えてみよう。プレゼンソフトを使った授業、タブレットを使った授業、電子黒板などの手法は時代と共に変化してきている。しかし、「新聞記事を読んで、切り取り、スクラップにし、意見を述べ、相手からの感想もふまえ自己の意見（思考過程）を再構築する」という昭和の時代から続くアナログ的学習法は、今後どんな流行のなかでも、淘汰されることなく人間の知的成熟にとって不可欠な手法として受け継がれることであろう。だがしかし、その絶対必要条件は、「授業者自らが上記の如くアナログ作業を行うことで学習の本質を内面化し、この作業が知的成熟へ有効な手法であることを自覚」している事だ。

新聞発行部数はこの18年間で1千万部も減少しているという（日本新聞協会データ）。この傾向に歯止めがかからない場合、学習者にとっては、知的成熟を支援する「ひとつの手法」を失うことになるとも言える。超高度情報人工知能社会とも言うべき社会の到来は、経済格差、

学力格差、様々な格差社会が発生し「分断の社会」の到来を予測するには、難しくない。これからの社会で生き抜く子ども達をどう育てるか…我々教師の職責を、ある思想家（内田樹）は次のように提言した。「子ども達の知的成熟・感性的成熟の支援」だと。まさにその通りだと考える。このような成熟した子ども達こそが、先述した社会においてもたくましく生き抜いていけるのだろう。その成熟を支援するためにも、NIEは有効な手法なのだ。

2018年より2020年度までの3年間、本校は「キャリア教育推進事業研究協力校」の指定を受けている。地歴・公民科はキャリア教育計画の中でもNIE活動を通して「子ども達の知的成熟・感性的成熟の支援」に力をいれていきたい。また他教科へ新聞記事の教材化におけるアドバイス等を行うことで連携を深めると同時にNIEの魅力伝えていきたい。

この2年間、NIEという鋤で耕した土の中で、成長の機会を待っている学習者の「人生における可能性という種」に、水や肥料（NIE授業実践）を与えていきたい。【宮城】



6 実践者感想

・1年目をふまえ最終年度の自己テーマとしたのは「授業コーディネイト力」の向上であった。1年目の実践の結果、学習者は「新聞」というものを身近に感じており、私は彼らの「質問力」が向上していることに驚かされた。具体的には、事実の羅列ではなく、事実をふまえた自己の意見を述べた上で、教師の見解を質問し始めたのである。次のステージへ昇ってくれたのかも知れない。この段階で問われるのは（彼らの成長に対して敬意を示すためにも）、やはり、授業者（私自身）の「出方」だと痛感した。「キレのある発問力」を高めるためにアシハイミジハイ（一生懸命）だった最終年度である。

教科書でつまづいた彼らである。だからこそ、教科書以外のルートの1つとして、彼らの「学びスイッチをON」にする方法として、NIEを実践した。学習集団の学力レベルに合わせると思うが、これからもNIEを続けるであろう。スタート時点は違うが、導くゴール（到達点）は一緒だ。

閑話休題。哲学者の野矢茂樹は「考える授業」について以下のように述べた。「「考える」というのは、問題を抱えて、問いかけて、うまく答えがおもいつかないでいること（野矢茂樹『はじめて考えるときのように』p26 2004 PHP研究所）」。この言葉を受けて、考える授業の最低条件として「子どもが問いを持ち、答えを出すまで、その問いを追究し続けられること（『社会科教育』2017.11 明治図書p9）」と付け加えたのは川口広美広島大准教授である。彼女は「問いを追求し続けられるシステム」の重要性を付け加えた。NIEの手法は、彼女が指摘したシステムとして有効だと私は考える。

自分の社会力（シャカリキ）を高めよう。同時に、「問いを追求し続けられるシステム」の構築と「思考・判断・表現できる授業」を実践するためにも、自己の授業コーディネイト力を高めよう。日頃から「問いを立てる授業」を意識しよう。これからの自己のテーマに気づかされた2年間のNIE実践であった。【宮城通就】

・昨年度の取り組みで意識したのは、新聞の読み方や資料の読み方、そしてそこからいかに教科で学んだことと関連づけて考えることができるかということであった。今年度もそれらの取り組みを基盤にしながら、「社会的課題や問題の背後に広がる構造やそこにある物事どうしの関係性、その構造や関係性に対して、生徒達がどう考え、どう向き合うのかという足がかりを作っていくために新聞記事を活用する方法を工夫していく」ということを新たな課題意識として実践を進めてきた。

この2年間の取り組みを通して、私たち教師の仕事は、文化的に引き継がれてきた価値あるものを“細切れに切り取って”子どもに伝えることではないということを含め、今まで以上に強く意識させられた。私たち（特に社会科）教師には、最終的に、いまここに生きている彼らが、どのような立ち位置で社会に立ち、どのような社会に眼差しを向け、それを解釈し、それに向き合い、考え、行動していくちからをつけていくことが求められている。そして、そのための視点や考えを“一緒に”、“寄り添いながら”掘り下げていくためには、どの方法や材料をどのような手段で彼らに提供できるのかということを含め、常に意識しながら実践に取り組まなければならない。そうした課題意識のもとに、今年度取り組んだ課題の例としてあげるのが「BTS（防弾少年団）問題と嫌韓問題」である。BTSは、生徒たちの中では非常に人気があるグループで、今回の騒動においては、“感情的に”BTSを擁護し、解釈し発言する可能性のある彼らに対して、「官民あげての嫌韓ヘイト」と題する琉球新報（2018年11月19日）に掲載された乗松さんのBTS問題に対する見解と沖縄タイムス（2016年8月3日）に掲載された「沖縄ヘイトを考える（上）」の記事を提供した。テレビなどのメディアでは、“表面的な”受取りや解釈が行われているこの問題の背後にある構造や関係性、そしてそれらの構造や関係性と彼らの身近に存在する基地問題と沖縄ヘイト問題がどのように繋がっているのか、ということに気づき、それをもとに自分なりの考えや意見を持つことができるよ

うになればと考えた。当然ながら、見方によっては、「材料の与え方が偏っている」とも批判されよう。しかし、教師自身の解釈や結びつけはワークシートの中には織り込まれず、沖縄ヘイトに関しては資料の提供のみにした。当初は、1年生・・・、それも学力的には・・・という懸念もあったが、実際に取り組みしてみると以下のような生徒達の見解がよせられた。

「BTSに向けられたバッシング、この騒動の本質は今もなお植民地主義を振りかざして、韓国をバッシングするための手段を選ばない排外主義者からの暴力のような言動をしてきたため、このような集団は、一連の沖縄のヘイト行動につながって、人々の心を傷つけているだけじゃないかと思った。」

「BTS問題にあった『まるで日本人だけが被害者のようだ』という意見は、韓国だけでなく、乗松さんのように日本人にもいる。そういった人たちが日本に対して言うと、一部の人は『売国奴』だの『反日』だの言われる。沖縄でも基地の移設を反対すると同じ日本人からも罵声が飛んでくる。こういった環境が沖縄ヘイトにつながると思う。」

「いろんなメディアを見て気づいたのが、バッシングしている人達、ヘイトをおこしている人も『自分だけが被害者』という考えの人が多い気がする。今回のBTSのTシャツでも、たしかに原爆で被害は受けたけど、韓国にだって日本にそれなりにひどいことはされて、マンガにもされているのに、自分たちだけが被害者ぶって人を傷つけるようなことをいうのはどうかと思った。」

これらの読み込みの中には、言葉はつたないが、日本社会に蠢くアジア社会に対するレイシズムと日本の戦後（未）処理の問題、かつて植民地としてきた国々への向き合い方や今後の（展望ある）つきあい方はどうあるべきかに対する足がかりとなる考え方が含まれているよう感じられる。さらには、日本本土と沖縄の関係、日本本土と（かつて植民地としてきた）アジア諸国との関係が“差別”や“レイシズム”という視点から見ると、全くおなじ構造の中にあると

いうことへ気づきの土台があるように感じられる。これから必要とされるのは、そうした生徒達の感性を受け止めながら、これらの気づきをどのように共有し、深め、新たな学びの意欲に転化し、学びの深まりを言葉で表現するちからを彼らとどう創り上げていくのかという事であろう。

今回のNIE実践研究校の指定を受けて取り組んだ2年間がなければ得られなかったこと、考えなかったことなどが数多くあった。これからは、この2年間の取り組みで得た知見や実践の取り組みを土台にして、今後もNIEの取り組みをさらに深め、上記の課題意識をもとにさらなる実践の取り組みへとつなげていきたいと思う。改めて、今回このような場を与えて下さいました関係者の皆様にこの場を借りて感謝したい。

【比嘉 啓信】

担当教科の世界史でNIE授業の実践を行ったNIE教育を授業に取り入れてみて、普段生活をしている中で経験をする行事やイベントに対応した内容をタイムリーに行った授業において、最も生徒の興味・関心を引き出すことができた実感している。しかしながら、普段の授業内容に対応したNIE教育を十分に実践できず、今後の課題として残った。この課題をクリアしていくためには、日頃から授業の材料となりそうな記事をストックしていることが必要不可欠なため、授業者自ら積極的に新聞記事に目を通しておくことが重要であると考えた。

【新城 遼】



「伝える力を鍛えよう！」 【 NIE 授業指導 案 】

伝える力の育成（3時間）		
（目標） 本時 N I E の目標	①テーマや感情に沿った新聞の記事内容で意見を述べる【興味・関心】【思考・判断】 ②記事の要約力や自己の意見のまとめる力の育成 【思考・判断】【知識・理解】 ③効果的な伝え方を考える。プレゼン時のコツに注意し発表力の育成。 【思考・判断】【知識・理解】【表現】 ④学習者指導員は適切なアドバイスをする。協働力の育成	
指導内容	学 習 活 動	留意点・観点別評価
◎導入 本時の流れを説明 5分	・グループ形成（4～6人） 事前に指導員（教師の補助が役目）を育成し、各グループに1～2名配置する。 ・ワークシートの配布 ・各グループ：「テーマ」と「感情」のクジを引く 2種類のテーマ・2種類の感情 初めての段階では、記事から選ばせ、その後にテーマと感情を決めさせた。	・ 【興味・関心】 【思考・判断】 【行動観察】
展 開 1時間目 （40分） 2時間目 （40分） 3時間目 （45分）	記事を探す 1グループ 2名～3名で、1つテーマ・感情に取りかかる 1人2部程度 ⇔ 見出し読み ⇔ 記事の選定 見出し読みをさせ、できるだけ多くの記事に目を通させる。記事を選定後、深読みをさせる。 ①記事の要約→②伝えたいこと→③意見・改善策の順序で記入させる。 ④プレゼンのコツを考える（発表時意識ポイント） 2時間目：グループでの発表：1人2分以内 →グループ代表者決定 3時間目：グループ対抗戦 →2分以内でプレゼンする。 ⑤ 評価の見える化：円グラフにて評価	【机間巡視】 【行動観察】 ・1つの記事に止まっている学習者への支援 ・グループ内指導員への助言 ・適時、学習者への発問（想定される質問への準備ができているか） 【発問】 【思考・判断】 【発表】【表現】 「気づき」：振り返りの大切さを意識させる 効果的な伝え方とはどのようなものかを考えさせる。
まとめ （5分）	・1時間目 → 次回指示 自己のプレゼンイメージ ・2時間目 → プレゼンした後の「気づき」記入 ・3時間目 → グループ代表戦を終えての気づき記入。自分に足りないのはなにか？効果的な伝え方を考えとは？	

【 新聞：日付(/ /) (面)】

学習者へ指示する手順

③

ここに記事を貼る

①→⑧の流れを指示して下さい。

①②はクジを引きます。③引いたクジに合う記事を選びます(注：切りとる前に必ず新聞名と日付け何面かを転記させる(何面とか転記しなかった学習者へは「ごめん」と書かせてください)。記事を決めたら④：要約して→⑤：伝えたい事をまとめ(プレゼンの内容)→⑥：問題点などへの改善策など考え→⑦：プレゼン時に気をつける事(プレゼンのコツ)を記入させ、実際にプレゼンをさせます。⑧：プレゼン後に改善点、新たな気づきを記入させる → 提出させる。

自己評価メモ欄：自分自身の中で何が新しい発見があった？
うまくできた？何を改善したらもっとよくなると思う？

年 組No. _____
なまえ _____

⑧

伝える力を鍛えよう！：かんちりかんちり むぬ、あびらんと！

はっぴりと明確に 言葉が伝えよう！

テーマ： _____

①

プレゼンのコツ _____
感情 _____

⑦

②

記事の要約 _____

④

伝えたいこと _____

⑤

私の提言、改善策等 _____

⑥

～ 意見は「正しい」「間違いない」はない！ 大切なのは「説得力」があるかないかだ ～

安心	勇気
不思議 (困惑)	怒 (憤り)
幸福	名誉
責任	後悔
無念	憧れ
希望	軽蔑
尊敬	冷静 (焦)

感情の種類

満足 (不満)	共感
同情	嫉妬
熱心 (熱意)	善意
希望	信頼
悲しみ	楽しみ
リラックス	親近感 (親しみ)
期待	喜び

感情の種類

労働	災
地域	国防
ワイルドカード []	介護
福祉	紛争
社会保障	商業
宗教	絆
スポーツ	多様性

テーマ



衝撃	メランコリー (憂鬱)
苦悶	魅力
興奮	感謝
好奇心	意欲
恨 (怨)	悩み
空虚	憎悪 (愛憎)
葛藤 (迷い)	のう くとくとうへ (激怒・思考停止)

感情の種類

ふつへの 上等	ちむじゅらさん (情 け深い)
ゆくしむに〜 (フェイク)	ゆたむに〜 (信用できない言葉)
みみぐすい (聞いてためになること)	ゆいま〜る (助け合い)
むんなれ〜 (世の習慣)	あきさみよ〜 (驚き)
んじょ〜さん (いとおいしい かわいらしい)	ちむかなさん (ちむぐりさん)
わしらん (忘れない)	でえ〜じ!! (驚き)
がていん ならん! (合点 (納得) いかん)	しまくとしばワイルドカード !

感情の種類



プレゼン指導員によるアドバイス



グループ内発表の様子

目線	姿勢
ジグザクに周りを見る	背筋を伸ばし、 上半身は揺らさない
スピード	声量
強調したい部分はゆっくり話す	文章によって強弱をつける
動き	聴き手を巻き込む
強く訴えたい時には力強く 言いかける。自分の話をする。 体験を話す。例をあげる。	
ナンバリング	5W1H
「一つ目は、二つ目は」等、 数字を手で表現	What (いつ) When (どこで) Who (誰が) What (何故) Why (なぜ) How (どのように)
言葉遣い・速度	間
普段よりも丁寧な1分間300字	聴衆のための時間 おずおず時間を聴き手の理解を深める
滑舌 (かつぜつ)	ワイルドカード
明確に話すこと	何となく?

プレゼンのコツ

待機児童	貧困
就職 (就活)	基地
平和	観光
地産地消	特産品
事故	事件
SNS	健康
医療	自然環境

テーマ

環境	福祉
教育	学力
AI	IT (IoT)
選挙	訴訟
自治	民主主義
軍事	経済
暮らし	貿易

テーマ

外交	歴史
地理	文学
芸能	雇用
産業	風習
伝統文化	食
可能性	飛躍
遺産・遺跡	流行 (トレンド)

テーマ



グループ代表発表の様子

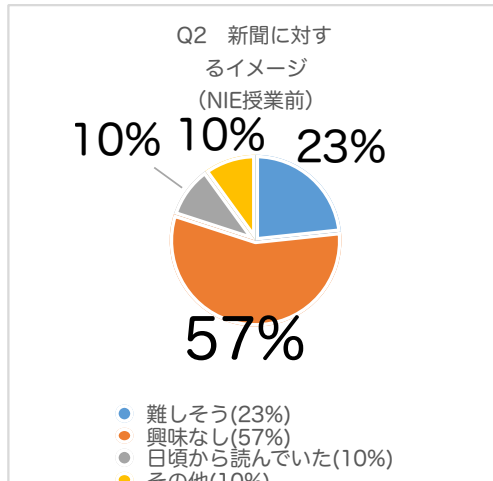
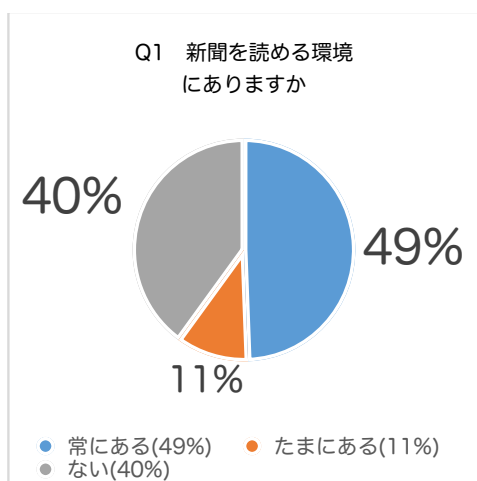


グループ代表発表の様子



評価：感情見える化円グラフ

7 アンケート結果（3年生：60名 宮城クラス）



Q1・Q2

【考察】

約半数の生徒は「新聞にふれる環境にある」と回答した。

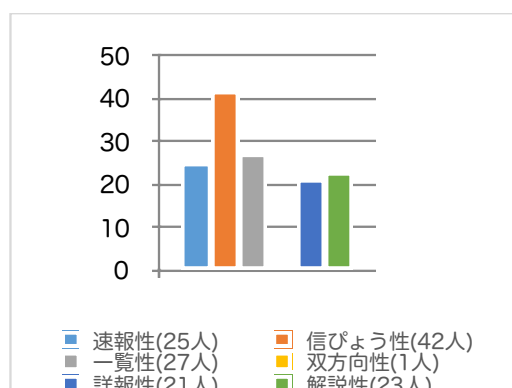
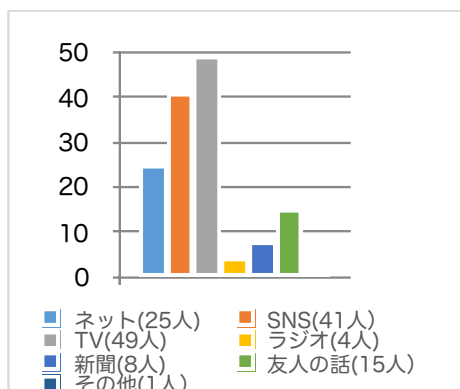
しかしQ2の結果からは、そのような環境の下でも新聞に対して「興味がなかった」という回答が半数以上をしめるといふ興味深い回答になった。

小論文、AO入試や面接対応策には新聞は有効であることをもっと彼らへ意識づける必要があるのかな。

その他の記述：時間が無い。祖母の家では読める。たまに読む。スポーツ面のみ読んでいた。最近、親がやめた（購読していない）。別に何とも思わなかった。

Q3情報の入手手段（上位3つ選択）

Q4 情報について重要と考える項目(上位3つ選択)



Q3 1位：ネット（ヤフー等）
2位：SNS(LINEのNEWS等)
3位：TV

【考察】

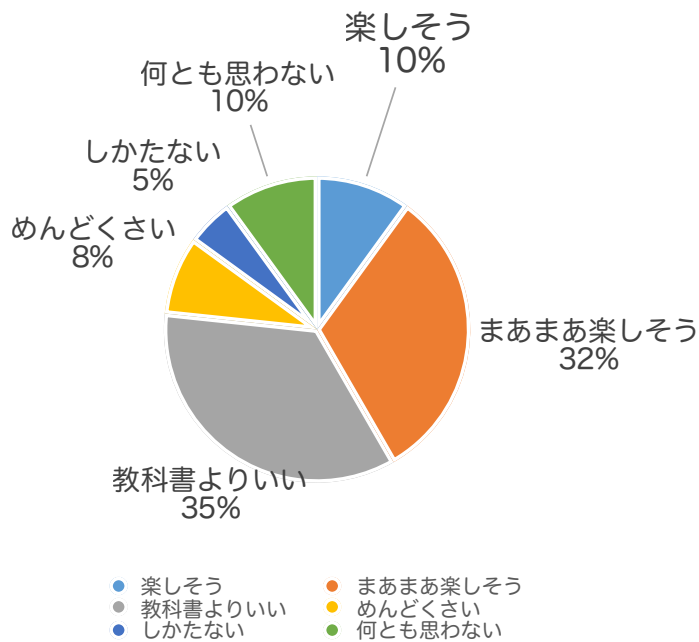
日頃、新聞から情報を得ているのは5%の8人でした。新聞を手にとらない、目を通そうとしない背景には何があるのだろうか、家庭での習慣なのかな。また高校生にとっては、友人の話も重要な情報源らしいです。これは身近な日常生活・学校生活の噂話的情報だと考えられる。

Q4 1位：信ぴょう性
2位：一覧性
3位：速報性

【考察】

一覧性（情報の全体図）が2位になったことについては、正直言って意外な結果でした。新基地問題等…切り取った情報やフェイクニュースにけっこう踊らされているという印象を私は勝手に持ってましたが、日頃のNIE授業とかで情報リテラシーが育成されていることなのかな…だったらいいのにな。安っぽいジャンクな思想に流されず、物事の本質を見抜く力へと成長してくれたらいいですね。

Q5 NIE授業に対するイメージ



Q5 1位：まあまあ楽しそう
2位：教科書よりいい
3位：楽しそう

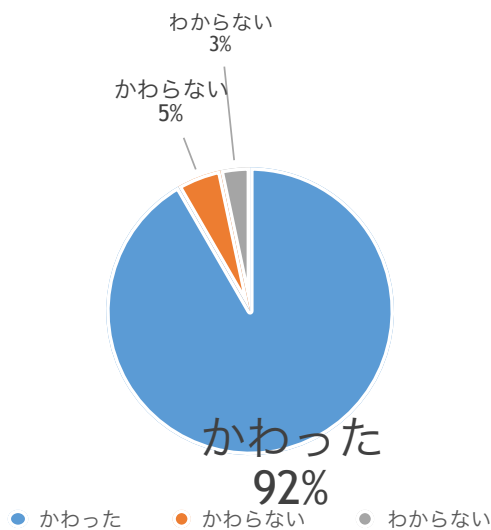
【考察】

「NIE授業」に対して学習者の42%が好意的に反応してくれていた反面、ほぼ同数の43%の生徒は消極的なイメージを抱いていたことが分かった。

気になるのは、「教科書よりいい」と回答した35%（21人）の声である。この声は日頃の私たち（授業者）自身の取り組み方（授業の仕方）を問うものだと思えた。自己の授業力を見直す契機としたい。

また、「仕方ない」「何とも思わない」と回答した学習者に対しては、もっと深刻な問題があるかもしれない。

Q6 NIE授業を受けて変わった？



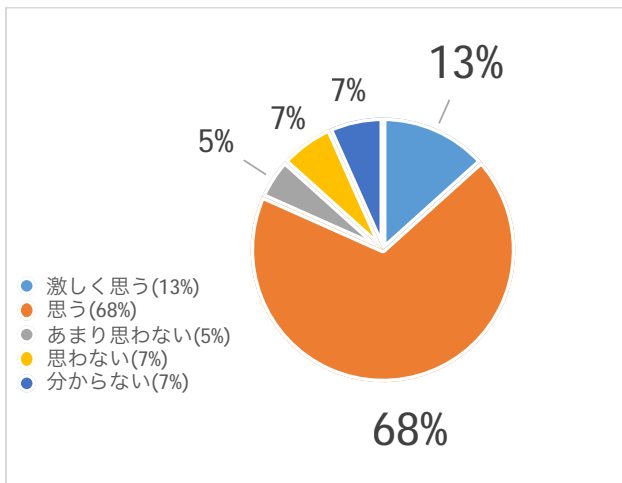
Q6 変わった …55名
変わらない … 3名
わからない … 2名

【考察】一連の「NIE授業」や「伝える力を鍛えよう（プレゼン）」を終えて、学習者のNIEに対するイメージが劇的に変化してくれた（私に付度してくれた面もあるかも知れないが）。彼らの「学びスイッチ」がわずかでもONになる授業（時間）だったなら、「授業者冥利につきる」との表現で学習者に答えたい。

Q6 NIE授業を終えての学習者の感想（主なもの）

- ・新聞の見出しに目を通すようになった。
- ・考えを文書にすることの難しさを知った。
- ・自分自身の考え方が変わった。
- ・1つの問題に対し、いろんな意見があることを知った。
- ・新聞って面白いことに気づいた。
- ・楽しかった。
- ・ある問題に対して、新聞社によって意見が違うことを知った。記事の書き方なんか、ぜんぜん違う。
- ・言葉1つでとらえ方やとられ方がちがってくるんですね。
- ・情報は、役立つけどとても怖いもの。
- ・自分自身がどう変わったかって、分かりません。
- ・かわらないよ。

Q6 NIE授業は必要だと思いますか？



Q7 1位：思う
2位：激しく思う
3位：思わない・わからない

【考察】

Q6の結果を裏付ける回答。Q5での消極的な回答58%が19%へ激減したことは喜ばしいことだ。NIE授業により、学習者の好奇心や学び意欲が刺激され「スイッチON状態」の者が激増した結果となったなら、この実践研究は成功だと言える。

Q8 NIE授業の必要性感じた学習者記述

(積極的回答者：主なもの)

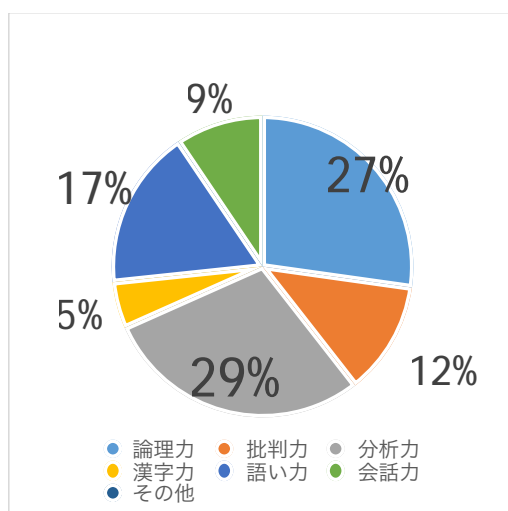
- ・ SNSとかネットとかに頼らない情報の集め方を知った。小論文とかに絶対に役立つ。
- ・ 物事の考え方、とらえ方、語い力が鍛えられた。
- ・ 面白い。この授業で、社会が分かる。自分の考えが持てる。発表は恥ずかしいけど、楽しい。
- ・ ペーパーレス社会やIT社会だからこそ、紙からの情報処理能力が必要。
- ・ 選挙権を持つものとして必要。 ・ 新聞を読むと一回で多くの情報を得ることができる。
- ・ たいへんよい機会だと思うし、受験とか就職には絶対役立つ。

Q9 NIE授業の必要性感じた学習者記述

(消極的回答者：主なもの)

- ・ わざわざ・・・授業でやること？
- ・ やってもやらなくてもいい。
- ・ わからない
- ・ 1年間で2～3回ならいい。
- ・ 今のニーズに合うの？・・・高校生は新聞読むのかな？

Q10 「新聞でどのような力が、身につくと考えますか？（上位3つを選んでください）」



Q10 1位：分析力 2位：論理力 3位：語彙力

【考察】

授業者の予想と違う結果となった。1位には論理力との回答を予想していた。プレゼンの目的も「説得力」を重視した「伝え方」を意識するように細工したつもりだったが・・・授業者としては少し複雑である。

学習者は一応に「新聞の持つ力」に気づいてくれていると言っていいただろう。新聞を通して自己のリテラシー能力も鍛えられることを自覚してくれているならNIE授業の成果は十二分にあると考える。会話力が下位(10%)だったことは、意外である。やはり、多くの友人達は読まないため、共通の話題が新聞でどのように記述されているかわからず、会話のきっかけにはならないのかな。

Q 11 「伝える力を鍛えよう！」

NIE授業を終えての感想です。

- ・楽しかった。もっとやりたくなった。社会問題が、他人事から自分事になった（同様な意見多数）
- ・自分の考えを文字にする練習ができた。伝え方を考えさせられた。自分自身により授業だった。
- ・はじめは、「正直・・・めんどくさい」という気持ちでした。しかし、だんだん楽しくなった。
- ・とてもよかった。社会に出て絶対役立つ授業だと思う。
- ・プレゼン能力はこれから（大学や就職しても）必要な力だと思った。
- ・面白かった。友人のプレゼンを聞いて「なるほど」と考えさせられることがいっぱいあった。
- ・AO入試前にやりたかった。
- ・私には難しかった。 ・全員のプレゼンを聞きたくなった。
- ・いろんな視点から考える大事さを知った。
- ・先生とのコミュニケーション（意見交換）が楽しかった
- ・文章の構成が分かった。ニュース（社会問題）が、他人事から自分事になった。
- ・最後のテストをこのような「プレゼン」にすること、大賛成です。
- ・プレゼンするなら、もう少し（準備の）時間が欲しかった。
- ・自分の語彙力の無さにショックを受けた。

8 平成30年度 全国NIE 大会 岩手県盛岡大会 2018.

7.26～27へ参加しての感想（報告）です。とても有意義な大会でした。他府県の先生方といろいろ話げできました。是非、都合がつく先生…参加なされてください。授業の可能性を拓げるヒントが沢山あります。本当です。マジです。2019年は宇都宮、ギョウザ食べ放題かも。

「不来方のお城に寝そべりて 空に吸われし十五の心」は石川啄木の歌。啄木が生まれ育った盛岡市。南部鉄の深く美しい高音の歓迎を受け心も穏やかに、災害的暑さも忘れさせてくれるこの地で行われたNIE全国大会へ参加した。テーマ「新聞と歩む 復興、未来へ」。多くの先生方実践発表・研究授業が行われ、すばらしい授業の参観や講演を拝聴できる有意義な機会であった。このチャンスを与えてくれた県NIE推進協議会の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

記念講演も含め、2日間を通してこの大会の共通項として私が認識しているのは「如何に学習者の心へ課題点・問題点を落とし込むか」という点である。言い換えるなら「（学習者に）自分事として考えさせるか（当事者意識の醸

成）」がこれからの学習活動における最大の目的であるということである。

教科書の内容と現実とをつなぐ「バトンの役」として「新聞の力」は大きい。それは、語彙力形成、論理力形成、伝える力の形成等々、最高の教材でありツール（道具）と考える。例えば、学習者が記事を切り抜きスクラップすることで、その「情報」は自分の物となり自分自身の思考の拠点となれる。「情報」が形をもち、いつでも学習者自身が振り返ることができる。アナログだけどこれが「学習活動の原点」だと気づかされた。新聞が持つ、「記憶性」「情報の共有性」などの特長は、学習活動をさらに充実させてくれるのである

あの震災から7年半が経過した。岩手では「震災の風化」が心配されている。本県の平和学習と同じような課題に直面しているとの思いが浮かんできた。会場では、風化を防ぐために「語り部の育成」、震災から学んだ教訓を未来へつないでいくため(震災教育)にも「新聞が大きな力を発揮できる」ことが主張された。これは平和教育・平和学習においても同じだと考える。

「新聞、教育は命を守ることが絶対的な使命」（鹿糠岩手日報報道次長）とのメッセージを心に留め、これからもNIEの特長を活かし、学習

者の可能性を広げられる授業者をめざす決意をさせてくれた盛岡大会であった。

ここで一句・・

「盛岡の NIEにあつまりて 新聞に吸われし 五十の心」 (通就)

学習指導要領が新しくなる。新しい大学入試制度もスタートする。そこで学習者に身につけさせなければならない能力は、「問題解決能力」の前に「問題発見能力」だと私は認識している。

「新聞」は、道具である。しかし教材化することで、学習者の「問題発見能力&解決能力」を伸ばせる仕掛けがたくさん作れることを教えてくれた大会であった。「生徒の変容は、教師を動かす」との実践者の本音。「学校においては強制的にでも新聞を読ませることは意義がある」との投げかけにはすごく共感が持てた。「新聞力と新聞の教育に対する豊かな可能性」を再認識することができた大会とも言える。そして、NIEを通して授業者は「教えることの意味」を確認し「学ぶことの価値」を学習者は実感できて風景を強く印象づけられた。

学習者の可能性を微力ながらも広げていこうとアシハイミジハイ (一所懸命) する授業者、問い続ける授業者・・・ソウイウ ジュギョウ シャニ ワタシハ ナリタイ (宮沢賢治風表現)

【宮城通就】



【びびっと新聞かるた】←これは上等です。「かるた遊びで新聞となかよくなるう！」をコンセプトに地元PPT (びびっと) 研究会が作成したもの。子どもたちの素直で豊かな感性が込められていた。NIE授業で「時事問題かるた」を作ったら、立派な授業になるね。

NIE 授業 アンケート

() 年 (男・女)

以下、各質問に対して、あてはまる項目を○で囲ってください

- Q1 新聞を読める環境についての質問です。家には新聞がありますか？
 ① 常にある(購読している) ② たまにある(いつもではない) ③ ない
- Q2 あなた自身についての質問です。これまで(NIE 授業を受ける前)新聞に対してどのようなイメージを抱いていますか(いましたか)？
 ① (漢字が多く)むづかしそうだから読まなかった ② 興味がなかった
 ③ 日頃から新聞は読んでいた
 ④ その他(自由記述)

Q3 これまであなたは「情報(世の中の動きや出来事など)」を、どのような手段で得ていましたか？
 (上位3つ主なものを選んでください。)

- ① ネット ② SNS ③ TV ④ 新聞 ⑤ ラジオ ⑥ 友人達の話 ⑦ その他
 情報について、あなたが重要だと思うことはどの項目ですか、上位3つを選んでください。
 ① 速報性(速くつたえる) ② 信頼・値びよう性 ③ 一貫性(情報の全体がすぐわかる)
 ④ 双方向性(読者等の意見や反応を返してくれる) ⑤ 詳細性(ひとつひとつの情報を詳しく説明してくれる)
 ⑥ 解説性(内容や背景まで伝える)

NIE 授業についての質問です

これまで、リュウPon出前講座(2年生・情報リテラシーについて)、ちよこつとNIE、はがき新聞、平和学習
 言葉ピンゴ、時事問題絵日記、伝える力を鍛えよう…等々をやりました。

- Q5 どのような授業をすることに對して、最初、どのように感じてましたか？(before)
 ① 楽しそう ② まあまあ楽しそう ③ いつもの授業(教科書)よりいい ④ めんどくさい(にりにる)
 ⑤ 先生がやっているから仕方ない ⑥ 別に何も思わない
- Q6 実際にNIE授業を受けた後の感想を教えてください。(after)…自分自身は何か変わった(考え方など)？

Q7 このような授業(NIE 授業)は、必要だと思いますか？

- ① 楽しく思う ② 思う ③ あまり思わない ④ 思わない ⑤ わからない

Q8 ①・②を回答した生徒へ…その理由を教えてください。

Q9 ③・④を回答した生徒へ…その理由を教えてください。

- ① 論理力 ② 批判力 ③ 分析力 ④ 漢字力 ⑤ 語い力 ⑥ 会話力(コミュニケーション力)
 ⑦ その他

Q10 新聞で、どのような力が身につくと考えますか？ (上位3つを選んでください)

- ① 論理力 ② 批判力 ③ 分析力 ④ 漢字力 ⑤ 語い力 ⑥ 会話力(コミュニケーション力)
 ⑦ その他

Q11 (実施したクラスのみ回答)「伝える力を鍛えよう」について

- Q11 貴重な感想を教えてください
 記事選びからテーマ・感情設定やプレゼンまでの流れを含めての感想です。(次年度の改善点にします)

ご協力 ありがとうございます。

「主体的・対話的で深い学びを取り入れた授業改善」 ～新聞を活用した授業実践を通して～

糸満市立糸満中学校
教諭 内山 直美

1. はじめに

本校は、平成 29 年度から 30 年度にかけ、NIE 全国実践指定校を受け、授業改善につなげる実践に取り組んでいる（図 1）。2 年目を迎えた今年度は、前年度の課題を活かした取り組みを模索する活動であった。引き続き研究主任を中心に、各教科で取り組める手法を、試行錯誤を繰り返しながら進めている。

本校の研究主題は「確かな学力を身に付け、主体的に学び合い高め合う生徒の育成」、副主題に「主体的・対話的で深い学びの授業改善を通して」である。そこで、各教科が獲得すべき資質・能力を共通の視点で共有し、NIE の手法を取り入れた授業公開、教材開発に取り組んだ。今年度は、社会科を中心とし、各教科で取り組んだ実践を紹介する。



図 1 指定校認定

2. N I E コーナーの設置

平成 29 年 9 月より、各学年のフロアーを中心に全国紙・地方紙 2 社の新聞を閲覧できるコーナーを設置している（図 2）。2 年は地方紙、3 年は全国紙や経済新聞が中心である。また、昨年度に引き続き、職員には NIE の取り組みがアクティブ・ラーニングの一手法として注目されていることや新聞を教室に持ち込むことで、子どもたちに主体的な活動を促すことができることを共有している。「無理なく、楽しく！」をモットーに新聞を教室に、授業に取り入れることが目標である。特集記事や読売中学生新聞記事などを閲覧できるコーナーも設置している。



図 2 N I E コーナーの設置

3. 実践の内容

(1) 「吉浜先生と語る平和の可能性」

4 月 25 日（水）、本校 2 年生の 7 名が沖縄国際大学を退官された吉浜忍教授との対談を行った（図 3）。この企画は、沖縄タイムス子ども新聞「ワラビー慰霊の日特集号」で企画されたものである（図 4）。生徒たちは、吉浜先生との対談の前に、各自が沖縄戦に関する疑問や



図 3 吉浜先生との対談

質問を考え準備した。「沖縄戦とはどのような戦いだったのか」の質問には、沖縄戦を時系列で表した地図を活用し、太平洋で行われた戦いの説明があった。地図で確認すると分かりやすく、授業でも活用できるヒントを得た。その後、「学徒隊が戦争に駆り出された経緯」や、「軍事教育と平和教の違い」、「なぜ、沖縄に基地をつくるのか」、「そもそも戦争は良くないものと分かっている、なぜ、戦争をするのか」などの質問もあがった。過去の戦争について学ぶことで、現在の沖縄の課題を見つめるきっかけにもなった。



図4 沖縄タイムス「ワラビ」慰霊の日特集号

(2) 社会科公開授業「5, 15 から考える沖縄県」

5月16日(水)、2年生社会科の公開授業が開催された。今回の授業は、年間6回計画している沖縄県に関する特設授業であり、今年度2回目となる。1972年5月15日を取り上げ授業を行った。昨年度公開した授業では、復帰前後の沖縄県の写真を読み解く、フォトランゲージの手法をとった。今年度は手法を変え、新聞活用に挑戦した(図5)。琉球新報が発行している「戦後史新聞」を活用し、「新聞記者になって、復帰前後の沖縄の様子を県民に伝えよう」のめあてのもと、「主体的・対話的で深い学び」の授業構成を試みた。

導入では、昨年度取り上げた写真を紹介し、1972年5月15日が沖縄にとってどのような日かを考えた。展開では、各グループに戦後史新聞を配布し、横見出しを考えるワークショップを展開した。横見出しには、時数を制限し、新聞のリード文を読みながら、キーワードになる言葉を出し合い、10文字の文章を完成させた。新聞記者というパフォーマンス課題で主体的になること、自分が考える見出しと仲間が考えた見出しをすり合わせ、10文字という制限があることで、深い学びにつながったと考える(図6)。終末では、復帰を経験した先生方に、「私が語る祖国復帰」と題し、思い出を語ってもらった。さらに、テレビ局や新聞社の取材を受け、子どもたちの自信にもつながった。



図5 琉球新報「戦後史新聞」を活用した授業



図6 新聞掲載された内容(琉球新報 H30.5.17)

(3) 目指そう！あなたも『カタリスト』

6月15日(金)、2年生全体の平和学習会が行われた。1校時の「平和講演会」の次時で、沖縄戦への興味関心も高まっていた。今回の平和学習会は、道徳主任の前田紗綾香教諭のアイデアも加わり「次世代の語り継ぎべになろう！」のタイトルのもと、地域の戦跡を知ること、沖縄タイムス「ワラビー慰霊の日特集号」も利用しながら、戦争体験者の体験談を読み込み、はがき新聞でまとめた。「地域の戦跡を知る」は、吉浜忍先生の言葉からヒントを得ている(図7)。



図7 タイムス「ワラビー」から記事を探す

「地域に残っている戦跡に行き、体と心、頭で体感してほしい。現地に足を運び(体)、立って感じ(心)、そこから考える(頭)。碑をはじめ、地元には戦跡がたくさんある。本物にふれることが大切だ。」

この言葉は、次代の平和学習のあり方を提示している。体験者は高齢化し、直に体験を聞く機会も少なくなった。今後は、「記憶と向き合うのではなく、記録と向き合う」という学習が増えていくだろう。ところで、地域には戦争の記録をまとめた書物も多く残されている。各市町村が発行している市町村史や字史などである。そこに記録された体験談や戦跡を教材化する取り組みが今後必要となるであろう。これからの平和学習は、体験者の講話を聞くだけでなく、聞いた話を、自分がどのように伝えていくのかを考える機会を作る必要もある。教師の工夫がこれまでよりも必要になってくる(図8)。

教育

毎週水・日曜に掲載

意見・問



ワラビーで戦史学ぶ

糸満中はがき新聞製作も

ワラビー「沖縄戦を学ぼう特別版」を活用した平和学習が15日、糸満中学校2年生の4クラスであった。

2年1組は前田佐綾香教諭(41)が担当し、冒頭でワラビー特別版を配布。掲載された元沖縄国際大学教授の吉浜忍さんの言葉「戦跡に足を運び(体)、立って感じ(心)、そこから考える(頭)」を紹介し、地元にある戦跡に触れることを勧めた。

ワラビー「沖縄戦を学ぼう特別版」の証言を読み、気になったところに蛍光ペンを引きながら「はがき新聞」を作成する生徒たち(15日、糸満中学校)

当日は糸満中から徒歩10分ほどの山嶺毛公園にある戦跡「防空監視哨」跡に行く予定だったが雨天のため中止となり、映像で学んだ。戦時中に敵機来襲を自視で捉える重たい役割を担った監視哨の跡には、標的にされないよう横倒しにされた石碑や砲撃の跡がそのまま残されている。前田教諭は、近くにある戦跡にぜひ足を運んでほしいと呼び掛けた。

特別版にある戦争体験者の証言をまとめる「はがき新聞」も製作。米兵を刺すため竹やり訓練をした人やイモ一つを10人きょうだいで分けた人など、複数の証言の中から一つを選び、内容や証言者が伝えたいこと、証言を読んだ感想をまとめた。生徒たちは「軍事訓練」「沖縄戦」など各自タイトルをつけて、通常のはがきより一回り大きい「はがき新聞」を作った。

前田教諭は「生徒たちは作品作りが好き。はがき新聞は作文を書くよりも取っつきやすい」と取り組みの趣旨を説明。「沖縄で昔あったことを理解し、次世代の語り継ぐ自覚を持つてほしい」と語った。授業を受けた金城樹音さん(13)は「新聞にまとめようとじっくり証言に向き合う中で、自分の気持ちにも気付いた」と話し、新垣哲郎さん(13)は「自分の言葉でまとめると伝えやすい。学校で学んだことを塾の友達に伝えたりして」と話した。

図8 授業の様子が紹介された記事(沖縄タイムスH30.6.30)

(4) 社会を見つめ、課題を捉える『新聞作成』

本校では毎年 7 月、全学年で「社会科新聞」に取り組んでいる。これは夏休みの課題であり、「中学校社会科新聞コンクール」に出展される。社会科の教科会を通して、優れた教師の実践を共有することは、授業力の向上を図ることもできる(図 9)。本時は、新聞作成に向けた第 1 時間目、「新聞作成のルールと書き方」の説明を受け、自分が興味のある社会的事象を見つけ、テーマを絞っていく時間である。中学校社会科研究会では、新聞作成のねらいを示している。



図9 新聞作成の説明を行う

- ① 社会科新聞作りを通して、興味・関心・資料活用・表現力・オリジナリティーを育む。
- ② 社会科学習を創造する「学び合い」の機会とし、作品の質の向上と交流を深める。

生徒たちは、教師の説明をしっかりと聞いて、自分の作品づくりに生かそうと真剣であった。また、現在自分が興味を持っている事象を出し合い、掘り下げていく作業は、自分事であり、深い学びにつながると考える。自分だけのオリジナル作品なので、テーマ探しも真剣である。

(5) 新聞作成で『未来を拓く力』をつけよう！

9月8日(土)、本校社会科メンバーは「沖縄県社会科新聞コンクール」の地区審査に参加した。毎年県の審査会が行われていたが、出展作品が増えたことや、各地区の新聞作成の取組を強化するため、今年度より地区開催が始まった。島尻地区は高嶺中学校を会場に、地区の社会科教諭が審査員として参加した(図 10)。新聞コンクールは、琉球新報社とともに主催されている。新聞作成を通して児童生徒の社会事象への興味関心を喚起し、取材を通して課題を追究する力や調べた内容を記事にまとめ表現する力、



図10 本校教師も審査員として参加

創造力、情報を発信する力を育成することを目的としている。中学 1 年生から 3 年生の生徒が出品でき、作品には、県社会科のテーマ「地域を支え、未来を拓く力を育む社会科学習」という視点が文脈に表現されていることが基準となる。地域を支えるとは、その地域を自分ごととしてとらえ課題意識をもって調査する姿勢である。本校でも、夏休みの宿題として 7 月から取り組んでいる。1 年生は「世界の諸地域の調査」、2 年生は「沖縄 21 世ビジョンから考える沖縄の課題」、3 年生は「社会的事象で自分が関心のある課題」がテーマである。本校は 130 名の生徒が入賞(金銀銅)した。また、学校全体の取り組みが評価されて、今年度は「学校賞」を受賞することもできた。

(6) あなたも主権者！『沖縄県知事選を考える』

9月21日(金)、2年生の社会科の授業で新聞を活用した特設授業を行った(図11)。沖縄県知事選挙に向けて候補者へのメッセージを考える授業である。新学習指導要領の社会科における改訂の基本的な考え方の一つに、「主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成」をあげている。公職選挙法の改正で選挙権年齢が満20歳以上から満18歳以上に引き下げられたことから、主体的に政治に参加することについての自覚を深めることなど、社会や世界と向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓ひらいていくことが強く求められている。新学習指導要領でも主権者教育は、「子供たちに平和で民主的な国家及び社会の形成者としての自覚を養うことが重要」と示されている。今回活用した記事は、琉球新報の企画「VOTE! #みんなごと若者たちが考える県知事選」であり、知事候補者にどのような政策を求めるのか考えることができた。各自が自分ごとで政策に対してランキングを行い、メッセージを書く作業に集中していた。生徒たちも4年後は選挙権を得て、投票する立場となる。中学生でもその意識を持つことが重要と考える(図12)。



図11 新聞を活用し討論



生徒の声

- ◇勉強に集中できるようクーラーを設置してほしい。
- ◇ごみ問題や地球温暖化の対策に取り組んでほしい。
- ◇貧困対策をしてほしい。

自分の優先課題は

■糸満中

県知事選に向けて大学生たちが候補者の公約に耳を傾け、自分たちの要望をまとめた琉球新報の企画「VOTE! #みんなごと若者たちが考える県知事選」が書かれた一般の記事も読み込んだ。「基地」「経済」など7つの分野を自分にとって大切な順に並べ、一番重視する分野で具体的な要望を考えた。

授業では、大学生が候補者の政策を大学生目線で選んで比較した「#みんなごと」の記事に加えて、公約が書かれた一般の記事も読み込んだ。「基地」「経済」など7つの分野を自分にとって大切な順に並べ、一番重視する分野で具体的な要望を考えた。

授業をした内山直美教諭は「生徒も知事選に興味を持つている。有権者となる4年後に向けて選挙が『自分ごと』になっていた」と手応えを語った。

ワークシート、ダウンロードできます

屋良真弓教諭の授業案と授業で使用したワークシートは琉球新報のホームページ内「沖縄から育む市民力」からダウンロードできます。また授業に活用する場合、大学生が取り組んだ「VOTE! #みんなごと 若者たちが考える知事選」の紙面画像を提供します。問い合わせは琉球新報文化部教育班 ☎098(865)5162。



図12 授業の様子が掲載された記事(琉球新報 H30.9.30)

(7) 『世界のウチナーンチュ』の思いとは？

10月19日(金),「1030世界のウチナーンチュの日」にちなんで社会科の特設授業を行った(図15)。昨年に続いて,本時の学習課題を「なぜ,世界のウチナーンチュは沖縄を誇りに思うのか」と題し,授業を展開した。世界のウチナーンチュの始まりは今から約120年前である。金武村(現金武町)の當山久三が26名を引き連れてハワイへ渡った。1900年にハワイに着いた一行は,サトウキビプランテーションの過酷な労働に耐え,家族を養いウチナーンチュのネットワークを広げて,様々な地で生活を軌道に乗せていった。その世界のウチナーンチュも現在は約42万人にのぼっている。5年に一度行われる「世界のウチナーンチュ大会」には,世界中の様々な場所から沖縄を目指してやってくる。第6回世界のウチナーンチュ大会では7000人のウチナーンチュが集結した。その様子や高揚感は,子供たちに自然と問いを持たせる。「なぜ,世界のウチナーンチュはこんなに沖縄を愛し,大切に思うのか」である。昨年度は移民1世の写真を活用したフォトランゲージを行った。今年は,ハワイ2世を中心として沖縄戦直後に,豚が550頭送られた事実を取り上げ,遠く離れた異国の地で沖縄を思うウチナーンチュを体感した(図13)。昨年9月28日,ハワイ州のデイビッド・イゲ知事による「海を越えたブタ」宣言が行われた。その記事も活用しながら,豚が送られて70年を祝って行われた宣言に,ハワイのウチナーンチュの思いを感じたようだ(図14)。



図13 「海からブタがやってきた」

「PIGS FROM THE SEA(海を渡った豚たち)」70周年を記念する宣言式がハワイ時間の9月27日(日本時間9月28日),ハワイ州ホノルル市にある州庁舎の知事室で開かれた。式にはハワイ沖縄連合会の役員らをはじめ,オーエン号に乗り込み豚を沖縄へ送り届けたハワイ県系人7人の子孫らも出席。子孫を代表して,リリアン・ホリオさんが県系3世のデイビッド・イゲ知事から宣言書を受け取った。同日付で「海を渡った豚の日」が制定された。太平洋戦争で通訳兵などとして沖縄戦に従軍していたハワイのウチナーンチュたちは食糧難にあえぐ故郷を目の当たりにし,ハワイへ戻るとすぐに沖縄救済運動を開始した。ハワイのウチナーンチュを中心に5万ドルの寄付を集め,550頭の豚を購入,沖縄へ送った。うるま市勝連平敷屋のホワイトビーチに到着した豚は公平に配分され,4年後には10万頭になり,沖縄県の養豚業を復活させ食糧難を解消するなど,戦後復興に大きく貢献した。式でイゲ知事は「ハワイと沖縄のユイマール精神を象徴するこの物語を後世へと語り継いでいきたい。今日,2018年9月28日を『PIGS FROM THE SEA』とする」と宣言した。(比嘉具志堅華絵通信員)



図14 「海を渡った豚の日制定」の記事(琉球新報 H30.10.8)

第3欄即使用可

ウチナンチュの誇りって？



戦後の写真を元にグループで物語を考え、紙芝居、を披露する2年生=19日、糸満市の糸満中

県系人の思い、今に

糸満中、移民の歴史学ぶ

10月30日の「世界のウチナンチュの日」を前に、沖縄から海外へ渡った移民の歴史を通して自分たちの足元を見詰める授業が糸満市の糸満中で開かれた。社会の課題を「じぶんごと」と捉え、社会参加する力を育む授業を紹介する琉球新報と沖縄キリスタ教学院大の共同企画「沖縄から育む市民力」は、今月、沖縄や、先人の過去を知ることと、社会に向き合う姿勢を育てる取り組みを紹介する。



「沖縄は私たちの誇りです」。5年に1度開かれる世界のウチナンチュ大会に毎回参加しているという海外在住の女性が、その理由を聞かれて満面の笑みで声を弾ませる。その様子を教室のモニターに映し出した後、内山直美教諭は「世界のウチナンチュはなぜ、沖縄を誇りに思うのだから」と生徒たちに問い掛けた。

この問いは、内山教諭自身が数年前、教師海外研修でフランスを訪れた時から抱き続けている疑問でもある。現地の県系人は今も古いまくとうばを使ひ、沖縄そばを愛し、故郷からの教員たちを熱烈に歓迎して



内山 直美教諭

沖縄、自分ごととして

授業では教材集「レッツスタディー」世界のウチナンチュ（沖縄県発行、2017年）を活用した。小学校低学年から高校生まで発達段階に応じた内容で、社会科以外でも活用できる。多くの学校に広がってほしい。

この問いは、内山教諭自身が数年前、教師海外研修でフランスを訪れた時から抱き続けている疑問でもある。現地の県系人は今も古いまくとうばを使ひ、沖縄そばを愛し、故郷からの教員たちを熱烈に歓迎して

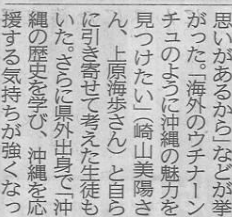
本土復帰40周年を迎えた2012年、県教委は復帰の歴史を平和学習と関連して学校での教育活動に位置付けるよう示した。これを機に、戦後沖縄にとって象徴的な日「4・28」「5・15」「6・23」「9・7」を年間を通して学ぶ特設授業を展開している。ここに「世界のウチナンチュの日」となった「10・30」を昨年度から加えた。

「沖縄は私たちの誇りです」。5年に1度開かれる世界のウチナンチュ大会に毎回参加しているという海外在住の女性が、その理由を聞かれて満面の笑みで声を弾ませる。その様子を教室のモニターに映し出した後、内山直美教諭は「世界のウチナンチュはなぜ、沖縄を誇りに思うのだから」と生徒たちに問い掛けた。

や知人は多く、県系人の世界での活躍や現地での経験には関心をもちやすい。また他の記念日と違って10・30は沖縄の人々の力や誇りが感じられる日だ。移民にならざるを得なかった沖縄や日本の歴史を理解し、今も熱い気持ちで故郷を思う県系人を知ることが、自分のアイデンティティーを考え、社会を構成する「市民」であることへの気づきにつながる。一連の学びを通して、沖縄の課題の解決策を考えるようになってくれればと願う。

内山教諭は、沖縄の戦後の惨状をハワイに伝えた移民の方向が逆の「焼け野原の沖縄からハワイに移民した」という物語を聞いた。内山教諭は、沖縄の戦後の惨状をハワイに伝えた移民の方向が逆の「焼け野原の沖縄からハワイに移民した」という物語を聞いた。

「沖縄から育む市民力」は、県内の幼小中高大の教員を中心に約10人がミーティングを重ねて「市民力」を付ける授業や取り組みを考え、その実践を月に1回、琉球新報の紙面とホームページで報告します。糸満中の内山直美教諭をはじめ、紙面で紹介した授業の計画やワークシートは琉球新報の特設ホームページからダウンロードできます。



「沖縄から育む市民力」は、県内の幼小中高大の教員を中心に約10人がミーティングを重ねて「市民力」を付ける授業や取り組みを考え、その実践を月に1回、琉球新報の紙面とホームページで報告します。糸満中の内山直美教諭をはじめ、紙面で紹介した授業の計画やワークシートは琉球新報の特設ホームページからダウンロードできます。

冒頭の「なぜに、生徒たちからは沖縄にしかないものがあるから」試練を乗り越えて平和な沖縄をつくりたいから「祖先を敬う思いがあるから」などが挙げられた。「海外のウチナンチュのように沖縄の魅力を『見つけたら』（崎山美陽さん、上原海歩さん）」と自らに引き寄せて考えた生徒もいた。さらに県外出身で沖縄の歴史を学び、沖縄を応援する気持ちが強くなった

民2世が残した言葉「罵られた（郷間ひかりさん）」の声もあった。内山教諭は「1時間という限られた時間で生徒たちはしっかりと向き合っていた。継続して学びを深めたい」と語った。

「沖縄から育む市民力」は、県内の幼小中高大の教員を中心に約10人がミーティングを重ねて「市民力」を付ける授業や取り組みを考え、その実践を月に1回、琉球新報の紙面とホームページで報告します。糸満中の内山直美教諭をはじめ、紙面で紹介した授業の計画やワークシートは琉球新報の特設ホームページからダウンロードできます。

冒頭の「なぜに、生徒たちからは沖縄にしかないものがあるから」試練を乗り越えて平和な沖縄をつくりたいから「祖先を敬う思いがあるから」などが挙げられた。「海外のウチナンチュのように沖縄の魅力を『見つけたら』（崎山美陽さん、上原海歩さん）」と自らに引き寄せて考えた生徒もいた。さらに県外出身で沖縄の歴史を学び、沖縄を応援する気持ちが強くなった

民2世が残した言葉「罵られた（郷間ひかりさん）」の声もあった。内山教諭は「1時間という限られた時間で生徒たちはしっかりと向き合っていた。継続して学びを深めたい」と語った。

図15 公開授業の記事（琉球新報 H30.10.26）

(8) 『一緒に読もう新聞コンクール』への取り組み！

本校2年の福治茉莉愛さんが、日本新聞協会の「いっしょに読もう！新聞コンクール」で県N I E推進協議会会長賞に受賞された。このコンクールは、次のような目的がある。

- ①社会への関心の広がりをもたらし、②社会の課題への「気付き」を促す。③家族・友だちとのコミュニケーションを促す。④考えを深める姿勢を促す。⑤考えをまとめて表現する力を培う。
- 昨年度は学年全体で取り組んだが、今回福治さんは個人応募での入賞となった。福治さんが取り上げた新聞記事は、18歳成人への民法改正の記事である(図16)。

奨励賞に久保、玉城さん

いっしょに読もう！県内表彰6人

家族や友人の記事を読み、感想や意見を作品とする「第9回『いっしょに読もう！新聞コンクール』(日本新聞協会主催)の受賞作が26日までに決まった。全国・海外から計5万2155作品の応募があり、奨励賞120作品の中に県内から八重野町立真志頭中学校3年生の久保夢依さんと興南高校3年生の玉城菜美さんが入賞した。学校奨励賞は小中一貫教育校の名鑨市立緑風学園、伊平屋村市立平屋小学校、真志頭中学校、真志頭中学校が選ばれた。

地域表彰に当たる県N I E女性部に対するセクハラ被害を行動したい」とつづつ日進推進協議会会長賞に、沖繩市立北美小1年の佐々木小葉さん、糸満市立糸満中2年の福治茉莉愛さん、宜野座高3年の大城あのんさんが選ばれた。同推進協議会賞には小中高生3人が選ばれた。

佐々木さんは、女性医師の働く環境を考える記事を取り上げた。医師の仕事量を減らすために「お医者さんしかできない仕事とそうではない仕事を分けてほしい」と提案した。福治さんは、成人年齢を18歳に引き下げる民法改正の記事について、金銭感覚を身につけていない人が、商品の契約をするので金銭を管理するの改正に反対して書きました。大城さんはメタボ、働く

長嶺真央(統大付小5年) 大泊優(真志頭中3年) 富島ひより(真志川高2年)

県N I E会長賞 県N I E奨励賞

大城あのんさん 福治茉莉愛さん 佐々木小葉さん 富島ひよりさん 大泊優さん 長嶺真央さん

行事とマナー考える 久保夢依さん (真志頭中3年)

全日本奨励賞を受賞した久保さんが、地城住民を重観町立真志頭中学校3年からは、相対的だと言った。久保夢依さんは、旧報に「中絶タイムスの記事のエイサー「運ぶコネ」」を身近な問題に感じ、意見を述べた。

久保さんは「エイサー団 体制も地城住民側もある巨い に賞状を頂き、理解し合う ことが必要だと感じた。理解 解いてほしい。行事も長く 続くエイサー。多様な意見を 聞くことが大切だと学んだ」と語った。

子の貧困に新たな視点 玉城菜美さん (興南高3年)

興南高3年の玉城菜美さんの記事を読み、父親と意見 を交わした。「医療や福祉 に掲載された子の貧困、 の現場で自立の手助けがし たい」と画案を学校の公認心 10割掲載された。

玉城さんは「考えを深め、 人の意見を聞いてまとめる 作業は、全語のキャッチボ ールをやるのにも必要だと 思っていた」と語った。

図16 「いっしょに読もう！新聞コンクール」掲載記事(琉球新報 H30.11.27)

(9) NIE を通して『授業改善』を深めよう！

11月12日(月)、本校にて「沖縄県NIE実践フォーラム」が開催された(図17～図21)。2学年担当の教師が中心となって、教材研究、教科会での練りあいを通して授業が展開された。中学校で初の4教科同時開催の公開授業は、学校外からも多くの先生方が参加し、NIEが有効であることも確認できた。各先生方が思考を凝らしたアイデアで授業改善に取り組み、新たな視点を学ぶことができた。特に、教科の壁という課題解決に対し、新聞を活用することで、教材開発や指導法工夫の視点を共有化しやすいとの意見も出た。

■2年1組【国語：前田佐綾香先生】

単元名：スピーチを聞いて、自分の考えと比べよう。
ねらい：聞き手に分かりやすいスピーチ原稿を作るために、自分の意見の根拠となる記事を見つけ、その記事の交流を通して自己の考えを深める。

■2年2組【英語：大山美和先生】

単元名：英字新聞の活用
ねらい：英字新聞に触れる機会とし、新聞記事の内容の概要を読み取る技能を身に付ける。

■2年3組【理科：金城博之先生】

単元名：新聞記事の活用
ねらい：新聞記事から、理科的な考え方を深めさせ、自分の考えで今後期待されることを書く。

■2年4組【数学：金城勝樹先生】

単元名：データの活用
ねらい：新聞記事の数値だけでは分かりにくい情報をグラフや割合で見方を変えることで、情報が分かりやすくなるよさに気付く。



図17 授業のようす (H30.11.27)

主体的学び実践共有
糸満でNIEフォーラム

新聞を活用した授業実践を学び合う「2018年度県NIE実践フォーラム」(県NIE推進協議会主催、糸満市教育委員会後援)が12日、糸満市立糸満中学校で開かれ、公開授業、全体会が行われた。同フォーラムの中学校での開催は初めて。県内の教員ら約50人が参加し、NIE(教育に新聞を)の活動を通して、確かな学力を身に付け、主体的に学び合う生徒を育てる授業について理解を深めた。

公開授業は2年生4クラスで行われた。国語、英語、理科、数学の授業で生徒らは真剣な表情で記事を読んだり、積極的にワークシヨップに参加したりした。クラスメートの発表に身を乗り出して聞き入る生徒もあり、意見の活発な交流もみられた。全体会ではNIEアドバイザーが各授業を振り返り助言した。

県NIE推進協議会の仲村守和会長は全体会で「生徒と教員の信頼関係をベースに授業が進められており感激した」と話した。同校の與那覇正樹校長は「授業の内容をより良くする手法の一つとして、有効だと考えNIEを導入している」と、日頃の実践を語った。

26面に関連、24日付に特集

教育に新聞を NIE

図18 NIEフォーラム掲載記事(琉球新報 H30.11.20)

沖 縄 時 代 新 聞 時 代

教科の壁 越える記事

Education

身近な題材 授業に興味

意見読み込み考え深化

2018年度県NIE実践フォーラム(主催・県NIE推進協議会)が12日、糸満市立糸満中学校で行われた。中学校を会場に開かれるのは07年度の開始以来初めて。新聞活用が定着している社会科

ではなく、国語、数学、理科、英語の4教科の授業(2年生)が同時に公開された。生徒に身近な題材が載った新聞を使い、興味・関心を高める授業改善の実例を示した。



国語では、自分の意見の根拠となる記事を見つけ、県内外をめぐるとともに、県内外の紙の記事を使った授業が行われた。テーマは「中学生とスマホ」の対立。反対な立場を併せ持つ「スマホ」の関わり。

前田佐枝香教諭は、話しのスレで自分とは違う意見や根拠があれば違うの「マーカー」で線を引きながら話を聞くよう促し「賛成、反対で意見が分かれる。同じ立場でも違う根拠を選んでいる。さまざまな意見を聞き、考えを深めてみよう」と述べた。

生徒らは「利用のルールを決めれば勉強に差し支えないから賛成」「ネット依存するからいららしたり疲れたりするから反対」などの意見が出る中、話し手の意見をメモするなどして考えを深めていた。



前田佐枝香教諭

の危険性、スマホの位置情報で熱中症の危険を予測する技術などについて親じた記事を読んだ。

意見の根拠になる部分を見つけ、マーカーで線を引く。横に付箋を張り、自分の意見を書き込む。その後、3、4人のグループで互いの意見を発表し合った。

親近感ヒント 文意探る



大山美和教諭

大山美和教諭は導入として日本語の新聞と英字新聞を並べ、違いを挙げさせた。生徒のほとんどは英字新聞を見る



英語の授業は、日本で発行されている英字新聞「ジャパンタイムズ」をグループでめくり、辞書を引きながら内容を読み取った。日本人スポーツ選手の活躍など、話題への親近感が苦手意識を取り払い、グループで活発に話し合っていた。

大山美和教諭は「開く方向が逆」「英字新聞の方が作りがシンプル」などと挙げていった。

同じ日のジャパンタイムズがグループに1部配られ、生徒は写真や見出しの単語を頼りに一つの記事を選んだ。フイギュアスケート羽生結弦選手の記事にある「GP」の文字に頭をひねり、「グランプリ」と声を合わせる場面もあった。つづりを読み上げて辞書を引き合う姿もあった。

大山教諭は、分かる単語や数字、固有名詞などのキーワードを押さえて文脈をたどる読み方のコツを伝えた。使用した英字新聞は中学2年生には難しいレベルだったが「普段より興味が高まって、主体的な学びになった」と、新聞が関心を引く教材としての力を持つことを感じた様子だった。

図19 NIEフォーラム掲載記事(沖縄タイムス H30.11.27)

教育

2018年度 県N I E実践フォーラム特集



電車も使い、県知事選の投票状況を調べる生徒



グループになって糸満市の投票状況を他と比較した

数値読み解き選挙実感

数学



金城勝樹教諭

数学の金城勝樹教諭は4年後に18歳で選挙権を得る生徒

約30人に対して、9月投開票の県知事選を巡る新聞報道から有権者数と投票者数を抜き出して、「地元」の糸満市の投票者数は他市町村と比べて多いか少ないか」と問い掛けた。

糸満市の投票者数は2万8802人で、有権者は4万7101人。これに対し、那覇市（有権者25万5440人）の投票者化

約16万1388人、豊見城市（同4万8477人）は3万948人、南城市（同3万4620人）は2万2811人、八重瀬町（同2万4031人）は1万5403人と、那覇市（同1万4988人）は6000人。

生徒は自治体別に、有権者数と投票数や、電車をはじめ計算した投票率をグループ化し、3〜5人の8班に分かれて話し合い、全員が糸満市の投票者数は少ないと結論を出した。

この6班は投票率が61・15%で最低だった点を根拠とした。残り2班は、グラフから有権者数と投票者数の差が大きいと見て取ったことを理由に挙げた。

生徒の新屋菜花さんは「意外と多くの人が選挙に行っていないのが気になった。若い人の意見を聞けるために自分はずっと投票しようと思っ

科学と生活 未来見通す

理科



金城博之教諭

金城博之教諭は「月の満ち欠けを使って植物の成長を調整し農家の人たちが楽になる」を発表させた。

理科ではレジ袋有料化の義務付けや、生きたまま魚を運ぶ技術など、生物や科学に関連する六つの記事を教材とした。

4、5人のグループに分かれた生徒たちは、それぞれ自分が興味を持った記事を選び、キーワードを探しながら読み込んだ。その後、キーワードを基に記事を要約し、記事の内容から今後「期待されること」を考え発表した。

グループ全員の発表後、金城博之教諭はまとめとして、「トヨタ紡織と名古屋大が、月の満ち欠けによる生き物への影響を解明する共同研究を始めた」と伝える記事を取り上げ、この記事を選んだ生徒たちに「期待されること」を発表させた。



新聞記事を理科の視点で読み込み、今後の予想を発表する生徒

「技術を活用し野菜の収穫率を上げること、安く買えることができる」など、将来の暮らしへの影響について、自分なりの考えを発表した。

金城教諭は「二つの記事から感じ取ったことは、それぞれ違うところを知ってほしい。また、身近なものに理科とのつながりがあることも知ってほしい」と授業の狙いを話した。

図20 NIEフォーラム掲載記事（沖縄タイムス H30.11.27）

教育



比呂美保 教諭



松田美穂 主幹教諭



高島英貴 教諭



佐間洋輔 教諭



石川美穂 教諭

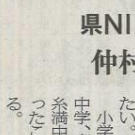
公開授業の全体会では、日本新聞協会NIEアドバイザーの5名が助言した。

記事使う目的意識して

全体会 NIEアドバイザーの5教諭が助言

生徒同士が教え合う場面もあり、対話的な深い学びがあった。評語に「先生がしっかりと新聞を読み込み、適切な記事を選び、自分の意見を論じる時、反対の意見も用いるという有効な活用方法も見られた。

方法として教師が口頭からどんな力を生徒に付けてほしいかを話すこと。今は使わない記事でも次に使うかもしれないものはクリップや箱に取っておくことと話し。



大塚守和 会長
学では初の公開授業だったが、しっかりと内容で、これまでの実践の成果が実ったと思う。これから議論を深めてほしい。

県NIE推進協議会 仲村守和会長

これからの活動が充実していってほしい。学習指導要領にも明記されているように、子どもたちの社会性を培ったり、読解力を高めたりするために、新聞をツールとした教育システムが非常に有効であることが認められている。ぜひ学校でもNIEを進めていただきたい。

新聞 社会性培うツール

来年度実践4校を募集

地元紙や全国紙 教材活用へ提供
県NIE推進協議会は、来年度の実践校4校を募集している。同協議会が日本新聞協会に推薦し、指定されると、地元紙に加え、全国紙(小学生は小学生新聞)も必ず、一定期間無償で提供される。

お問い合わせは TEL 0908(8)6601512 FAX 0908(8)553300

楽しみながら 教師は実践を

甲斐崇アドバイザー



これからの時代は、自分も社会の中でどの様に位置づけられるかを考えることが大事。教師自身が楽しんでほしい。決まってきたら、力をつけてほしい。

生活へと直結 記事が伝える

運天浩俊 教諭・北山高校
理科の授業では、日頃学んでいる理科の知識が生活に取り入れられているということを、記事を通して伝えていくことが良かった。理科に関する記事は見つけるのが難しい。教諭があらかじめ選んで提供することで学びを深める時間をつくっていた。参考にしたいと感じた。

生きた情報で 有用性を実感

大城隆浩 教諭・南風原中学校
生徒に「数学は役に立つ」と思ってもらえる。授業者数・率という生きた情報を使っていて、数学の有用性を感じ、関心を持ってもらっているのではないかと感じた。紙面に紹介してもらえるかもしれないと感じた。

れる。学校での学びと社会をつなぐNIE実践をしてほしい。

リーディング 深いある学び

伊波妙子 教諭・緑風学園(久志小学校) 英語の授業を履修した。新聞を使うことで、深いリーディングの学びにつながる感じた。子ども新聞の英語コーナーを使い、和訳の部分を通してクイズ形式の授業ができると思う。ぜひ応用したい。

小学校と中学 つながり発見

上江洲シヨアナかおる 教諭
沖繩アミークスインターナショナル NIEの実践をしているのは小学校が多い中、中学校で、それも教材で公開授業をしてみたいという声からすると、中学校のつながりが見えて良かった。

図21 NIEフォーラム掲載記事(沖縄タイムス H30.11.27)

(10) 『未来へ煌めけ』 中学生が輝く文化祭を取材！

12月9日（日），うるま市民芸術劇場「響」ホールにて開催された「第24回沖縄県中学校総合文化祭」に参加した（図22）。生徒会の9名が文化祭当日の様子を取材し，午前・午後と速報新聞を発行する取り組みである（図23）。『未来へ煌めけ，



図22 取材の様子

伝統文化，新たな時代が始まる』のテーマのもと，現場に立って取材することができてとても良い経験になった。取材は舞台部門，展示部門，ヤングパフォーマンスに分かれて行われた。舞台の部では，郷土芸能や少年の主張，合唱，リーコーダー，英語スピーチ，吹奏楽などが披露され，舞台裏で出場者に声をかけ一生懸命に聞き取り取材を行った。記者からインタビューの手法を学び，「過去・現在・未来」の聞き方で質問する手法を活用し，インタビューすることができた。展示の部では，美術や家庭科などの技能教科以外にも，国語や社会，数学，理科などの分野別のブースが用意され，各教科の特性を生かした展示や体験コーナーも設けられていて，体験型の取材にも挑戦した。ヤングパフォーマンスでは，圧倒的な熱気に取材を忘れるくらい夢中に鑑賞していた。参加した生徒は取材を重ねながら，中学生が生き生きと活動している様子や作品のすばらしさに感動していた。それを限りある紙面でどう伝えるのか考える機会ともなった。



図23 沖縄タイムス「ワラビー」掲載記事（H30.12.16）

(11) 『はがき新聞』で表現力を磨こう！

「はがき新聞」は、はがきサイズの大きさなので、無理なく活用できる。また、手軽に表現力のトレーニングができ、新聞的な文章の特徴を生かして書くことができる。国語科では我が国を代表する作家とその作品を紹介する内容で取り組み、社会科では歴史の授業において、時代を大観するまとめの作業として「はがき新聞」に取り組んでいる（図 24）。

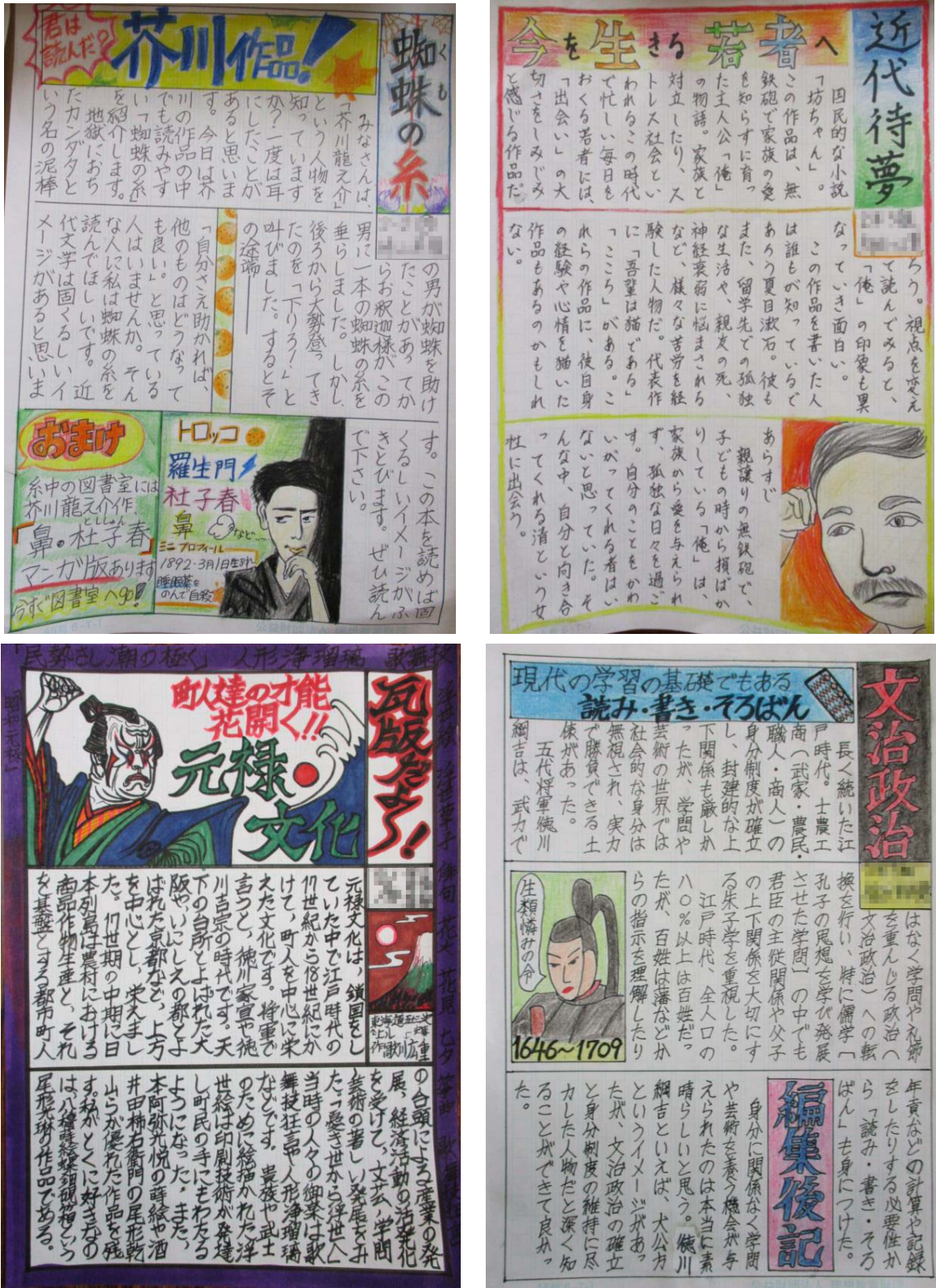


図24 生徒の作品「はがき新聞」

(12) 『糸満教育の日』公開授業

1月10日(木)開催された公開授業では、NIEの視点を取り入れた授業が多く実践された。「糸満教育の日」は、3つの趣旨があり、毎年午前中は公開授業、午後に表彰、講演会が行われる。公開授業は、学校、保護者、地域の連携を図り、学力向上に資することである。糸満市の教育施策のテーマは「幼児児童生徒一人一人に確かな学力などの生きる力を育む」、サブテーマは「支持的風土の学校、



図25 集中して記事を選ぶ

学級づくり、子ども主体の学び合い高め合う授業づくり、地域と共にある学校づくりを通して」である。公開授業を行うことで、子ども達も緊張感の中で、主体的に取り組む様子が見え、どの教科も「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業が中心であり、特に、

新聞記事を積極的に活用した授業が多く、保護者の評価も高かった。1年生の理科の授業では、琉球新報「りゅうPON」の記事を活用し、光のしくみを学んだ。1年生の社会科では、今年の日出された新聞記事から、元号と歴史学習を関連付け展開された。2年生の音楽では、沖縄タイムスの文化芸能面の「オペラ」の記事を活用し、鑑賞の授業が行われた(図26)。3年生の社会科の授業では、地方新聞や中央新聞、経済新聞の経済面を活用して興味を持った記事を選び、その記事に対する意見を述べ合った(図25)。4校時の道徳は、各学級が共通した内容で、各学年の重点項目にあった記事を選択し授業と関連させた。生徒は、記事に集中して読み込む姿があった(図27)。

糸満中「教育の日」に13学級
道徳の一斉授業公開

「糸満市教育の日」に合わせて糸満中学校(與那覇正樹校長)は10日、全学年の計13学級で一斉に道徳の公開授業をした。写真。教育の日には例年、午前中の4時間の授業を公開。来年度から教科になるのに備えて、全学級の4校時を道徳に充てた。

授業は読み物資料を中心に使用し、3年生では「感謝の念を感じる」ときをグループ

で話し合うなどした。授業後は2学期から全校で導入した振り返りシートを配布し、生徒の感想を把握した。玉城昇太教諭は「教科化では授業前後の生徒の変容を見ることが重要になる。きょうの授業では生徒の発言から変容が見えた」と振り返った。

同校は、NIE実践校に指定されており、全授業の半数で新聞記事を導入、展開、まとめのいずれかで使用した。宮里行乃教諭が担当する音楽では、オペラ鑑賞の単元で出身の音楽家の記事を使い、親近感を持たせた。

図26 授業のようす(沖縄タイムス H31.1.13)



新聞記事読み 学び深め合う

糸満中で一斉授業

「糸満教育の日」にちなみ糸満市立糸満中学校（我那覇正樹校長）は10日、1〜3年生の11クラスで新聞



を教材に活用するNIEの授業を開いた。道徳、理科、保健体育、音楽、社会を担当する教員が、各分野に関連する新聞記事を授業の導入に使ったり、写真やグラフを活用したりした。写真。生徒は記事を読んで感想や意見を出し合いながら学びを深めていった。

我那覇生太教諭は3年生の道徳の授業で、東日本大震災の被災者が暮らす避難所の様子を描いた教材を用いた。嫌々ながら避難所で

炊き出しの係をしていた少女が、一緒に活動するボランティアの情熱に引き付けられ、やりがいを見いだしていく話だ。

我那覇教諭は授業の初めに、1月9日付県内紙に掲載された、ひとり暮らしの高齢者のために地域の女性たちが手作りおせちを届けるという内容の記事を生徒と一緒に読んだ。「炊き出しのイメージをつかんでほしいと考え、記事を使ってみた」と我那覇教諭は振り返る。生徒の感想の中では、思いを込めて料理することを表すウチナーグチ「ていーあんだー」という言葉も飛び出した。

図27 授業のようす（琉球新報 H31.1.18）

(13) 新聞投稿への挑戦

国語科を中心に、新聞投稿に挑戦している（図 28）。新聞の記事や投書記事から課題を見つけ、自分の考えを持つことがねらいである。文章では「構成の型」を用いる。最初に自分の意見（立場）を示し、根拠をあげて、最後にもう一度意見をまとめる。特に、調べて分かったことや経験などから根拠をあげることに気を付けている。書いた文章は友だち同士で読み合い、「構成の型」を確認しあっている。

安全に暮らす権利

糸満市立糸満中2年 大城 心夏

日本は安全だ。しかし、縄の人々は誰もがそうだ。沖縄はどうだろう。私は、米軍ヘリコプター部品の沖縄県民にも安全に暮らす落下があった宜野湾市の緑権利があり、日本は沖縄とケ丘保育園では、事故後、向き合うべきだと思う。子どもたちや職員のケアをあらゆる場所で事件は起こる。米軍機部品落下事件。行っていた。また信じられないことに、保育園には誹私はそういったニュースを謗中傷のメールが殺到した聞くたびに不安になる。沖という。「お前らがヘリは

飛ぶなどといったら、誰が日本を守るんだ」。私はこの言葉を聞いて、とてもショックを受けた。日本を守るためには、沖縄が犠牲にならないければならぬのか。沖縄の安全も守られるべきだ。

沖縄にも安全な空の下で生活する権利があり、日本はもともと沖縄と向き合うべきだと考える。

僕の主張 ■ 私の意見

特設授業で学んだ郷土の歴史

糸満市立糸満中2年 新垣 哲郎

私たちは日々、さまざまな授業を受け、多くのことを学んでいるが、育ってきた地域の歴史をきちんと知っているのだろうか。

私はすべての学校で、地域の歴史を学ぶ授業を取り入れるべきだと考える。先日の新聞にも掲載され

特設授業を通して、私はあらためて地域の歴史を深く知ることができた。僕たちが歴史を知ることが、後世へと歴史をつなぐことにもなる。

だから、地域の歴史を知り、後世へ伝えるためにも、多くの学校で地域を知るための授業をもうけるべきだと思う。

図28 新聞投稿（左：琉球新報 H30.6.5）（右：琉球新報 H30.6.7）

4. 成果と課題

(1) 成果

- ・新聞コーナーや閲覧コーナーがあることで、日常的に新聞に触れていた。
- ・教科の授業や道徳、学級活動でも活用できた。
- ・新聞活用だけではなく、投稿や「こども新聞」作成などにも挑戦できた。

(2) 課題

- ・新聞コーナーや閲覧コーナーの充実、さらに主体的に新聞に触れる工夫。
- ・カリキュラム・マネジメントの視点や教科横断的な新聞活用工夫。
- ・校内研修にて理論的に学び、教科学習の中で積極的に新聞を活用できる教材化を進める。

日常的な新聞活用を目指して

～うるま市立川崎小学校のNIEの取り組み～

うるま市立川崎小学校
教 頭 甲斐 崇

1 はじめに

うるま市立川崎小学校（校長 伊波みどり）は、本島中部に位置する在籍413名の中規模校である。2017年度、NIEアドバイザー甲斐の赴任に伴い、校長の方針のもと、初めてNIE（Newspaper in Education）の協会指定校として認定を受け、1年目の昨年度は環境整備や情報提供、できる範囲の授業実践を行ってきた。

2018年度、NIE実践指定校2年目の今年度は、昨年度の成果を踏まえ、校内研究に新聞活用を取り入れ、授業実践を全学年で行い、あわせて新聞に慣れ親しむための日常活動としてNIEタイムを取り入れた。

2 新聞の活用に向けた環境整備

(1) 理論研修の実施～校内研究での実践を踏まえ～

平成30年度は、校内研究のサブテーマとして、「各教科における新聞の活用と発問の工夫を通して」を設定することになったため、3月に校内研究全体会の中で、教頭が講師として理論研修を行い、NIEの実践事例やNIEタイム等の例を中心に共通理解を図った。また、夏季校内研修においても、理論研修及びワークショップを行い、全学年で新聞活用に向けた足がかりを作ることができた。



＜夏季校内研修の様子＞

(2) 情報提供から～書籍コーナー及び教頭だより等での紹介～

昨年から取り組んでいることとは言え、初めて実践する職員もいるため、情報提供として、昨年に引き続き、定期的に発行している教頭だより等で、推進協議会主催のセミナーの案内や、新聞の構造やNIEの実践やワークシートの紹介を行った。また職員室内に、NIE関連の書籍コーナーを設け、必要に応じていつでも情報収集ができるようにした。

(3) レッツチャレンジ！NIE等の活用

執筆している琉球新報小中学生新聞りゅうPON!の『レッツチャレンジ！NIE』を月に2回の掲載後に特別支援学級含めた全学級に配布。毎回ではなくとも、担任が判断して使えるようなワークシートであれば、授業や隙間時間、宿題として活用してもらうよう呼びかけている。

(4) 図書館司書、図書委員会の協力による環境整備

NIEの実践を進める上で、メディアセンターとしての学校図書館の活用、そして司書の協力

は欠かせないものである。今年度も引き続き、司書に協力を依頼し、図書室横のスペースにNIEコーナーの充実を図った。

① 新聞閲覧コーナー

今年度は新聞架けを寄贈してもらい、入口近くに新聞が整理して置けるようになった。また昨年同様新聞を自由に閲覧できるようにした。子どもたちだけでなく、職員、来校した保護者も新聞を広げ目に見えている姿が見られている。



＜図書室前NIEコーナー＞

② 記事紹介コーナー

司書のセレクトで、その時期に読ませたい記事や紹介した記事を、切り抜いて掲示し紹介している。また、子ども新聞内の人気のある定期連載等は継続して貼っており、児童がめくりながら見ることができるようにしている。

② 投書&掲載コーナー

職員や子ども達に呼び掛けて投書を促し、掲載された投書や、活躍が紹介された記事を集めて掲示している。掲載された子をほめる場として、また他の子どもたちのお手本として活用している。また、新聞活用の成果の場の一つとして定期的に新聞への投書を行うよう呼びかけた。



＜投書&掲載コーナー＞

④ 図書委員会による新聞スクラップ

図書委員会の日常活動の一つとして、毎朝職員室に新聞を取りに来てもらうことと、新聞スクラップに取り組んでもらった。スクラップした作品は図書室前に掲示し、全校児童が見てもらえるようにした。

⑤ 新聞の保存管理について

本校は、協会指定校として配達されている県外紙4紙、県内紙2紙以外に、学校独自で県内紙2紙を購読している。新聞は、司書の協力を得て種類別・月ごとに司書室に保存をしている。記事の中で、授業等で必要な場合は、なるべく切り取らずにコピーして使うようにした。また司書が使えそう記事をピックアップして職員室の司書の机の上に置いたりする等、活用の工夫を行った。

(5) 県NIE推進協議会のセミナーへの定期的な参加

校内研修でも理論研修やワークショップを行ってはいたが、全てを網羅することは難しかったため、推進協議会主催のセミナーへの参加を定期的に促し、常に一人以上の参加を果たせた。特に6月30日に行われた「切り抜き新聞セミナー」には8名が参加し、切り抜き新聞の手法をワークショップ形式で学び、その後学級での実践に取り入れることができた。

このような取り組み以外に、学年広場や廊下等の掲示板にも積極的に新聞を掲示している箇所もある。現在では、図書館に本を借りる際や、廊下を歩く際に、立ち止まって新聞を眺める児童を多く見かけるようになり、掲示物の更新を楽しみにしている児童も多い。

3 2018年度の実践事例

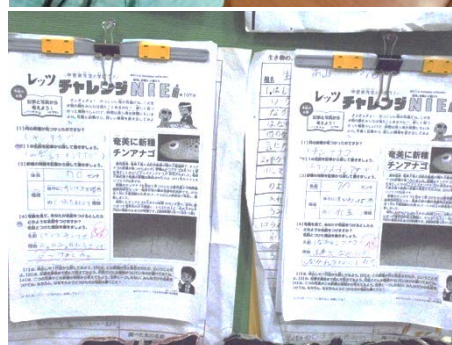
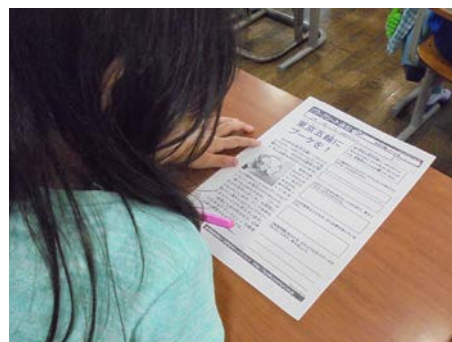
今年度は、校内研究に新聞活用を取り入れたことにより、全学年での授業実践が実現できた。また、子ども達が新聞に慣れ親しみ、授業でスムーズに活用できることを目指して、NIEタイムを取り入れた。

(1) NIEタイムの実施

毎週月曜日、朝のドリルタイムの時間を「NIEタイム」と位置づけ、全学年で（1年生は2学期からの実践）新聞を使った日常活動を行った。

① ワークシートの活用

開始当初は主に、各新聞社が提供しているワークシート（読売新聞ワークシート）や琉球新報小中学生新聞「りゅうPON」のレッツチャレンジ！NIEの活用を中心に行った。あまり新聞を読んだことがない児童の新聞に対する抵抗感をできるだけ無くすこと、また新聞を活用した実践経験がない職員にもすぐに取り組みやすいという利点があるためである。活用に当たっては、発達の段階に考慮し、すぐにワークシートを解かせるだけではなく、記事にある写真を書画カメラで提示して興味関心を起こさせたり、一緒に記事を読んだりするなど、工夫を行った。ワークシート実施後には、教室の背面掲示板や広場の掲示板に掲示する等、実施したことが足跡として残るようにした。



<ワークシート実施の様子と掲示板>

② スクラップ等

本来、新聞を授業で活用したり、自分で新聞を開いて読んだりすることを活用の一つの目標としていたが、ワークシートの実施だけではその実現は難しい部分があった。そこで、夏季休業中の職員研修で、NIEタイムの取組についても振り返り、ワークシートだけでなく、記事にも直接ふれる活動にシフトチェンジすること、特定の記事を配布しての学習や、新聞から好きな記事を選んで要約する新聞スクラップ等を行う確認を行った。



<記事を紹介し合う様子>

2学期以降は、ワークシートも活用しつつ、低学年ではカタカナ探しや習った漢字を探す取り組みや、研究授業との関連で記事の中の写真や数字にふれる活動、総合的な学習の時間との連動で、沖縄に関する記事を集めたり、スクラップしたりする活動、高学年では新聞スクラップをする等、発達の段階に応じてNIEタイムを充実させていくことができた

(2) 校内研究での取り組み

校内研究のテーマ『思考力・判断力・表現力の育成』を目指すために、平成30年度は、「各教

科における新聞の活用と発問の工夫を通して」をサブテーマに設定した。平成29年度全国学力・学習状況調査、児童質問紙の本校の結果では、「地域や社会で起こっている問題や出来事に興味がありますか」の設問では、「当てはまる」が全国より3.7ポイント高くなっている。このような地域や社会への関心の高さを生かしつつ、必要な情報を取捨選択したり、様々な情報を通して自分の考えを形成する学習活動を充実させたり、語彙を広げながら多様なテキストに対応する力をつけたりする学習活動を工夫することで、思考力・判断力・表現力の育成につながると思え、そのような学習活動に最適な教材として「新聞」に着目した。

本校では、各教科等のめざす思考力・判断力・表現力の「身に付けさせたい力」を明確にした上で、児童の興味関心をもとに、新聞や新聞記事を教材化することにした。その過程で、考えさせたり、判断させたり、表現させたりすることを目指した。また、調べたことや学習したことを新聞にまとめる学習活動は、思考の整理や表現力の育成に繋がると考えた。その際に、新聞等を教材化したワークシートにおける「設問」や学習課題も、広く「発問」と捉え、学習活動を活性化し、それらを積み重ねることで、思考力・判断力・表現力の育成を目指した。以下は、各学年が行った授業実践の一覧である。低・中・高学年の隣学年部会のうち、1年・3年・5年が主事等を招聘しての全体での公開授業実践を行った。

＜各学年の授業実践一覧＞

学年	教科	単元名・教材文	実践内容
1年	国語	どうぶつになって、おはなしをしよう 『うみへのながいたび』	第三次 お気に入りの新聞記事(写真)をもとに動物の言葉を考える 関連新聞「琉球新報 アニマルワールドシリーズ」
2年	国語	『絵を見てお話を書こう』	第二次 新聞記事(写真)から、想像を膨らませて、お話づくりに必要なメモをする。
3年	算数	大きい数のたし算とひき算 『大きな数』	日本の離島への観光客に関する新聞記事から、観光客数の大小を比較したり、合計を計算したりする。 関連新聞「琉球新報 日本の離島」
4年	国語	「ウミガメの命をつなぐ」紹介記事を書こう 『ウミガメの命をつなぐ』	第二次 作ったメモや実際の新聞記事から、紹介したい文を要約したり、書いた要約文を見直したりする。
5年	国語	新聞を読もう	二つの記事を読み比べ、見出しをつけたり、記者の伝えたいことを考えたりする。
6年	総合	「沖縄戦」について考える ～慰霊の日に向けて～	沖縄戦に関する記事から、記者が伝えたかったことについて考える。関連記事：琉球新報2012年6月20日「竹槍かたみてい」等

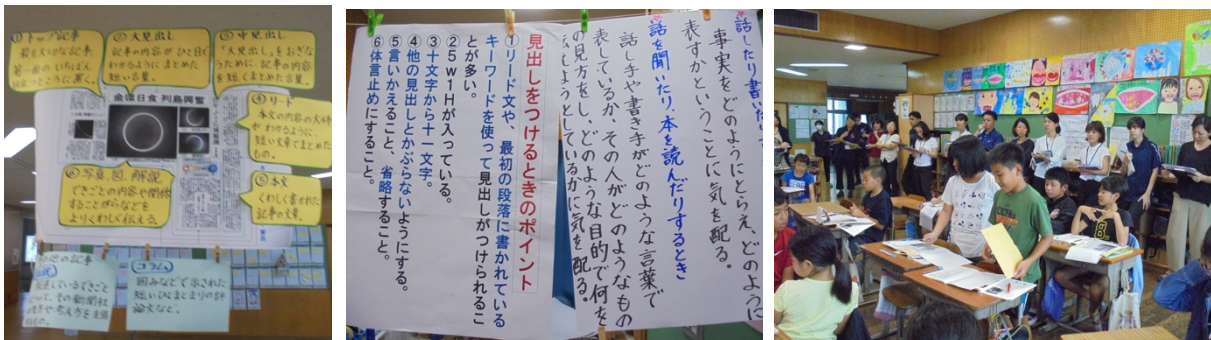
(3) 各学年の実践から

① 5年生の実践紹介～国語科、「新聞を読もう」～

国語の教材文に位置付けられている「新聞を読もう」。国語の教科書で新聞を読むこと自体を扱うのはこの単元のみである。そこで、本教材において新聞の特徴や構成について知り(第

1時)、記事の書き手が「どのような見方をし、何を読み手に伝えようとしているのか」を考え(第2時)、記事を読み比べ、見出しをつけてその理由を話し合う活動(第3時)を通して、読み手も受け取り方の違いがあることに気づかせることをねらった。

本時の授業では、名古屋港水族館にシャチが到着した2つの記事を教材化し、2つの記事を読み比べさせ、それぞれの見出しをつける活動を行った。また、教科書の教材の2つの囲み記事の見出しを選び、理由を説明し合う活動を行った。それぞれの記事を読み比べる活動を通して、記者の伝えたいことが違うこと書きぶりや表現のしかたが違ってくことや、読み手が考えて読む必要があることを捉えることができた。



＜単元で使った掲示資料や本時の研究授業の様子＞

② 3年生の実践紹介～算数科、「大きな数」～

3年生の児童は、社会科でうるま市の5つの離島について学習し、関連して総合的な学習の時間で離島パンフレット作りを通して、それぞれの離島の良さや特徴について発見する学習を行ってきた。今回の「大きな数」では、単元の終盤にある「大きい数のたし算とひき算」において、琉球新報の小中学生新聞りゅうPONで紹介されていたビジュアル版「日本の離島」を活用した。うるま市の離島から、日本全国の離島に興味を広げつつ、離島を訪れる観光客数に着目してランキング(大小比較)をつける活動を行い、本時では沖縄の離島を訪れる観光客数の和を求める活動を通して、様々な方法を出し合い、簡略化の良さ気づかせることができた。

今回の実践にあたっては、毎週月曜日に行っているNIEタイムも活用し、「新聞記事から数を探そう」と題したスクラップを行い、一人一人が新聞記事の中から様々な数を探し、その表記の仕方にふれることができ、数のまとまりで表す良さにも気づかせることができた。また、新聞に関する掲示物等も工夫を行い、本時の課題に見通しをもって、主体的な学習ができるようにした。



＜本時の研究授業の様子やNIEタイムで行ったスクラップ＞

③ 1年生の実践紹介～国語科、「どうぶつになって、おはなしをしよう」～

教材文「うみへのながいたび」は、白くまの親子の海への長い旅の様子がナレーション風
に書かれている。教材文の学習では、文中に登場する生き生きとした熊の写真をもとに、お
話の順序や出来事確かめ、それぞれの場面での白くまの親子の言葉を考えたりした。次に、
関連新聞教材として、「琉球新報小中学生新聞りゅう PON のアニマルワールドシリーズ」を用
意し、保護者や6年生協力を得て新聞を読んでもらうことで読み取りを行い、分かったこと
や思ったことをワークシートに書いた。「アニマルワールドシリーズ」には様々な動物が紹介
されているが、その中から社会見学で行った「沖縄こどもの国」で見た動物やその仲間の動
物が掲載されている記事を選択することで、興味関心を持って動物の紹介や写真から想像を
広げて読むことができると考えた。本時では、そのワークシートをもとに、その中からお気
に入りの動物の記事を選び、記事や写真から分かったことを伝えたり、それらの情報から動
物の言葉を考えたりすることができた。



＜本時の板書や研究授業の様子＞

4 成果と課題

(1) 成果

- ① 情報提供等の環境整備により職員のNIEへの理解が徐々に得られた。また、今年度は学校全体でNIEタイムを取り入れ、新聞に親しませることで、子どもたちにとっても新聞が身近になり、興味関心の範囲が広がり、身近な事象をより知ろうとする態度が見られるようになった。
- ② 低学年では、新聞に使われている写真や記事を自分で選んで活動したことで、興味関心が高まり、主体的な学習を促すことができた。
- ③ 高学年では、5W1Hを意識して読むことで、自分の目的や意図に応じて必要な情報を取捨選択しながら読めるようになってきた。

(2) 課題

- ① 指導事項に合った新聞記事の選定や、本時のねらいに迫る効果的な活用の工夫。
- ② 日常化や教材化に向けた各教科領域での新聞活用計画の立案。

(3) 次年度に向けて

- ① NIEタイムは、継続して実践し、新聞に慣れ親しみ、日常的に新聞を読む機会を設けるようにする。

平成 30 年度 名護市立久辺小学校 NIE 実践報告書

名護市立久辺小学校 校長 伊波 和子

N I E 担当 教諭 東盛 麻里

1 はじめに

本校では、平成 28, 29 年度沖縄県、30 年度は日本新聞協会の指定を受け、新聞を活用した教育活動を行ってきた。これまでは高学年中心に行われてきたが、今年度から全学年で取り組んだこともあり、全校体制で新聞活用を意識することができた。主な活動として、おでかけりゅうPON、沖縄タイムスNIE出前授業の活用、気になった記事を選んでの感想記述、同一記事に対する意見交流などである。また、新聞読者欄への積極的投稿や壁新聞コンクール及び新聞感想文コンクールなどへの取組、国語科の授業における新聞活用等も行った。さらに、校内研修テーマ「自分の考えをもち、表現できる児童の育成」とも関連させ、実践にあたった。その具体的実践について報告する。

2 本校の取り組み

本校では以下のねらいのもと、NIE活動を実践してきた。

- (1) 児童の言語力を向上させる。
- (2) 社会的事象に対する興味関心を広げ、情報を取捨選択する力の基礎を養う。
- (3) 身近な地域の自然や生活の営みに対する情報を共有し、人と人とのつながりから成り立つ生活のあり方を考える力を伸ばす。
- (4) 教師集団の社会認識及び情報の共有化とコミュニケーション力を向上させる。
- (5) 複数の新聞を読むことにより、報道には様々な角度があることを理解していく。

全校体制で取り組むために、学年の発達段階に応じた実践内容を定め、学校全体としてNIE活動の充実が図れるようにした。また、児童がどのような活動をしているのか、保護者や地域の方々にも周知できるように、授業参観や学校行事等で活動ノートやファイル、実践の様子を写した写真等を掲示し、紹介した。



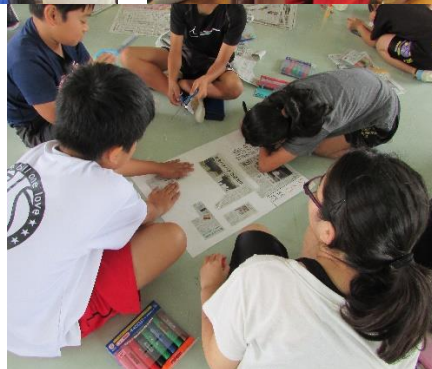
3 実践事例

(1) 沖縄タイムス社及び琉球新報社による出前講座

沖縄タイムス社のN I E出前授業では記者を招き、5、6年生を対象に「新聞に親しみ、新聞について学ぶ」ための授業を行った。その中で、新聞がどのように構成されているのかを確認した上で、グループごとに気に入った記事を切り抜きし、記事につける全体のテーマを考える作業を行った。

普段、新聞は「難しい読みもの」と思っていた児童にとって新聞は「楽しいもの。楽しむもの。」という意識の変化があったように感じられた。また同じ日の新聞であっても気に入った記事はそれぞれちがうということも実感でき個々の感じ方の違いを認め合うことにもつながったように思う。

琉球新報社の「おでかけりゅうPON」では、3～6年生までを対象に、新聞ができるまでの過程について学習した。新聞記者が取材をして記事にするまでの様子を実際に見ることができ、児童相互で取材し合う活動を通して、取材の重要性及び文章化することの難しさなどを体感している様子であった。



(2) 毎週木曜日朝の活動 (N I E イム)

毎週木曜日、本校ではN I Eタイムと称した朝の活動を行っている。低学年においては「新聞を楽しむ」、中学年は「新聞に慣れる」、そして高学年では「新聞に親しむ」ことを目標において活動を行ってきた。

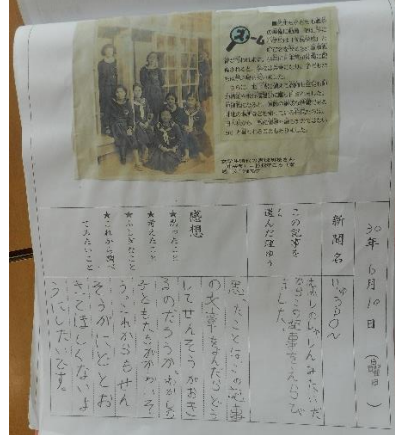
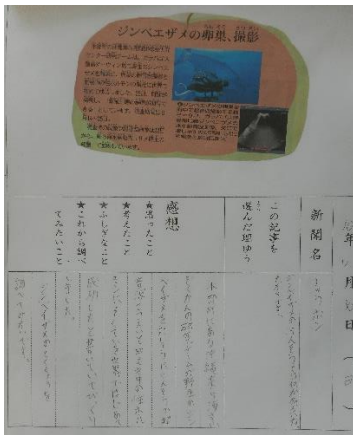
具体的な活動内容は以下の通りである。

学年	具体的内容
1 学年	○教師による記事の読み聞かせ ○好きな写真を選ぶ ○習った漢字を見つける
2 学年	○教師による記事の読み聞かせ ○ペアで写真の紹介をする ○グループで写真や簡単な見出しの紹介をする
3 学年	○教師による記事の読み聞かせ ○子ども新聞を読む ○気になった記事を切り取る ○記事に対する感想を書く ○感想をグループで交流する
4 学年	○教師による記事の読み聞かせ ○子ども新聞を読む ○記事に対する感想を書く ○感想をグループで交流する
5 学年	○教師による記事の読み聞かせ ○気になった記事を読む ○記事に対する感想を書く ○記事を紹介し意見交換をする
6 学年	○教師による記事の読み聞かせ ○気になった記事を読む ○記事に対する感想や意見を書く ○記事を紹介し意見交換をする

実践に際して、「①新聞に親しむ ②新聞を読む ③新聞を読んで考える ④発信する」という学習の流れを意識すると共に、各学年の発達段階に応じて実践するように努めてきた。また、児童が無理なくかつ楽しみながら活動できるように配慮した。



《N I E タイムの活動の様子》



《児童のNIEノート/ファイル》

(3) 学校壁新聞コンクールへの出品

新聞を「読む」ことから「つくる」ことへもつなげていった。高学年では、社会科や総合的な学習の時間に学んだことを壁新聞にまとめて発信する活動を行った。日々のNIE関連学習から、見出しの工夫の必要性や、記事の内容の明確化、そして誰もが楽しめるエンターテインメント性を考慮した紙面作りが大切ということを知り、その学びをもとに壁新聞制作にとりかかった。

新聞は「事実を伝えるものである」という前提のもと、記事一つ一つが感想文になっていないか確認したり、読者にわかりやすい記述になっているか確認したりしながら制作していった。6年生では、5グループすべての作品が「琉球新報社主催学校壁新聞コンクール」において金賞を受賞することができ、児童個々のNIE活動に関する意欲がさらに高まったように感じている。

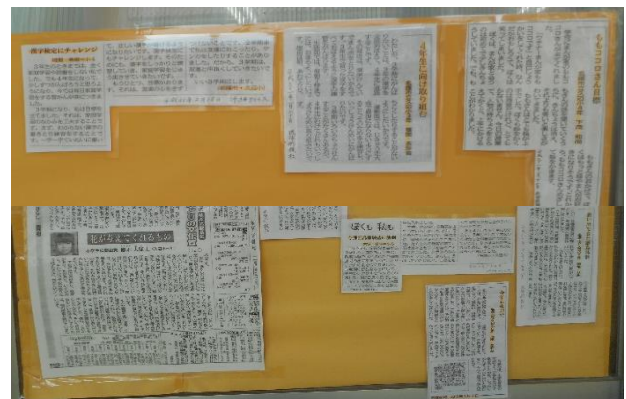
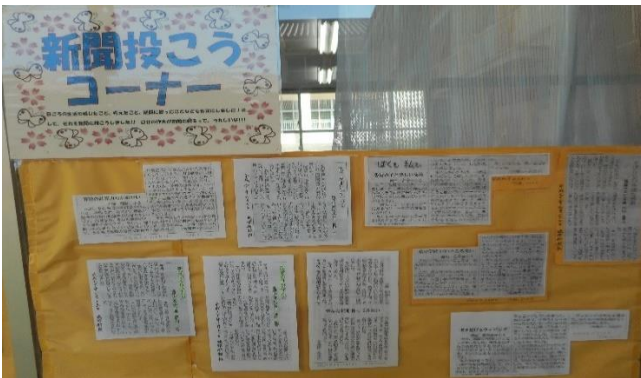




6年生は、総合的な学習の時間に行った《ジョブシャドウイング》の様子を新聞にまとめた。学んだことや感じたこと、将来につなげていきたいことを自分の言葉でまとめて壁新聞という形で発信することができた。

(4) 新聞読者欄への積極的投稿

「日々の生活の中から感じたことや学んだことを文章化し、より多くの方に向けて発信しよう」と、新聞読者欄への投稿も行った。作文を書くことに苦手意識のある児童も、400字程度という記述量に無理なく取り組むことができたように思う。また、掲載されることで達成感を味わい、次への意欲にもつながっていったように感じる。掲載された記事については、全児童に見てもらおうと、廊下の一角に「新聞投稿コーナー」をつくり、掲示した。その結果、互いに掲載を喜び合ったり励まし合ったりして、NIEに関する意識が高まった。



4 成果と課題

全校体制で積極的に新聞を活用した学習活動を仕組むことができ、児童が広い視野にたって物事を考える機会をつくることができたと感じている。一般紙では難しい内容も、子ども新聞でわかりやすく解説されている記事を読み、自分なりに内容を読み取り、そして感想をもったり考えを交流したりできたと思う。時事問題が自分達の生活にいかに関連しているか、身近な問題かを実感できることも少なくなかったと感じている。また、読者欄への投稿に意欲を見せ始め、感じたことや考えたことを自分の言葉で表現して発信したいという児童が確実に増えた。そして、読み手のことを意識して文章を書くことができる児童も増え、今後は書く力の向上につながるものと期待している。

一方で、学校の教育活動でどのようにNIEを取り入れ活用していくか、その研究不足を実感することもあった。新聞を通して得た知識を、児童一人一人が自らの生活にどう生かしていくのか、その見通しが我々教師側に十分にはないということである。身につけた力をより効果的に活用し、そして幅広い分野で生かしていけるよう、教科指導は勿論のこと、学校の教育活動全体を通して生かしていけるよう、教師側の研究・研修を深めていくことが課題である。

次年度、課題解決に向けて取り組むことで、児童一人一人が、新聞に親しみ、新聞を通して学び、考え、そしてあらたな考えを生み出したり広げたりできるように、NIE活動の更なる充実を目指していきたい。

1 はじめに

本校は、今年度より日本新聞協会指定 NIE 実践校となり、5 学年を実践学年として新聞を活用した教育実践に取り組んだ。本校にとっては初めての実践指定校であり、実践の手法を模索しながらの取り組みではあったが、新聞に触れ、親しむことを重視し、国語や道徳、朝の会など、日々の授業の中で新聞を活用するよう心がけた。

2 NIE と校内研修との関わり

本校の校内研修主題は「読む力を高め、考えを広げ、深め、表現することができる児童の育成」である。本校児童は、県到達度調査や全国学力状況調査などから、資料や文章等の中から目的に応じて必要な情報を捉える「読解力」や条件に合わせて「記述する」ことに課題が見られる。そこで、日常的に新聞を活用することで、児童の「読む力」「書く力」を高めることができるような学習指導を校内研修と関連づけながら実践した。

3 具体的な実践例

(1) 新聞スクラップ

自分が興味のある記事を切り抜き、内容を要約した後、その記事に対する自分の感想や意見をまとめていった。スクラップにまとめた後は、友達同士で見せ合い、意見交流を行った。



よし、この記事をスクラップにするぞ



じっくり読むといろんなことがわかるね。



この記事のこの部分、読んでみて!



私は、サッカーの記事に興味を持ちました。



自分の考えを発表するのは楽しいな。



ぼくは、政治の話が気になりました。



内容を要約することにもしだいに慣れ記事に対して、自分の考えを書けるようになってきた。



道徳「慰霊の日」平和学習では、沖縄タイムスワラビーの沖縄戦特集記事から戦争体験者の思いを捉えていた。

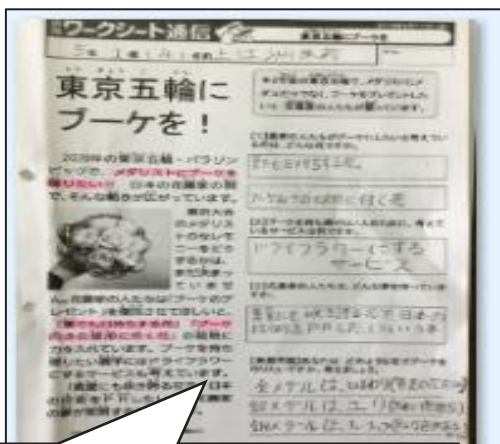


家族や友達にも記事に対する感想や意見をインタビューして、自分の考えを深め、まとめて書くことができた。

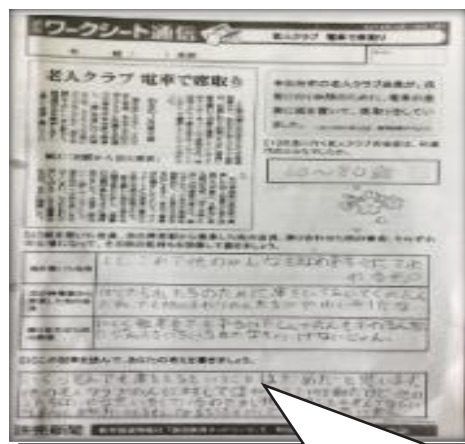


(2) 読売新聞ワークシート通信

読売新聞ワークシート通信を活用し、朝の時間や道徳の時間などで取り組んだ。最初の頃は、自分で内容を読むのが難しい児童もいたため、低・中学年のワークシートを使用したり、教師が読み書かせ解説したりしながら新聞を読むことに慣れていった。



最新のニュースが多く扱われており、児童も意欲的に取り組んだ。



ニュースの出来事を自分事として考えるきっかけとなった。

(3) NIE 出前講座

琉球新報社の関戸塩記者をお招きし、「おでかけりゅうPON」の出前講座を実施した。

今回は、二部構成で、第一部は新聞の構造や作り方をはじめ、記者の仕事内容、取材の仕方などを学ぶことができた。「見出し」や「リード文」「本文の逆三角形構造」など新聞の紙面構成を知ることによって、新聞に対する知識や見方が広がり、新聞に対する関心が高まった。中には、初めて新聞記者に接したり、新聞を読んだりした児童も多く、興味深く関戸記者の話に聞き入っていた。

第二部は、「コラ川道場」と題し、新聞切り抜きによるコラージュ川柳作りに挑戦した。

児童は、五七五の文字数に合わせて言葉を選び、生き生きと活動に取り組む姿が印象的であった。



琉球新報の関戸塩記者



記事は逆三角形になっているだね



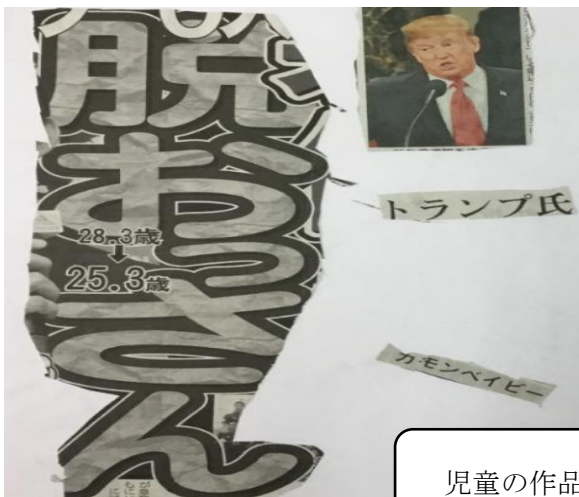
一つ一つの言葉に注目しながら切り抜く



新聞川柳 楽しくできた

浦添・仲西小 本紙出前講座で挑戦

【浦添】浦添市立仲西小
 学校（島尻順子校長）5年
 生95人を対象とした出前講
 座「おでかけりゅうPON
 N!・コラ川道場」が7日、
 同校体育館で開かれた。子
 どもたちは新聞切り抜きに
 よるコラージュ川柳作りに
 挑戦し、「トランプ氏 カ
 モンベイビー 脱おっさ
 ん」などの作品ができた。
 講座の前半は本社読者事
 業局の関戸塩氏が新聞の仕
 組みを解説した。川柳作り
 で子どもたちは、「五七五」
 の文字数に合わせて言葉を選
 び、生き生きと活動する姿
 が印象的であった。関戸記
 者は「新聞記者の七つ道具
 を知る事ができた。コラ
 ージュは難しかったけど、ま
 た作りたい」と話した。



児童の作品

4 成果と課題

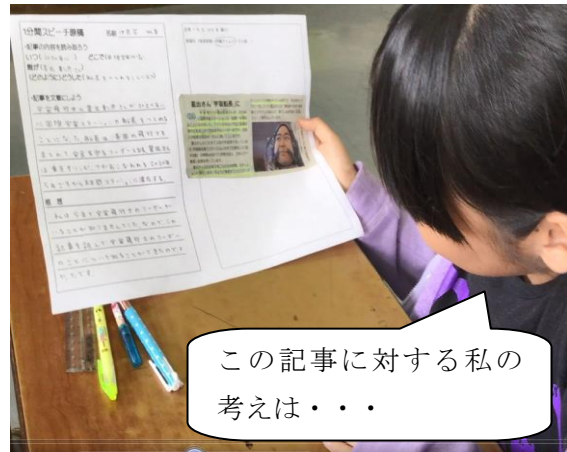
(1) 成果

- ①学年で取り組むことにより、どの児童も新聞に関心を持つようになり、日常会話の中でニュースの話題がでるようになった。
- ②新聞を読むことに抵抗がなくなり、進んで記事を選んだり、あらゆる視点から自分なりの考えを持ったりできるようになってきた。また、記事に対して友達や家族にインタビューする活動を取り入れることで、自分の考えを深めていく様子が伺えた。
- ③新聞を書く際には、逆三角形の構造で書いたり、レイアウトの仕方や見出しを工夫したりする等、新聞の基本的な書き方が身についてきた。
- ④新聞スクラップの学習は、多くの記事の中から必要な情報を捉え、それを根拠として自分の考えをまとめていく力の素地を育んだ。

(2) 課題

- ①日々の授業の中で、効果的にNIEを活用していくための工夫。(時数確保、教材研究等)
- ②新聞を身近に触れるための環境作りや新聞の確保。
- ③授業づくりの方法や記事の選定方法について教師の共通理解。

【NIEに取り組む児童の様子】



平成 30 年度 読谷村立古堅南小学校 N I E の実践

読谷村立古堅南小学校
教諭 伊波 まどか

1 はじめに

古堅南小学校は、2018 年度から NIE 実践校（日本新聞協会指定）として認定され、今年度が初めての実践になる。【新聞に親しみをもって、読む（見る）習慣をつけよう】ということを目指として、6 学年を中心に活動している。子どもたちの発達段階に応じて、無理なく、負担なく、楽しみながら実践していくことを心がけている。

2 具体的な内容・取り組み【6 学年】

(1) 環境

- N I E コーナーの設置（学年廊下）

壁面には、その時期に合ったものや、児童の興味関心に沿った紙面を掲示する。新聞社への投稿で掲載された児童の文をラミネートし、貼っている。机の下には、今までの新聞をためておき、いつでも手に取り、見られるようにしている。



(2) 授業での実践など

- 国語「3 字以上の熟語の構成」
新聞の記事から熟語を探し、辞典でその意味を調べる。
- 国語「日本語の文字」
短い記事の一つを選び、その文の中にあるひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字を探す。
- 南っ子祭りで販売する、商品のポップ作成
レイアウトやレタリングの参考にし、目立つ・見やすいポップ作成を行う。



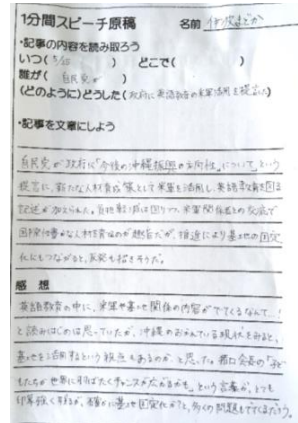
(3) 取り組み

- 新聞社への投稿

児童の意見文・感想文や、日記などを投稿し、興味関心や意欲を高める。

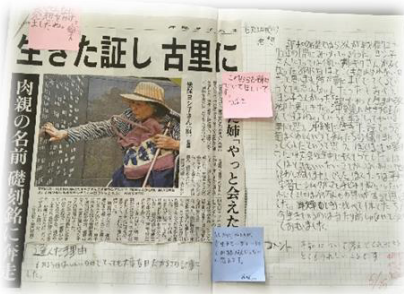
- 1分間スピーチ

見出しだけを見て、気になった記事を切り抜き、その記事の要約や感想をまとめて発表する。



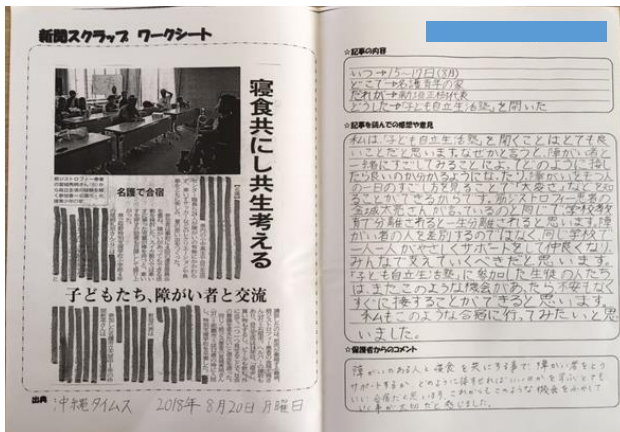
- 新聞スクラップ

毎週金曜日の課題として、気になった記事を切り抜き、「いつ、どこで、だれが、どうした」、記事を選んだ理由、感想を書き、保護者からのコメントをもらい、提出する、その後、グループで読み合い、コメントを書き合う。



- しんぶん感想文コンクールの参加

毎週の新聞スクラップで行っていることをワークシートに書かせ、コンクールに参加した。



スポーツにしか興味がなかった子が、ほかのジャンルの記事を選んできたりする等、興味関心の幅が広がったように感じる。また、感想の内容や書く量も増えてきている。

保護者も協力的で、子どもの感想を見て、子どもに合った視点でコメント書いてきてくれている。

平成30年度 N I E 実践報告書

石垣市立 石垣小学校

本校は平成29年度より沖縄県N I E 推進協議会指定実践校（独自認定校）の指定を受けて参りました。

主に県紙2社、島内紙2社の新聞を活用して行ってきた活動の報告を致します。

1 授業での活用

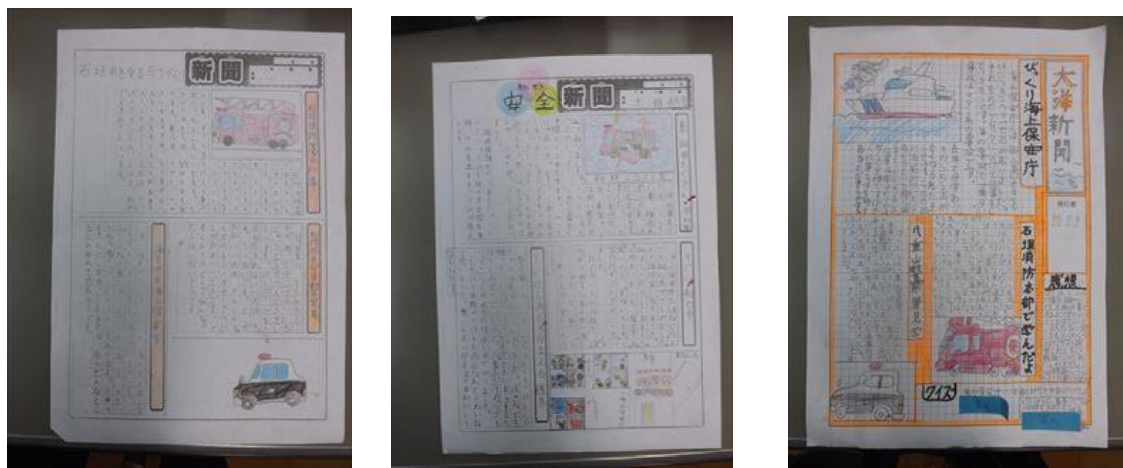
（授業例：4年生国語）

光村図書国語4年（上）「かがやき」の「新聞を作ろう」（5月下旬：15時間）の単元の学習で、新聞を活用しました。

総合的な学習の時間や社会科の時間を利用して行った校外学習のまとめとして新聞作りを行う際に、実際の新聞を活用して構成を学びました。また、同じ日に発行された数社の新聞を見比べ、同じ出来事であっても書く人によって見出しも記事の内容も少しずつ違ってくることなどを確認することもできました。

新聞作成において、実際の新聞を参考にしながら作業を進めることで、よりよい物を作ることができました。

また校外学習後、見学した施設に関する記事を担任が取り上げて紹介する機会ももちました。



（警察署・消防署・海上保安庁を見学し新聞作成）

2 環境整備

(1) 掲示コーナーの活用（図書館事務が担当）

図書館から児童玄関へとつながる階段の掲示板に「NIEコーナー」を設置し、各紙に掲載された本校に関わる記事を掲示しました。多くの児童が足を止めて記事に目を通す姿が見られ、新聞記事への興味関心を高めたと思われます。

また、年度末には記事を「新聞記事に見る石小っ子のあしあと」と題して冊子にまとめて、資料としました。



(NIEコーナー：随時記事を貼り替え)



(石小っ子のあしあと：資料として保管)

(2) 新聞閲覧台の活用

より多くの児童に新聞に触れる機会をつくるため、新聞閲覧台を自作し、図書室に入ってすぐのスペースに設置しました。両面に児童向けの新聞を配置しておくことで、貸出・返却の待ち時間に閲覧する児童も多く見られました。



(新聞閲覧台：主に児童向け新聞を配置)



(新聞置場：前日までの分をストック)

平成30年度 伊平屋村立伊平屋小学校 NIE 実践報告

伊平屋村立伊平屋小学校
教諭 仲村 高博

1 はじめに

伊平屋小学校は、2012年度からNIE指定校（沖縄県NIE推進協議会指定）として認定され、今年度で6年目となる。児童の語彙力の育成のために始めた活動で、現在では記事から読み取ったことを書いたり考えたことを表現したりと「書く活動」として重点的に取り組んでいる。

学校教育計画では、特色ある教育活動の一環として朝の活動時間に「NIEタイム」が設けられており、伊平屋村からの支援で全学級に一般紙（中・高学年）と小学生新聞（低学年・特別支援学級）が配布され学校全体で取り組んでいる。

2 本校の取り組み方針

（1）本校のNIE活動の具体的目標

- ① 新聞を活用した教育活動（NIE）を通して社会に関心を持つ児童を育てる。
- ② 新聞記事について自分の考えや意見を持ち、自ら発信できる児童を育てる。
- ③ 一つの記事からいろいろな視点で物事を考えることができる児童を育てる。

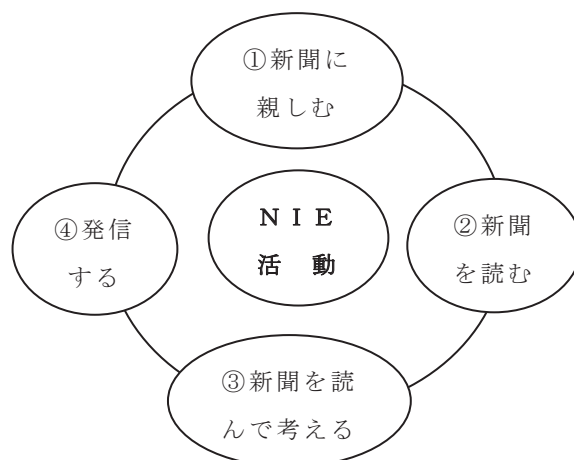
このような目標のもと、児童の多様な視野を育て書く力・思考力・表現力をつけさせることをねらいとしている。

（2）NIE教育への取り組み方

以下のことを職員で共通理解を行い、各学年の発達段階に応じて実践をしている。

- 1、毎週木曜日の朝の時間に「NIEタイム」として全学年で実践する。
- 2、右図のようなステップを学年の発達段階に応じて、スパイラル形式で実践する。
- 3、無理なく、楽しみながら実践する。
- 4、「NIEタイム」だけでなく、家庭学習等で新聞を効果的に活用する。

また、学年の発達と状況に合わせて段階的に取り組めるように、各学年の活動例を参考に取り組んでいる。各学年の活動例は次項の一覧となっている。



【 各学年の主な活動例 】

学年	1 学期	2 学期	3 学期
1 年	○記事の読み聞かせ ○自由に開き、見る ○新聞で遊ぶ	○記事の読み聞かせ ○好きな写真を選び、紹介し合う。 ○習った漢字を見つける	○記事の読み聞かせ ○好きな写真を選び、紹介し合う。 ○習った漢字を見つける。
2 年	○記事の読み聞かせ ○自由に開き、見る ○ペアで写真の紹介をする	○記事の読み聞かせ ○ペアで写真の紹介をする ○間違い探しにチャレンジ	○記事の読み聞かせ ○ペア、グループでの写真や簡単な見出しの紹介
3 年	○記事の読み聞かせ ○自由に開き、見る ○ペア、グループでの写真や見出しの紹介	○記事の読み聞かせ ○ペア、グループでの写真や見出しの紹介 ○読売新聞のワークシート活用	○記事の読み聞かせ ○四コマまんがのセリフを考える ○簡単な見出しを読み、感想を発表する。
4 年	○記事の読み聞かせ ○自由に開き、見る ○ペア、グループでの写真や見出しの紹介	○記事の読み聞かせ ○簡単な見出し、記事を読む (子供新聞等) ○読売新聞のワークシート活用	○記事の読み聞かせ ○簡単な見出し、記事を読み感想を交流 (子供新聞等)
5 年	○記事の読み聞かせ ○自由に開き、見る ○簡単な見出し、記事を読み、感想を交流 (子供新聞等)	○記事の読み聞かせ ○簡単な見出し、記事を読み、感想を交流 (子供新聞等) ○読売新聞のワークシート活用	○記事の読み聞かせ ○記事を紹介し、感想、意見を発表する。 ○読売新聞のワークシート活用
6 年	○記事の読み聞かせ ○自由に開き、見る ○記事を紹介し、感想、意見を発表する。	○記事の読み聞かせ ○記事を紹介し、ペア、グループでの意見交換 ○読売新聞のワークシート活用	○記事の読み聞かせ ○記事を紹介し、ペア、グループでの意見交換 ○読売新聞のワークシート活用

3 本校の具体的な取り組み

(1) 朝のNIEタイム（毎週木曜日 8時25分～8時40分）

毎日各学級に新聞が配布され、学級の状況（発達段階や授業内容など）に応じて、4つのステップ（新聞に親しむ活動・読む活動・考える活動・発信する活動）で行っている。

（ 低学年の取り組み ）

- ・ 児童が興味を示しそうな記事を教師が選び紹介。
- ・ 四コママンガのセリフを考える。
- ・ 児童自身が好きな写真や記事を選び、選んだ理由の発表や読み取ったことを記録。



（ 中学年の取り組み ）

- ・ 子ども新聞や4コママンガに興味を持たせ、発表させる。
- ・ 新聞を切り抜き、スクラップ。
- ・ 記事から5W1Hを抜き出し、読み取りの練習を行っている。
- ・ 記事の中から単語を見つけ切り取り、俳句を詠んでいる。
- ・ 社会の授業で地域を紹介したり、算数では概念の学習で活用したりしている。



（ 高学年の取り組み ）

- ・ ペアやグループで記事を選んで電子黒板に写して、その内容や感想を発表して学級で共有している。
- ・ 読売ワークシートの活用。
- ・ 社会の工業製品を扱う単元では、チラシを製品の仲間分けで活用した。

- ・新聞作りでは、新聞の構成を実物で確認しながら作成している。
- ・社会の単元によって、関連する記事を紹介している。

(2) 新聞投稿

NIE タイムや授業で取り組んだ児童の作文や俳句・絵・一言詩など幅広く投稿し、掲載されたものを職員室前に張り出しを行っている。職員室前へ掲示することで、児童の目に触れる機会を設けることができ、職員室への用件の待ち時間や通りすがりに読む姿が見られる。掲載された作品を見て、新聞投稿へ興味を持ったり、掲載児童への声掛けを児童同士で行うこともあり、児童への刺激や励みとなっている。

また、新聞社への投稿を効率よくするために、Fax がある事務室に投稿先ごとの送信票の準備をした。担任は、日付と児童名・担当名を記載するだけで、登録している新聞社へ Fax の送信ができる。送信票の横には、各新聞社の投稿規定と Fax の送信方法を掲示しており、気軽に取り組みできるようにしている。



平成 30 年度 N I E 実践報告書

那覇市立城北小学校
教諭 宮城 和人

1 はじめに

本校では、平成 26・27 年度まで N I E 実践指定校。平成 28～30 年度は、N I E 推進協議会指定実践校として取り組んだ。

今年度は、5 学年を実践学年として、平和学習の新聞づくりや、新聞記事の紹介、関連のコンクールに応募することを中心に新聞を活用してきた。職員研修として、夏休み期間中に研修を行い、11 月に公開授業を 5 学年が行った。

2 本校の取り組み

- (1) 琉球新報、沖縄タイムスの 2 社の新聞を、5・6 学年で活用した。5 学年は、朝日小学生新聞も各学級（4 学級）1 部ずつ購読した。
- (2) 5・6 学年ワークスペースに、N I E コーナーを設けた。
- (3) 5 年生は、新聞係があり、その日の新聞を配達し、2 社の一面記事を入れ替えて掲示した。前日までの新聞は、保管し後日活用できるようにした。



掲示コーナー（新聞記事や友だちが選んだ記事を掲示する。）



「一面記事を読もう」コーナー

琉球新報、沖縄タイムスの、その日の一面記事を見比べる。



「絵画を知ろう」コーナー

（朝日小学生新聞）



N I E (保管コーナー)

(4) 校内研修の様子



本校のこれまでの取り組み、実践報告をした後、演習を各学年ごとに作成、発表した。

3 実践事例

(1) 学年の取り組み

2 学年

- ・ 写真を見せながら記事の内容を説明する。(朝の会)
ジャンル：地域の行事（スポーツ選手）、県内のニュース
- ・ 子どもが興味を持った記事を持ってきて担任が紹介。(朝の会)
- ・ 新聞の四コマ漫画を掲示（朝の会）

3 学年

- ・ 総合的な学習の時間で新聞を書かせる際に実際の新聞を見せて、大見出しや小見出しの書き方を教えました。
- ・ コンクール入賞作品をお手本として見せました。
- ・ 平和学習で使用した。(慰霊の日特集)

4 学年

- ・ 6月（総合的な学習の時間）
「タイムスワラビー」（沖縄戦を学ぼう特別版）を活用して平和新聞を作成した。

5 学年

- ・ 朝の会・・・3分間新聞タイム（各自、気になる記事を読む）
- ・ 係・・・ニュース係が気になる記事を切り抜いて、コメントを添えて掲示する。
- ・ 帰りの会で、新聞記事の紹介。
- ・ 平和新聞の作成、掲示。

6 学年

- ・ 気になる話題の切り抜きを児童が紹介する。
- ・ 学年の壁や学級の壁に平和の記事を掲示する。
- ・ 子ども新聞を掲示した。
- ・ 社会や道徳で新聞を活用した。

(2) 関連教科とNIE

ア 国語科

- ・「新聞記事を書いて、言葉と事実について考えよう」

イ 社会科

- ・「工業生産を支える人々」 ・「いろいろなグラフを集めよう」

ウ 家庭科

- ・「じょうずに使おう物やお金」

エ 総合的な学習の時間

- ・平和学習の取り組みとして、新聞記事の特別号で調べ新聞にまとめた。
- ・新聞記事スクラップ
- ・校外学習「琉球新報博物館見学」（5学年）

カ 公開授業（平成30年11月27日）

- ・国語科 5年1組 指導者：宮城 和人

主題名 「友だちに伝えよう」 ～ジグソー学習を活用して～

ねらい 本単元は、資料を活用して報告・発表する学習である。より効果的なプレゼンテーションとしての発表を経験させたい。

そのためには、より聞き手の存在を意識して、内容を効果的に伝えることである。



「6つの記事」班で割り当て



「自分の記事を要約する」



「同じ記事のグループで話し合う」



「班に戻り、話し合ったことを伝える」

授業者の感想：各新聞記事を、班の友だちに伝えるように要約し、さらに話し手は、同じ班の人に新聞記事を伝えるように工夫し、聞き手は、新聞記事の内容を十分に聞き取ることができることを本時の目標にした。

要約の苦手な児童も、ジグソー学習をすることで、友だちに伝えることや、聞くことに意識をもってくれたので良かった。

(3) その他

- ・沖縄タイムス社、「スクラップ新聞コンクール」に応募。(5学年)
- ・琉球新報社、「しんぶん感想コンクール」に応募。(6学年)

4 実践の感想、今後の課題(アンケート対象：5学年)

(1) 子どもの声(アンケートから)

「新聞の良いところ」

- ・何回でも読める。 ・切り取って持ち運びができる。
- ・見出しで何のことについて書いているか一目でわかる。
- ・一面を読むだけで、その日の新聞の内容がだいたいわかる。
- ・正しい情報が書かれている。 ・難しい漢字を調べて覚えられるようになる。

(2) 成果

- ・新聞に興味をもつ児童が増えた。
- ・新聞記事を使った新聞づくりが上手くなった。
- ・5W1H、要約、文のまとめ方や書き方。

(3) 課題

- ・日常の活動に新聞を活用したい。
- ・年間計画を見直し、各学年で新聞活用ができるか。
- ・校内研等で広める機会を増やしたい。
- ・教師の負担感がない取り組み。

5 実践者の感想

今年度も、NIE推進協議会指定実践校として、琉球新報、沖縄タイムスを提供頂き5・6学年で活用できた。本土新聞にも関わられるように、5学年は保護者の理解を得て、朝日小学生新聞を購読することにした。

今年度は、校内研修で、これまでの本校のNIEの取り組みを伝えることができたこと。また、各学年の実践が、報告書で紹介できた。

次年度も、積極的に新聞学習の良さを知ってもらい、NIEの学習を取り入れ、広げていきたい。

平成 30 年度 NIE 実践報告書

沖縄市立高原小学校
教諭 座喜味 美夏

1 はじめに

本校は、2年間の日本新聞協会指定のNIE実践校としての実践経験を経て、今年度より沖縄県NIE推進協議会指定実践校としてNIEの実践に取り組んでいる。前年度は、校内研との関わりを持たせて全校での取り組みを行ってきたが、今年度からNIE担当教諭を配置し、NIE実践例の紹介やこれまでの取り組みをいかした実践を担当が周知、連絡をする形で進めてきた。

月に1度、朝の活動の時間にNIEの時間を設け、各学年で新聞の読み聞かせ、レッツチャレンジNIE、朝日新聞読み解きワークシートを活用しての取り組み、各教科と関連させて、新聞制作やはがき新聞制作に取り組んでいる。

2 本校での取り組み

- ・各学年で県紙2紙を年間4ヶ月、購読の月を設け活用
- ・各学年でNIEコーナーや新聞コーナーを設けた
- ・NIE担当が各学年に新聞を配布
- ・新聞関連のコンクールへの応募、県紙への作文・日記の投稿。
- ・図書館に子ども新聞「りゅうPON」「ワラビー」の掲示
- ・朝日新聞読み解きワークシートの活用
- ・教科と関連させたはがき新聞の作成

3 実践事例

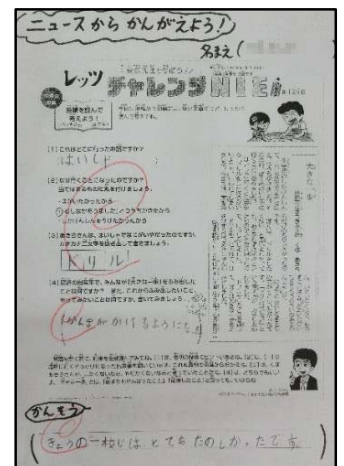
★1 学年の取り組み★<日常的な取り組み>

・日常的に新聞に触れあってほしいと思い、廊下にコルクボードを下げて、NIEコーナーを設置している。低学年でも興味を持って読めるような、身近な記事を「りゅうPON」や「ワラビー」などから切り抜いて掲示している。

<授業実践>

・今回の授業では、導入に廊下に掲示したミミズの記事を紹介し、天気クイズを2問行い、本時の課題に入った。

・「りゅうPON」に掲載されている「レッツチャレンジNIE」のワークシートを活用した。2年生の投稿「大きな一歩」を読み合わせて、内容を読み取り、自分の「踏み出した一歩」は何だろうと考え、発表させた。最後に感想を書かせたが、どの児童もとても楽しんで取り組むことができたようである。

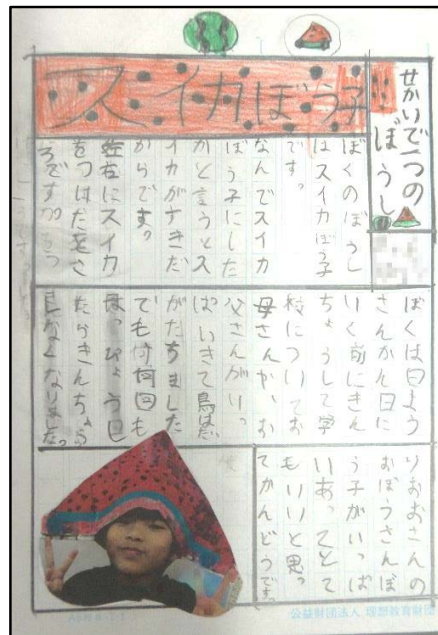


★2学年の取り組み★ 〈はがき新聞作成〉

実践1 「世界で一つのぼうしを作ろう」【図工】



新聞に慣れ親しむことを意識しての帽子づくり。作った後は、はがき新聞にぼうしの説明や、友達のぼうしを鑑賞しての感想を書きます。新聞は図工の評価にも活用できます。



実践2 あらすじをはがき新聞にまとめる【国語】

『アレクサンダとぜんまいねずみ』

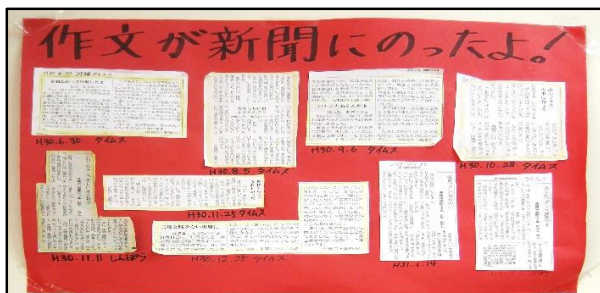


実践3 メモをもとに文章を書く【国語】

『メモをもとに文章を書こう』



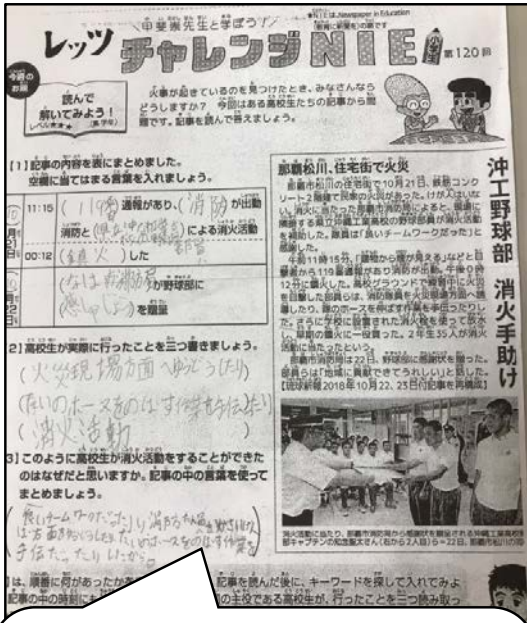
全国はがき新聞コンクール 銀賞作品



成果

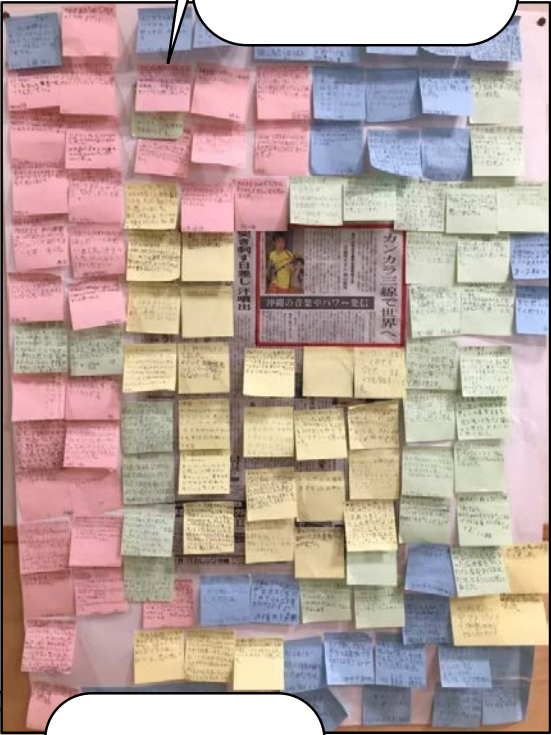
はがき新聞の制作をすることで、児童が作文を書くことに積極的になった。また、書くことが苦手な児童も、レイアウトを工夫して絵を入れるなど楽しんで取り組むことができた。

★ 3 学年の取り組み★



子どもたちの興味のある記事や、楽しく記事が読めるクイズ付きの「チャレンジNIE」を選んで活用している。

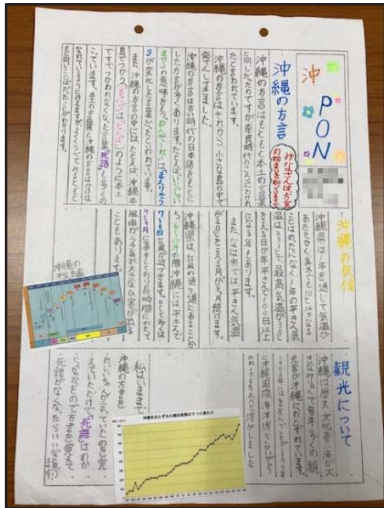
新聞記事を読み、自分の感じたことやこれからの自分について付箋紙に書き込みをしている。



NIE コーナーを設置し、自由に新聞が読めるようにしている。

成果と課題
 ◎新聞記事を紹介することで、色々なことに興味を持ち、自分の身近なことと関連つけて考える子が増えた。
 ●新聞を取っていない家庭が多い為、新聞に親しむ機会が少ない。

★4 学年の取り組み★



成果

- ・社会や総合の学習で新聞づくりに取り組むことが出来た。
- ・新聞を作成する際には、読者に伝わりやすいようにレイアウトや写真・絵などを上手く活用することが出来た。

★5 学年の取り組み★

・主に国語の授業と関わりを持たせて取り組んだ。記事の内容や、自分の意見、思いを分かりやすく相手に伝えることを意識して取り組ませた。また、友だちの発表を聞き、良かった点を付箋紙にまとめ、アドバイスをもらった。



成果と課題

- 5W1Hを意識して分かりやすい文章を書けるようになった。
- 誰に、何を伝えたいのかはっきりさせて伝えることができるようになってきた。
- 知りたい情報を整理し、まとめることができるようになってきた。
- 新聞について家族や友達と話す機会が増えてきた。
- 興味ある情報に偏りがみられた。
- 国語との取り組みが多かったため、他教科とも連動した授業づくりを意識していきたい。



★6学年の取り組み★

【歴史新聞づくり】

単元が終わるごとに、学習のまとめとして歴史上の人物を取り上げながら、新聞にまとめた。



【情報収集】

調べ学習の中で、本やインターネットのみならず、新聞記事から必要な情報を読み取り活用した。



【マイベスト記事】

子ども自身の関心のある新聞記事を切り抜いて、5W1Hを読み取り、記事の内容をまとめた。



【平和新聞づくり】

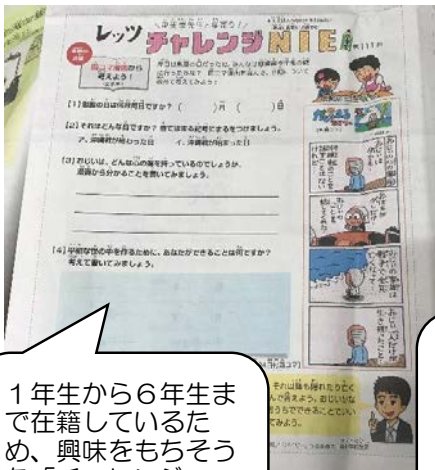
沖縄の戦跡を見学し、学習してきたことをグループに分かれて、役割分担し記事にまとめ発表した。



(成果と課題)

- 定期的に新聞を作成することで、調べたことを伝える方法を学ばせることができた。
- 新聞記事の読み取りを行うことで、5W1Hを意識させることができた。
- △地域に関する記事を朝の時間に紹介したり、記事を基に話し合わせたりしていきたい。

★特別支援学級の取り組み★



1年生から6年生まで在籍しているため、興味をもちそうな「チャレンジNIE」を選んで活用している。



「チャレンジNIE」の学習が終わったあとは、教室背面にはりだす。「りゅうPON」の記事も貼り出して自由に読ませている。



「りゅうPON」の記事を紹介しています。

- ◎新聞記事を紹介することによって、新聞に興味をもって、進んで読もうとしたり、教師に読んでほしいとお願いしたりする子がいる。
- ◎「チャレンジNIE」の取り組みで、新聞記事をしっかりと読み取ろうとがんばっている姿が見られた。
- ◎「チャレンジNIE」の学習を楽しんで取り組む姿が見られる。
- 新聞を取っていない家庭がほとんどで、新聞に親しむ機会が少ない。

4 成果と課題

成果

- ・月に1回NIEの時間（朝の活動）を設定することで、新聞に触れる機会ができ、いろいろなことに興味をもつことができた。
- ・知りたい情報を整理し、まとめることができるようになった。
- ・新聞に、作文や日記を積極的に投稿することで書くことへの抵抗がなくなってきた。
- ・はがき新聞の制作をすることで、書くことを楽しむ子が増えてきた。

課題

- ・新聞をとっていない家庭がほとんどで、新聞に親しむ機会が少ない。
- ・様々な教科と関連させて新聞を活用できるように、教師も新聞をつかった情報収集を積極的におこないたい。

テーマ「社会に関心をもち、課題に対して多角的視野から考え、発信する力を育てる」
～学校、家庭での新聞活用を通して～

沖縄市立比屋根小学校 教諭 佐久間 洋

1. 比屋根小学校では、H26年度よりNIEの指定校として認定され、6学年を中心に授業や日常的な活動、家庭においては親子で新聞活動を行ってきた。今年度は学力向上の一環として新聞活用を取り入れ、全学年で月に一回朝の新聞読み聞かせを実施した。本校の課題として挙げられるのが、「学習意欲はあるが、学習の中で課題に対して問題意識を持ち、自分なりの考えをもつことを苦手としている児童が多い」ということが挙げられる。この現状をうけて、今年度はこれまでの活動を引き続き行い、さらに、各学年でできる新聞活動を通して「社会に関心をもち、課題に対して多角的視点から考え、発信する児童を育てる」ことをNIE活動の大きなねらいとした。特に6学年では、昨年度以上に授業での新聞活用を意識しながら実践し、これまでと同様キャリア教育においてもNIE活動を展開した。

2. 児童の実態と活動を方針

(1) 児童の実態

全国学力状況調査質問紙調査から新聞の閲覧頻度が低いことがわかった。この背景には、インターネット、スマートフォンの普及により、新聞購読率が低下、活字離れが影響していると考えられる。そのため、児童自身、社会への関心が低く、社会性に乏しいという実態がある。また、全ての教科において、課題意識が低く、自分の考えもたない児童が多い。また、自分の考えを相手に分かりやすく伝える児童が苦手な児童が多い。

(2) 活動方針

実態を踏まえたうえで、学習活動だけで新聞活動をしなくても効果が低いと考え、まずは日常的に新聞に触れさせ、新聞に親しませること活動を行った。また、学年で年間を通してNIE活動を実践していくために「無理なく、楽しく、継続できる活動」を教師のテーマにかかげ、活動を行ってきた。さらに、今年度は、書く力をつけるために、新聞活動で書く活動を計画した。以上の方針を踏まえて、以下の活動を行った。

- ①新聞に触れる
- ②新聞に慣れ親しむ
- ③記事を読み、自分の考えを発信する。
- ④記事を学習活動で活用する。
- ⑤キャリア教育で活用する。
- ⑥はがき新聞

3. 学校、学年としての取り組み

<学校>

- ・新聞読み聞かせ
- ・図書館で新聞閲覧コーナーを設置
- ・学校の掲示板にNIEコーナーを設置

<学年>

- ①朝の1分間スピーチ
- ②各教科での活用
- ③週末の課題としてスクラップノート（ファミリーフォーカス）
- ④新聞ツイッター

- ⑤コンクールへの取り組み
- ⑥朝の読み聞かせ
- ⑦はがき新聞

4. 新聞活動にあたっての工夫

- ・新聞購読の年間計画を立てる際に、各教科の単元配列を意識した。また両新聞社から提供された新聞を6学年各学級に配布した。
- ・家庭へ協力依頼をし、新聞を提供してもらった。
- ・新聞係を配置し、使った新聞を整理整頓させ、常に新しい新聞に触れる環境を整えた。
- ・学年掲示板に両紙のこども新聞を毎週掲示している。
- ・教師が授業で使える記事を集め、授業で活用した。
- ・コンクールで受賞した児童を学年朝会で紹介した。
- ・販売店からの子供新聞を提供してもらった。



学級保管



学年掲示板

5. 実践について

(1) 新聞活動を通して身につけたい力

①課題に対して問いを持ち、多角的な視点から考えを持つ。そして分かりやすく表現する力

- ・記事から読み取ったことを5W1Hを意識しながらまとめる。(表現力)
- ・感想や意見を相手に伝わりやすくまとめる。(表現力)
- ・記事に対して問いを持つ。(思考力)
- ・社会に関心を持ち、自分の考えや意見を持つ(思考力)
- ・自分の意見と比べながら相手の意見を聞き、さらに自分の考えを深める
(思考力、判断力、表現力)

②広い視野に立って考える力

- ・記事について話し合い活動を通して、社会的事象を多面的にとらえる力(思考力、判断力)

(2) 実践の概要

単 元	実 践 内 容
国 語	・単元での活用、読み聞かせ はがき新聞
社 会	・政治・国際関係 ・環境 ・事件・事故 ・新聞作り、教育
道 徳	・記事を読んで感想(ワークシートを作成)・記事をもとに話し合い活動
総合的な学習の時間	・キャリア教育での活用(努力、協力、挑戦 職業観) ・記事についての感想、意見の交流、国際理解教育 ・コンクールへの取り組み・新聞作り ・キャリア教育講話(新聞記者) ・平和学習

日常的活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 分間スピーチ ・ 読み聞かせ 記事を読んでの意見交換 ・ 新聞ツイッター・新聞投稿
家庭	<ul style="list-style-type: none"> ・ スクラップノート（ファミリーフォーカス）

(3) 実践するにあたっての工夫

①教師間の工夫

- ・ 教師間で新聞活用方法、効果を情報交換（資料提供）
- ・ 校内研OJTでのワークショップ
- ・ 新聞を家庭から提供。

②新聞に関心を持たせる工夫

- ・ 1 分間スピーチの内容を社会的な出来事をテーマにした。
- ・ 読み聞かせをし、感想交流（教師）
- ・ 教師がコメントやスクラップノート等作品を紹介、評価する。
- ・ 新聞投稿
- ・ 児童が関心ある記事、写真をグループ、全体に紹介
- ・ コンクールに出品
- ・ 新聞を教室に置き、いつでも読める環境を設定
- ・ NIE専用掲示板を設置し、児童がいつでも新聞に親しむ工夫をした。
- ・ 写真や記事、児童のコメント等を掲示
- ・ 図書館前、算数ルーム前での記事やクイズの紹介

③言語活動を充実させるための工夫

- ・ 読み聞かせや児童のスピーチをする際に話し手・聞き手に感想、意見を持たせる。
※教師が1つ発問をする。
- ・ 日頃から記事に対してペア、グループで2、3分程度話し合いをさせる。
- ・ 見本となる意見、活発なグループを具体的に褒める。
- ・ 日々の授業から常に自分の考えを持つように指導する。

(4) 実践例

<日常的な活動>

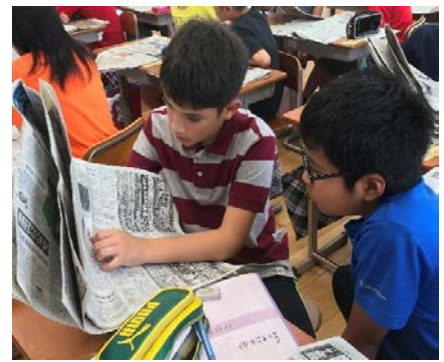
全学年共通 朝の新聞読み聞かせ

- ・ 毎月第一月曜日に全学年共通で朝の新聞読み聞かせを実施している。



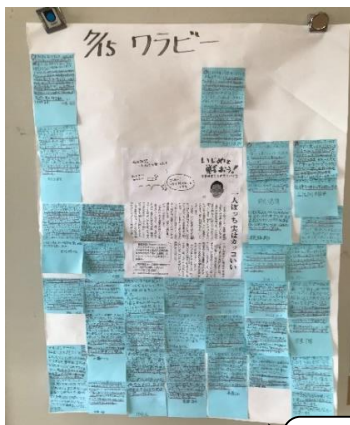
お互いに気になる記事を紹介し意見交換

- ・朝の読書の時間を利用して自分の関心のある記事を読み、ペア・グループで記事を紹介し合う。
その時①選んだ理由 ②内容 ③感想④相手の感想 の順で進めていく。



新聞ツイッター

- ・4人グループで週末に各自、関心ある記事をまとめて、紙面を作成する。
作成の際には、記事にグループで話し合い順位をつける。出来上がった紙面に、その他の児童が好きな記事にコメントをする。また、教師が児童に考えてもらいたい記事を提示し、コメントする場合もある。



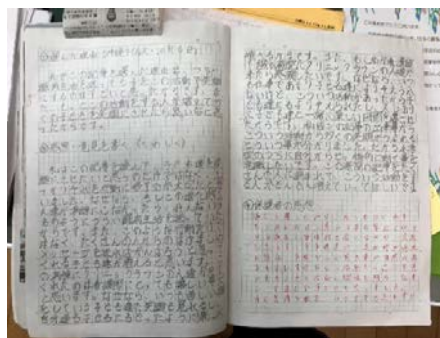
いろいろな視点から
自分の意見を書く

3年生のツイッター
読み聞かせの記事に
コメントを書く。

<家庭での活動>

新聞スクラップ (ファミリーフォーカス)

- ・毎週末一回の課題としてスクラップを行っている。自分の関心ある記事をまとめ、自分の意見を書く。そして、保護者も記事に対する意見を書いてもらう活動を5月から行ってきた。



スクラップの書き方
①記事を選んだ理由 ②記事の感想 ③保護者の感想

スクラップを発表し合い、書き
方についての学び合い

<学習での活用>

総合的な学習における平和教育～沖縄戦について学ぼう～

両紙の沖縄戦特別号を活用しながら、沖縄戦について学習した。また、まとめとして、県外紙を取り寄せ、沖縄戦の記事について比べ読みを行い、新聞社別に沖縄戦の記事の数や内容を比べた。



県外紙と県内紙で比べ読み、違いについて考える。

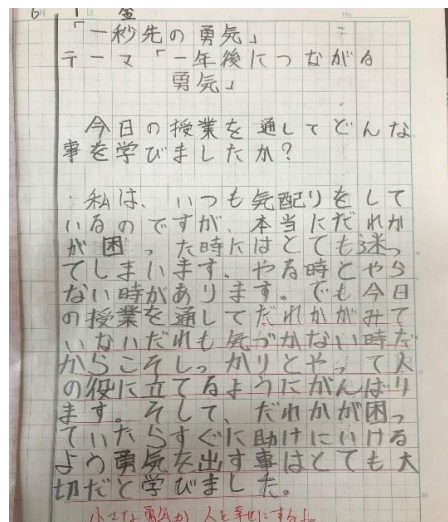
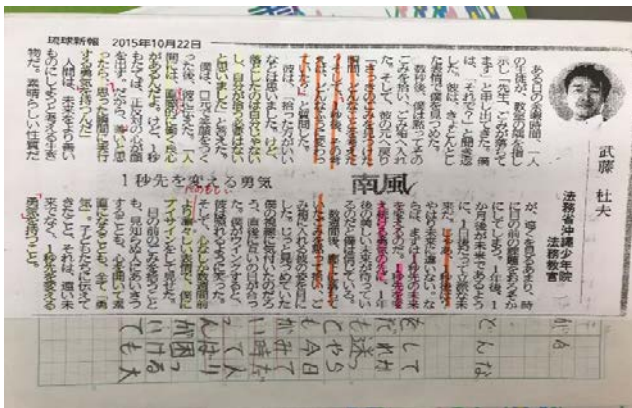


沖縄戦の特別号を使っでの学習

6月24日の記事を県外紙と県内紙で比べ読み
沖縄戦の記事の数と見出しを比べる

道徳科での活動「キャリア教育」

・「一秒先の勇気」(琉球新報 2015. 10. 22)の記事を活用して、「勤労・公共の精神」についての授業を展開した。

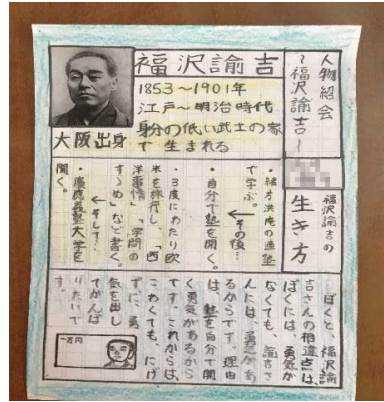


「はがき新聞」実践

国語科 単元名「伊能忠敬」

授業のまとめとして、自分が紹介したい偉人についてはがき新聞を活用した実践。2時間で作成できた。児童はコンパクトにまとめるために、辞書を引き、言葉を考えた。

社会科で学習した福沢諭吉の紹介。



教室掲示

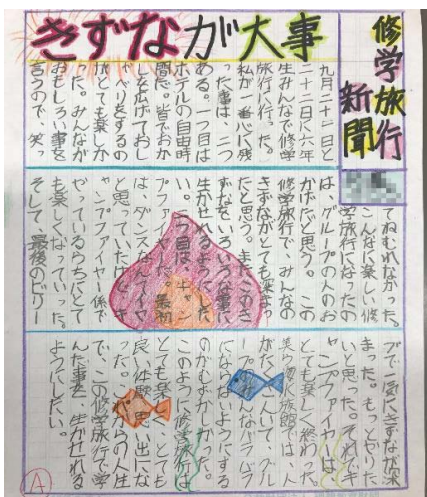
国語科 単元名「私の大切な一冊を紹介しよう」

単元のまとめとして、自分が紹介したい本を読み、自分の考えを整理して書く実践。2時間で作成できた。



特別活動

修学旅行、学習発表会、の感想、意見をはがき新聞にまとめ、紹介し合う実践



社会科 単元名「世界の人々と共に生きる」

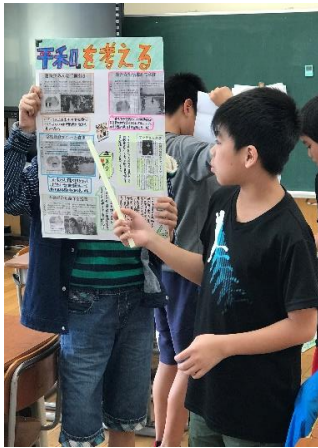
単元のまとめとして、世界の子供達が現状を知り、将来に向けて自分たちができることを考えさせることをねらいとして、切り抜き新聞作り、発表会を実践した。4時間で作成

※総合的な学習時間との合科学習を行った。

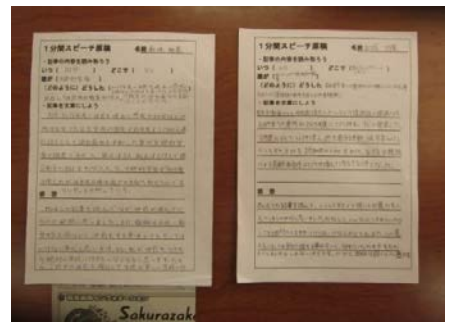


タイムス社の協力を
得て、ワラビー掲載
「世界の子どもた
ち」の記事を資料提
供してもらった。

児童は、自分の関心ある
記事を選び、切り抜き新
聞を作成した



その他の活動例



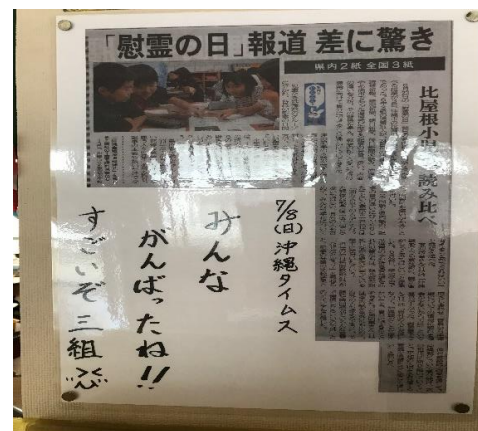
朝の1分間スピーチ



新聞のしくみ、書き方の指導



クラスの新聞係毎週掲示 子ども新聞掲示板



N I E 掲示版



図書室での活用

3. 実践後の成果と課題

(1) 学校全体での児童の変容

- ・学校全体で取り組むことで、どの児童も新聞に関心を持つようになった。
- ・N I Eの掲示版を見る児童が増え、新聞に関心をもつ児童が増えた。

学年での変容

- ・日常会話の中にニュースの話題がでるようになり、子供達に社会性が身についてきた。
- ・記事対して問題意識を持つようになり、多角的な視点から自分なりの答えをもつようになった。教科においての思考力、判断力、表現力が身についた。特に分かりやすく表現できる力が身についてきた。

- ・キャリア教育を意識した取り組みを展開することで、児童に基礎的・汎用的能力が身に付き、結果として学習意欲の向上につながった。

(2) N I Eについての児童の感想

- ・世の中の事を知ることができるので、新聞活動は継続してやりたい。
- ・いろいろなニュースがあって楽しい。
- ・友達と記事対して意見交換することで、自分の考えを広げ、深める事ができた。
- ・文章力がついた。意見を書くときにいろいろな視点から書く事ができた。

(3) 実践者（教師）の感想

- ・子ども達に社会性が身についてきた。
- ・子どもが活動をすることで、保護者も関心をもつようになり、子供と保護者がコミュニケーションをする良いツールになった。
- ・学校・学年全体で行うことで、活動の雰囲気を作られ、効果がとても高かった。
- ・N I E活動を通して、思考力、判断力、表現力がついてきた。
- ・学年でセミナーに参加することで、学年全体で取り組むことができた。
- ・はがき新聞を活用することで、コンパクトに書く力が身についた。
- ・キャリア教育を意識した活用を行うことで、学習意欲の向上が見られた。

(4) 課題

- ・N I E活動をさらに学校全体へ広げていく方法。また、保護者、地域への広げ方
- ・部数が少ないので、どのように新聞を収集していくか。
- ・職員の異動により、実践者が変わるので、学校内での今後の継続方法
- ・N I E実践者の広げ方

平成30年度 美東中学校N I E実践報告書

沖縄市立美東中学校
校長 仲宗根 賢
主幹教諭 松田美奈子

1. はじめに

本校では平成28年度から日本新聞協会認定N I E実践校指定を受け、新聞を活用した教育実践は最終年次(2年目)を終え、今年度から沖縄県N I E実践指定校の指定を受け、N I Eを継続実践してきた。おもな教育実践の取り組みとして、各教科・道徳・特活・事前学習・キャリア教育等で進めてきた。

2. 推進テーマ

「思考力・判断力・表現力を育むN I Eの実践」

3. 学校としての取り組み

(1) 新聞の設置

- ・新聞は毎日、新聞コーナーのテーブルに広げて、生徒や教師が自由に閲覧できる環境をつかった。また発行済みの過去新聞は厚紙で背表紙をつくり、1か月ごとに仕切って、専用棚にて保管し、すぐ閲覧できるように工夫した。

(2) 校内研修(N I E研修会の実施)

①オリエンテーション

(4月 講師:松田美奈子N I Eアドバイザー)

②新聞の活用例、各教科・領域の実践例紹介

(5月 講師:松田美奈子N I Eアドバイザー)

(3) 実践事例

①国語:和語・漢語・外来語を新聞記事から探そう

:新聞記事を読み比べよう

②社会:東日本大震災から学ぼう

:米朝首脳会談の影響を考えよう

:TPPについて考えよう(メリット・デメリット)

:ワーク・ライフ・バランスについて考えよう

:裁判員制度について考えよう ~身近な司法を目指して~

①道徳:平和のためにできること

:いじめ、ライバル、友情とは

:生命尊重

④特活:先輩たちの進路選択

:勉強法について考えよう

:キャリア教育

⑦総合学習:職業調べ、平和学習、職業と職種の違い、職業の3要素

(4) 11月おきなわNIE月間 公開授業実施表

月日・曜日	校時	学年・学級	教科	題材名
11月2日(金)	5	1年1組・2組 3組・4組・6組 7組・8組	総合	職業調べ (職場体験学習 事前学習)
11月16日(金)	3	2年2組	特活	勉強について考えよう
11月22日(木)	5	1年5組	特活	職業調べ (職場体験学習 事前学習)
11月28日(水)	5	3年5組	社会	ワーク・ライフ・バランス について考えよう

(5) 実践後の生徒の変容、成果と課題

- ①生徒の変容：年度当初は興味がある面（スポーツ面等）に目を通す生徒が多かったが、NIEを進めていくにつれて、すべての面を熟読する生徒が少しずつふえた。
 : 学習の風土づくり（学習環境）がよくなった。[大きな拍手・相手を見て聴く]
 : 学級の雰囲気が良くなった（学び合い・教え合い・聞き合い・話し合いが生徒が積極的、自主的に行われた）
 : 自己肯定感が向上し、意欲的に発言する生徒が大幅にふえた。
 : 何事にも最後まで粘り強く取り組む姿勢が見られるようになった。
- ②成果 : 記述力が徐々に身につき、簡潔に記述すること、理由書き、根拠書き、要約書きを時間内に終える生徒がふえた。
 : グループ学習では読解力・思考力・判断力・分析力・情報収集選択活用力・コミュニケーション能力・集中力・チーム力・問題発見力が著しく向上した。
- ③課題 : 全教科での取り組みを目標にしていたが達成できなかったもので、他校の実践事例や教育的効果を粘り強く紹介し、先生方の温度差をなくし、共通理解・共通実践を着実に確実にすすめたい。
 : 生徒の新聞記事・写真などを読み取る時間がかかる男子生徒が数名いるので、記事や写真などの読解力がさらに身につくよう、丁寧にじっくり取り組みたい。

(6) N I E 授業のようす



3年5組 ワーク・ライフ・バランス



3年5組 裁判員制度



3年5組 TPP (メリット・デメリット)



第24回沖縄県中学校総合文化祭N I E 部門
速報新聞係 (3年5組)



1年5組 職業調べ



1年2組 平和のためにできること

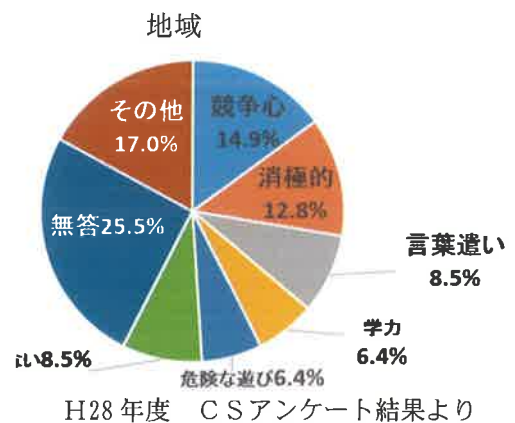
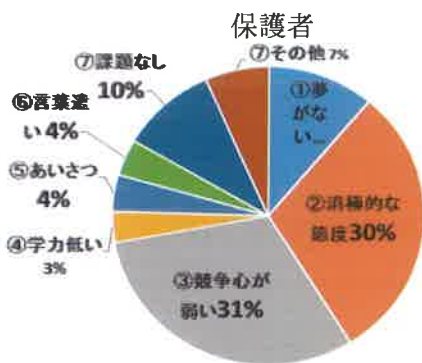
平成 30 年度 緑風学園 NIE 実践報告

テーマ「思いや考えを伝え合う子どもの育成～NIEの日常化を通して～」

1. はじめに

緑風学園は、H28 年度より NIE の実践指定校に認定され、1～9 学年で日常的な NIE の実践を進めてきた。取り組みとしては、親子でつながる新聞スクラップノート、新聞遊びや新聞読み聞かせ、伝え合う力を高める NIE フリートークなど、朝の時間や宿題を通して「思いや考えを伝え合う力」の育成を図ってきた。CS（コミュニティースクール）アンケートの結果からも「積極性に課題がある」との回答が多く、本校の児童は、積極的に思いや考えを伝え合う力に苦手意識を持っていることが分かった。また、新聞購読率も低く、普段から新聞に親しむ経験が少ないことも分かった。まず、「新聞に慣れ親しむ」ことの必要性を実感し、「NIE の日常化」をテーマに、楽しく取り組む NIE がスタートした。

Q 地域の子どもの課題は何ですか



2. NIE を通してつきたい力

児童生徒の実態から設定した育てたい 3 つの力

- ① 自分の思いや考えを伝え合う力 (思考力・判断力・表現力)
- ② 自分の思いや考えを書きまとめる力 (書く力)
- ③ 社会の出来事に関心を持ち、調べる力 (つながる力)

3. 「NIE の日常化」にあたって

- ・保護者に NIE について知ってもらうために、4 月の授業参観日などに NIE の説明資料を配付した。
- ・新聞購読の年間計画を立てる際にはどの月にも新聞に触れられるようにした。また、学習や行事との関連性も意識し、重点的に多くの新聞を注文する月を設定した。
- ・NIE コーナーをすべてのブロック掲示板に設定し、新聞活動の足跡を見る場、親しむ場をつくった。
- ・ブロック掲示板に、新聞コーナーをつくり、沖縄県紙、全国紙がいつでも手に取れるようにした。
- ・緑風学園の NIE についてまとめ、地域や保護者に配布し、学びや成長を発信した。
- ・校内研修で NIE の日常化を目指し、理論・実践研修に努めた。

NIE コーナー



ファミリーフォーカス



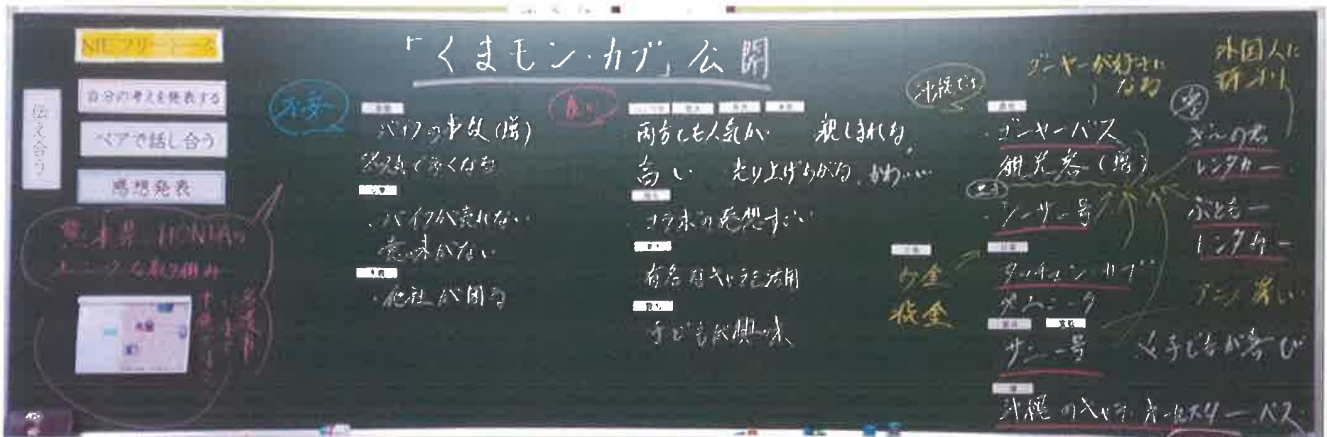
NIEの日常化に関わる校内研修



NIEを取り入れた授業 社会科5年



実践の足跡 板書 NIEフリートーク



4. 「NIEの日常化」を目指す実践について

(1) 主な取り組み

- ① NIE フリートーク ② 新聞スクラップノート ③ 新聞遊び ④ 新聞感想文
- ⑤ 新聞読み聞かせ ⑥ 新聞製作 等

(2) NIE の共通実践について

NIE フリートーク

時間のとり方

・3～9年（隔週水曜） ※1年生は新聞遊びの中で伝え合う活動を進める。

NIE フリートークの時間

12分

NIE フリートークでやること

児童・生徒

- ・自分の考えを発表する (5分)
- ・ペアで話し合う (1分)
- ・感想を交流する (4分)

教師

- ・導入での趣旨説明 (1分)
- ・フリートーク後の価値付け (1分)

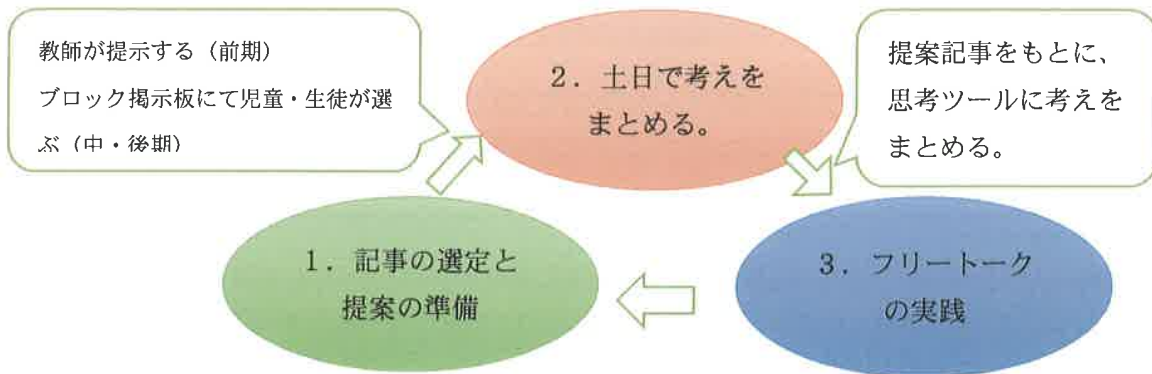
実際の流れ

- ・導入での趣旨説明 (1分)
- ・自分の考えを発表する (5分)
- ・ペアで話し合う (1分)
- ・感想を交流する (4分)
- ・フリートーク後の価値付け (1分)

考えをまとめる

「思考ツール」を活用する。

NIE フリートークを実施するまでの流れ



思考ツールに自分の思いや考えをまとめる



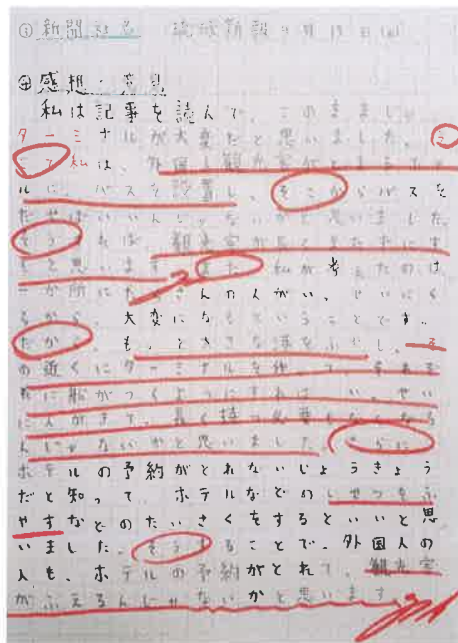
フリートークの様子



実践学年 3～6年

学習内容 好きな新聞記事 OR 学級で同じ記事を選び、親子で記事に対しての感想を書く。
(週末に持ち帰り、週の始めに提出)

チェック コメントではなく、「書く力」に関わる場所に、○をつけ、アンダーラインを引く。
※接続語や心情が表れている文等に引く。



新聞遊び

実践学年 1～2年

学習内容 新聞記事のスクラップ学習や記事の発表会、記事の読み聞かせ等



その他の日常的な取り組み

日本新聞協会主催「いっしょに読もう新聞コンクール」

H30 一緒に読もう新聞コンクール 奨励賞

新聞スクラップコンテスト



新聞投稿

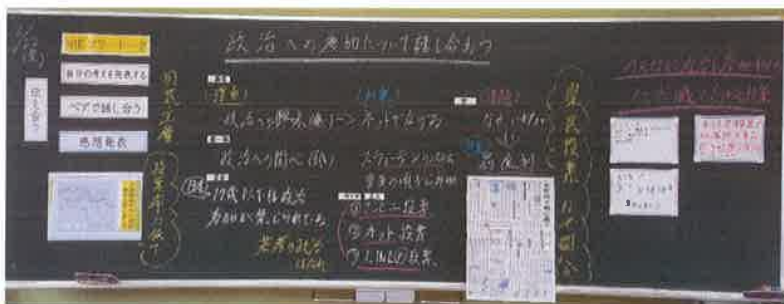
作品制作活動



新聞を活用した授業の様子

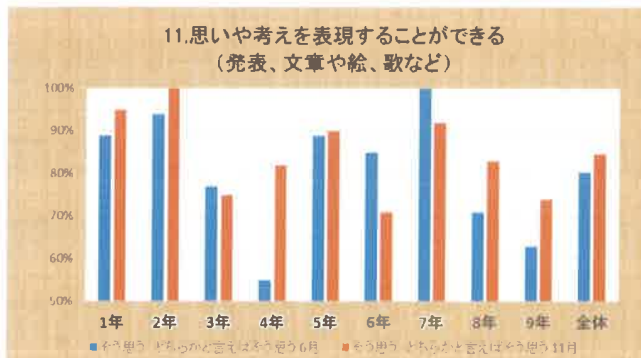
5年算数「割合～打率から歩合を知ろう～」

6年社会「私たちの暮らしを支える政治」



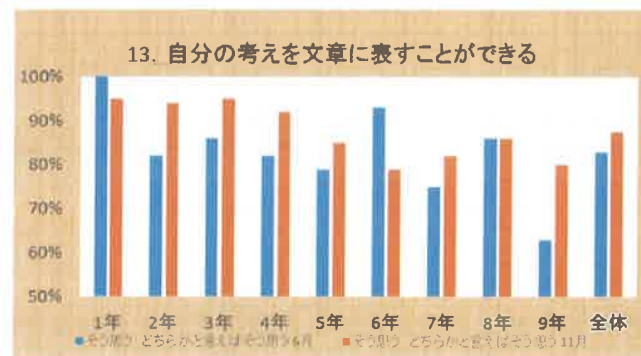
5. 成果と課題

【成果】



11. 思いや考えを表現することができる (発表、文章や絵、歌など)

- 楽しい すっきりする 好き(多数)
- みんなが聞いてくれるから
- 前よりできるようになってきた(5)
- 絵を描くのが好き
- 発表の回数が増えてきた ○自分の絵が飾られる
とうれしい
- 歌うことが楽しい
- はずかしい 緊張する(多数) ■難しい



13. 自分の考えを文章に表すことができる

- 楽しい すっきりする 好き 得意(多数)
- 作文をよく書く 小学校から書いて作文を書いていたから
- 授業でよくやる
- NIEで自分の意見をまとめるから
- できるようになってきた 構成が分かってきた(4)
- 文章だと表しやすい
- スクラップなどで力がついてきた
- 苦手

新聞を使った学習で好きなものをえら んでください(複数回答可)

6月

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	和
新聞を使っての話し合い活動	1	5	13	4	5	10	4	3	1	46
新聞を作る学習	0	0	6	7	9	6	6	3	7	55
ワークシートを使った新聞学習	0	18	4	4	3	2	1	3	1	31
スクラップ学習	0	9	6	4	10	6	0	1	4	40
その他	19	0	3	0	0	0	4	3	6	35

11月

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	和
新聞を使っての話し合い活動	1	12	8	1	5	8	1	1	3	40
新聞をつくる学習	0	12	10	10	10	5	7	7	9	70
ワークシートを使った新聞学習	0	10	7	2	4	5	3	2	1	34
スクラップ学習	0	10	2	6	13	4	2	0	1	38
その他	19	2	5	0	1	1	2	1	6	37

アンケートや各調査の結果、授業、思考ツールやスクラップノート等からみえた成果

1. 「伝え合う力」の向上・・・【関心・意欲・態度】の面で変容がみられた。
伝え合う力がついてきた。
2. 「書く力」の向上・・・考えを広げ、深め、文章化する力がついてきた。
各調査等において「書く力」に関する問題での向上がみられた。
「新聞製作学習」が一番人気で、書く学習に意欲的に取り組んでいた。
3. 「つながる力」・・・学習にしっかりと向き合い、粘り強くやりとげる児童・生徒が多くなってきた。
親子と共にNIEに取り組み、主体的に社会に目をむけ、そこで得た学びを発信するようになってきた。

【課題】

- ・9年間の学びをつなぐNIE活動の一層の充実(各学年の発達段階をとらえ、共通確認・共通実践を行う)

【沖縄県N I E推進協議会組織（2018年度）】

- <会長> 仲村守和（元沖縄県教育長）
<副会長> 与那嶺一枝（沖縄タイムス社編集局長）
普久原均（琉球新報社編集局長）
<顧問> 山内彰（元沖縄県教育長）
武富和彦（沖縄タイムス社代表取締役社長）
坂名城泰山（琉球新報社代表取締役社長）

<N I Eアドバイザー>

- 甲斐崇（うるま市立川崎小学校教頭）
佐久間洋（沖縄市立比屋根小学校教諭）
石川美穂（興南高校教諭）
松田美奈子（沖縄市立美東中学校教諭）
宮城英誉（名護市小中一貫教育校緑風学園）

- <事務局長> 安里努（沖縄タイムス社編集局NIE事業推進室）

※事務局は沖縄タイムス社と琉球新報社が2年交代で担当

- <会員社> 琉球新報社▽沖縄タイムス社▽宮古毎日新聞社（那覇支社）▽八重山毎日新聞（那覇支局）▽朝日新聞社（那覇総局）▽毎日新聞社（那覇支局）▽読売新聞社（那覇支局）▽日本経済新聞社（那覇支局）▽共同通信社（那覇支局）▽時事通信社（那覇支局）

【沖縄県N I E運動の経過】

<1996年（平成8年）>

「沖縄県N I E連絡会」結成

7月25日 第1回N I E全国大会（東京都）。新聞社員2名、県教育庁指導主事2名が参加

<1999年（平成11年）>

日本新聞教育文化財団によるN I E実践指定校に那覇市立松島小、同古蔵中、県立首里東高。※翌年以降の実践指定校は別紙一覧表に掲載

<2000年（平成12年）>

2月26日 県N I E連絡会を母体に「沖縄県N I E推進協議会」設立総会。全国33番目。初代会長に津留健二元教育長。事務局を沖縄タイムス社に設置

7月27日 N I E全国大会（神奈川県）参加

<2001年（平成13年）>

3月16日 県N I E推進協議会総会。津留会長再任

7月26日 N I E全国大会（兵庫県）参加

<2002年（平成14年）>

- 4月5日 県NIE推進協議会総会。津留会長再任
- 8月1日 NIE全国大会（北海道）参加
- <2003年（平成15年）>
- 3月27日 県NIE推進協議会総会。会長に渡久地政吉元那覇市教育長。事務局を琉球新報社へ
- 7月31日 NIE全国大会（島根県）参加
- <2004年（平成16年）>
- 7月 日本新聞教育文化財団が「NIEアドバイザー」制度を発足。県内から兼松力教諭が認定される
- 7月29日 NIE全国大会（新潟県）参加
- <2005年（平成17年）>
- 3月20日 「日本NIE学会」が発足
- 4月27日 県NIE推進協議会総会。渡久地会長再任。事務局を沖縄タイムス社へ
- 7月28日 NIE全国大会（鹿児島県）参加
- 11月7日 初めての「NIE週間」実施
- <2006年（平成18年）>
- 5月25日 県NIE推進協議会総会。渡久地会長再任
- 7月27日 NIE全国大会（茨城県）参加
- <2007年（平成19年）>
- 県NIE推進協議会総会。会長に山内彰元県教育長。事務局を琉球新報社へ
- 7月26日 NIE全国大会（岡山県）参加
- 11月10日 「沖縄県NIE実践フォーラム」を初開催（琉球新報社で）
- <2008年（平成20年）>
- 7月31日 NIE全国大会（高知県）参加
- 11月8日 第2回県NIE実践フォーラム開催（沖縄タイムス社で）
- <2009年（平成21年）>
- 4月17日 NIE実践中間報告会（琉球新報社で）
- 5月9日 NIEワークショップ（琉球新報社で）
- 5月18日 県NIE推進協議会総会。山内会長再任。事務局を沖縄タイムス社へ
- 7月30日 NIE全国大会（長野県）参加
- 10月31日 第3回県NIE実践フォーラム開催（琉球新報ホールで）
- <2010年（平成22年）>
- 3月5日 NIE実践最終報告会（沖縄タイムス社で）
- 3月8日 山内会長、岸本沖縄タイムス社長、高嶺琉球新報社長らが県教育長を訪問し、大城浩統括官にNIEへの一層の理解と連携を要請
- 4月 財団指定の実践校「奨励枠」に県内から初めて北中城村立北中城小学校、宜野湾

市立宜野湾小学校（ともに09年度指定）を推薦し、認定される

5月14日 NIEワークショップ（沖縄タイムス社で）

6月1日 県独自指定校制度が発足。協議会が4校を指定し、沖縄タイムス・琉球新報2紙を提供開始。10年度はうるま市立比嘉小学校、豊見城市立豊見城中学校（以上09年財団指定校）、うるま市立石川中学校、与那原町立与那原中学校（以上新規）

6月5日 九州地区事務局長会議・アドバイザー会議（熊本市）に与那嶺功事務局長、兼松力アドバイザー出席

6月29日 県NIE推進協議会総会。山内会長再任

7月29日 NIE全国大会（熊本県）参加

11月6日 第4回県NIE実践フォーラム開催（沖縄タイムス社で）。教育関係者、保護者ら200人が参加した。越来小が国語の公開授業。記念講演は作家の大城貞俊さん（琉球大学准教授）。兼松力教諭（NIEアドバイザー）、古波津聡越来小教諭、山城銀子小禄南小校長、奥村敦子沖縄タイムス社学芸部デスク、佐藤ひろこ琉球新報社教育担当キャップをパネリストに、佐久間洋宜野湾小教諭をコーディネーターにシンポジウム「新学習指導要領とNIE」を行った

<2011年（平成23年）>

2月9日 日本新聞教育文化財団の枝元一三コーディネーターを招いた特別講演会「新学習指導要領とNIE」（主催＝読谷中、喜名小、共催＝県NIE推進協議会）を読谷中学校体育館で開催。村内の教職員ら約120人が参加した

2月10日 金武正八郎県教育長に要請活動。山内会長、中根学沖縄タイムス社編集局長、坂名城泰山琉球新報社編集局長、兼松アドバイザーらがNIE活動への理解と協力を要請した

4月 2010年6月にパイロット事業としてスタートした沖縄タイムス社と琉球新報社による県指定校制度の継続を確認。5校を上限に指定予定

6月17日 県NIE推進協議会総会。事務局が琉球新報社へ

7月24日 NIE全国大会（青森県）。教師・事務局13人、取材記者4人が参加

8月2日 NIEアドバイザー就任要請。山内会長らが4校訪問

9月14日 日本新聞協会NIE専門部会で仲程俊浩氏、佐久間洋氏、甲斐崇氏のNIEアドバイザー認定が了承される

10月17日 日本新聞協会主催「第2回いっしょに読もう！新聞コンクール」の地域審査（琉球新報社で）

11月12日 第5回県NIE実践フォーラム（那覇市立小禄南小学校で）。全26学級で公開授業。保護者600人を含む750人が参加

12月10日 県中学校総合文化祭。中学生が速報発行、両新聞社が支援。NIE展示ブースも設置。11日まで

<2012年（平成24年）>

2月15日 大城浩県教育長を訪問（山内会長、アドバイザー、両新聞社編集局長）。夏休みの短期講座の開催、全国大会への職員派遣を確認

3月5日 N I E実践最終報告会（琉球新報社で）

4月21日 県N I E研究会発足。教員主体の研究組織を目指す。当面、新聞社主催の講座に合わせて会合を開く

6月22日 県N I E推進協議会総会。地元2社の会費の増額を承認（6万円から10万円に）。他の加盟社の会費増額は次年度総会までに議論することにした

7月30日 N I E全国大会（福井県）参加。県教育庁から職員3人が参加

7月・8月 県立総合教育センターで初の教員向け研修。7月27日に短期研修講座・小学校社会科講座の一部として佐久間アドバイザーが講師。8月3日は中学校社会・高校地歴公民講座の一部として兼松アドバイザーが講師

11月3日 第6回県N I E実践フォーラム（うるま市立中原小学校で）。県教育委員会、うるま市教育委員会の後援を得た。特別支援を含む全学年全学級で公開授業を行い、保護者や教育関係者、新聞関係者計800人が来場した。教師向け、保護者向けのワークショップ（分科会）も開催し、兼松・佐久間・甲斐アドバイザーが講師

<2013年（平成25年）>

1月20日 教師向けメーリングリスト開設

2月20日 大城浩県教育長を山内会長らが訪問。全国大会への職員派遣、行政主催の研修へのN I E採用に謝意を述べた

3月6日 実践報告会（琉球新報社で）。協会指定、県指定10校のうち9校が報告した

4月 県立総合教育センターの出前講座にN I Eが開設。甲斐崇研究主事（N I Eアドバイザー）が担当して校内研修や児童生徒の授業に対応開始

5月11日 教師向け研修会「第1回おきなわN I Eセミナー」開催。昨年度まで新聞社主催だった講座を推進協主催に。原則として偶数月に開催する

5月24日 県N I E推進協議会総会。会費、会則の変更を了承。会費は地元2社10万円から15万円に、全国紙4社3万円から4万円に、通信社2社1万円から3万円に、宮古・八重山2社3万円据え置き。役員では副会長を1名から2名とし、地元紙2社の編集局長を充て、任期を1年から2年とした。再任を妨げないことは従来通り。事務局が沖縄タイムス社へ

7月25日 N I E全国大会（静岡県）参加。県教育庁が前年に続いて職員を派遣し、県内の教育関係者、新聞社関係者らが参加

7月30日 金武町教育委員会が主催する教員研修に4人のN I Eアドバイザーを派遣

8月13日 県中頭教育事務所が主催する10年経験者研修の選択研修でN I Eが取り入れられ、20人が受講。推進協に講師派遣依頼があり、兼松、佐久間両アドバイザーが校種に分かれて講師を務めた

11月30日 第7回実践フォーラム（県立総合教育センターで）。沖縄市立コザ小学校の4年生、5年生が公開授業。パネルディスカッションは実践校の教員、県教育行政、教育センターからパネリスト・コーディネーターを招いて議論を深め、新聞社による新聞解説・ワークショップもあった。約150人が参加。※古波津聡沖縄市立コザ小学校教諭が5人目のNIEアドバイザーに承認

<2014年（平成26年）>

2月6日 山内彰会長、坂名城泰山琉球新報社取締役編集局長、武富和彦沖縄タイムス社取締役編集局長ら7人が県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問

3月4日 実践報告会（沖縄タイムス社）12校が発表。ほか2校が紙面発表。県指定校の拡大にともない、過去最大の報告校数になった

5月24日 九州アドバイザー・事務局長会議を沖縄で開催（沖縄タイムス社）。沖縄からは推進協発足の経緯やフォーラム開催などの活動報告、教育センターにNIE出前講座が盛り込まれたことなどを報告

6月28日 6月のおきなわNIEセミナーから、セミナー開催前の午前中に実践教員に呼び掛けて「研究部会」を開催。それぞれの実践を持ち寄り、情報交換

7月31日 NIE全国大会（徳島県）参加。8月1日まで

11月1日 第8回実践フォーラム（県立総合教育センターで）興南中学校の国語の公開授業、授業研究会を行った。約50人が参加

<2015年（平成27年）>

2月13日 山内彰会長、副会長の武富和彦沖縄タイムス社取締役編集局長、潮平芳和琉球新報社編集局長、兼松アドバイザー、佐久間アドバイザーが県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問

3月2日 実践報告会（沖縄タイムス社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の名護市立真喜屋小、興南中学・高校、那覇市立小禄南小から報告を受け、3グループに分かれて報告の内容や日頃の実践について意見交換

5月19日 県NIE推進協議会総会。事務局が琉球新報社へ

6月25日 山内彰会長、甲斐崇NIEアドバイザーらが北中城村教育委員会に森田孟則教育長らを訪問。地域連携型のNIEの推進について意見交換

6月27日 NIE研究部会を開催。佐久間洋NIEアドバイザー、松田美奈子美東中教諭が記事を使った道德の授業について実践報告。15年度から研究部会の開催を定例化し、教員らの実践内容の共有、意見交換の場とすることを確認した

7月30日 第20回NIE全国大会（秋田県）に、山内彰会長ら教育関係者7人と新聞社関係者9人の計16人が参加。「『問い』を育てるNIE思考を深め、発信する子どもたち」をテーマにしたパネル討論や公開授業、実践発表などを通して論理的思考力など「21世紀型学力」とNIEの取り組みを学んだ

9月9日 日本新聞協会NIEアドバイザーに、新たに石川美穂興南高教諭、松田美奈

子美東中教諭が認定

11月12日 日本新聞協会実践指定校の那覇市立城北小学校が11月のおきなわNIE月間に合わせ、4年（総合学習）、5年（道徳）、6年（国語）の公開授業を同校で行った

11月26日 第6回「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）で、小学生部門の最優秀賞に北中城小6年の瀬底蘭さんが選ばれた。同コンクールの最優秀賞は県内初。奨励賞3人、優秀学校賞に大里南小が選ばれた

<2016年（平成28年）>

2月16日 山内彰会長、潮平芳和琉球新報編集局長、武富和彦沖縄タイムス編集局長の両副会長らは県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問。教育行政とのさらなる連携を確認した。いっしょに読もう！新聞コンクール最優秀賞の瀬底蘭さんの受賞も報告した

3月1日 2015年度の実践報告会を琉球新報社で開催。日本新聞協会NIE実践校のうち本年度で実践期間が終了する城北小、大里南小、興南中・高校がこれまでの取り組みや成果を報告した

5月28日 県NIE推進協議会総会

6月18日 NIE研究部会を「NIEカフェ」として、ケーキやコーヒーの出る飲食店で開催した。原則毎月第3土曜日の午後2時から開催し、教員が参加しやすい環境にした

8月4日 第21回NIE全国大会（大分県）に、山内彰会長ら教育関係者9人と新聞社関係者が参加。パネル討論や公開授業を通し、大分や各地の事例や手法などに理解を深めた

11月4日 県NIE実践フォーラム2016（沖縄市立室川小学校で）。おきなわNIE月間（県教育委員会後援）の中心行事として開催。2、3、6学年（計3クラス）の公開授業や全体会を行った。約120人が参加

12月10日 第22回県中学校総合文化祭で中学生が速報を発行し、両新聞社が支援した。NIE展示コーナーも設置し、実践校や新聞社の活動を紹介。11日まで

<2017年（平成29年）>

3月1日 実践報告会（琉球新報社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の室川小、県立森川特別支援学校が報告発表を行った

4月20日 山内彰会長、副会長の普久原均琉球新報社編集局長、石川達也沖縄タイムス社編集局長、佐久間アドバイザー、石川アドバイザーらが県教育庁に平敷昭人県教育長を表敬訪問

5月26日 県NIE推進協議会総会。共同通信社の会費増額を承認（3万円から4万円に）。事務局が沖縄タイムス社へ

5月27日 本年度最初のおきなわNIEセミナー。新聞協会取材の「いっしょに読もう新聞コンクールを授業に組み込む」（佐久間アドバイザー）。その後、6月はこども新聞

沖縄戦特別版の活用方法（松田アドバイザー）、11月は「はがき新聞作り」（プール学院大学の今宮信吾准教授）、2月に「NIE年間計画の立て方」（石川アドバイザー）を行った。

8月3、4日 NIE全国大会名古屋大会に山内彰会長、蔵根美智子前室川小校長、松田美奈子アドバイザー、金城治・県立総合教育センター研究主事、宮城英誉・緑風学園教諭、比嘉美保・森川特支教諭、内山直美・糸満中教諭、地元新聞社員が参加した

12月9、10日 「第23回県中学校総合文化祭」（沖縄市民会館など）で、沖縄タイムス、琉球新報の移動編集車両（ワラビーGO!、りゅうちゃん号）を活用し、大会の速報作りを行った。速報作りには糸満中、美東中の生徒が記者として参加し、新聞社が指導した

<2018年（平成30年）>

1月17日 名護市教育委員会の後援を得て、実践指定校の同市立小中一貫教育校緑風学園でNIE実践フォーラムを開催。朝のNIEフリートーク再現、5年生の社会、1年生と8年生（中学2年）合同の国語の3本の授業を公開。小中一貫校らしい異学年の学びの蓄積を他校教員、保護者らに見せた。学校の取り組みを振り返る全体会も行った

3月8日 2017年度の実践報告会を那覇市の沖縄タイムス社で開催した。日本新聞協会指定のうち、指定最終年の高原小、美東中、興南高校が報告発表を行った。その後、他の指定校の代表者が3グループに分かれ、報告への質疑、実践交流を行った

5月10日 緑風学園の宮城英誉教諭がNIEアドバイザーに認定。北部地区での教師ネットワークづくりへ

5月26日 6年目の「おきなわNIEセミナー」スタート。この日は「話す力・書く力を育てる指導法」をテーマに佐久間洋、宮城英誉両アドバイザーが講師。その後、6月「切り抜き新聞」（甲斐崇アドバイザーがメイン講師）、12月「はがき新聞」（講師は桃山学院教育大学の今宮信吾准教授）を行った。

5月31日 県NIE推進協議会総会。会長に仲村守和元県教育長を選出。山内彰会長は顧問に就任。6月4日に新旧会長が平敷昭人県教育長を訪問した

7月26、27日 NIE全国大会岩手大会に宮城英誉アドバイザー、比嘉美保桜野特別支援学校教諭、宮城通就宜野座高校教諭、蔵根美智子放送大学沖縄学習センター客員准教授、地元新聞社員が参加した

8月4日 実践資料集（仮称）制作のため、編集委員会を結成し、8、9、10、翌年1月に会議。編集作業を進めた。

10月9日 県教育庁の県立学校教育課、義務教育課から各1人の指導主事を推進協の幹事に任命

11月8日 比嘉美保桜野特別支援学校教諭がNIEアドバイザーに承認された

11月12日 糸満市立糸満中学校でNIE実践フォーラム開催。数学、英語、国語、理科で公開授業を行った

12月8、9日 「第24回県中学校総合文化祭」（うるま市民芸術劇場など）で、沖縄

タイムス、琉球新報の移動編集車両で大会の速報作りを行った。速報作りには糸満中、美東中の生徒が記者として参加し、新聞社が指導した

<2019年（平成31年）>

1月7、11日 仲村守和会長が沖縄タイムス社、琉球新報社の社長を訪ね、学校への購読料軽減措置を要請。7日には平敷昭人県教育長を訪ね、学校図書館への新聞配備状況の調査を要請した

3月15日 2018年度の実践報告会を那覇市にて開催した。日本新聞協会指定のうち、指定最終年の糸満中、宜野座高校が報告発表を行った。その後、他の指定校の代表者が3グループに分かれ、報告への質疑、実践交流を行った

沖縄県内の実践指定校一覧

< 2018年度 >

【日本新聞協会指定】うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽県立宜野座高校▽読谷村立古堅南小学校▽名護市立久辺小学校▽浦添市立仲西小学校

【沖縄県N I E推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽沖縄市立美東中学校▽興南中学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽沖縄市立室川小学校▽沖縄市立高原小学校

< 2017年度 >

【日本新聞協会指定】沖縄市立高原小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立美東中学校▽興南高校▽うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽県立宜野座高校

【沖縄県N I E推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽名護市立久辺小学校▽久米島町立久米島小学校▽渡嘉敷村立渡嘉敷中学校▽沖縄市立室川小学校▽県立森川特別支援学校

< 2016年度 >

【日本新聞協会指定】沖縄市立室川小学校▽宮古島市立福嶺小学校▽興南高校▽県立森川特別支援学校▽沖縄市立高原小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立美東中学校【沖縄県N I E推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽名護市立久辺小学校▽宮古島市立西辺小学校▽久米島町立久米島小学校▽八重瀬町立具志頭中学校▽渡嘉敷村立渡嘉敷中学校

< 2015年度 >

【日本新聞協会指定奨励枠】興南中学校・高校【日本新聞協会指定通常枠】南城市立大里南小学校▽那覇市立城北小学校▽沖縄市立北美小学校▽宮古島市立福嶺小学校▽沖縄市立室川小学校▽県立森川特別支援学校【沖縄県N I E推進協議会指定】南城市立大里中学校▽沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立石垣小学校▽沖縄アミークスインターナショナル▽宜野座村立松田小学校▽那覇市立小禄南小学校

< 2014年度 >

【日本新聞協会指定奨励枠】那覇市立小禄南小学校【日本新聞協会指定通常枠】名護市立真喜屋小学校▽興南中学校・高校▽南城市立大里南小学校▽北谷町立浜川小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立伊野田小学校【沖縄県N I E推進協議会指定】南城市立大里中学校▽沖縄市立比屋根小学校▽沖縄市立コザ小学校▽那覇市立城北中学校若夏分校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立宮良小学校▽県立泊高校▽沖縄アミークスインターナショナル▽宜野座村立松田小学校▽宮古島市立平良中学校

< 2013年度 >

【日本新聞協会指定奨励枠】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校【日本新聞協会指定通常枠】うるま市立中原小学校▽沖縄市立コザ小学校▽沖縄アミークスインターナ

シヨナル▽名護市立真喜屋小学校▽恩納村立喜瀬武原小中学校▽興南中学校▽県立陽明高校【沖縄県N I E推進協議会指定】南城市立大里中学校▽那覇市立城北中学校若夏分校▽北谷町立浜川小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立伊野田小学校▽石垣市立宮良小学校▽県立沖縄工業高校

<2012年度>

【日本新聞協会指定奨励校】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校【日本新聞協会指定通常校】うるま市立中原小学校▽沖縄市立コザ小学校▽沖縄アミークスインターナシヨナル【沖縄県N I E推進協議会指定】南城市立大里中学校▽豊見城市立豊見城中学校▽北谷町立浜川小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立伊野田小学校

<2011年度>

【日本新聞協会指定奨励校】宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校【日本新聞協会指定通常校】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校▽うるま市立勝連小学校▽宜野座村立漢那小学校▽読谷村立喜名小学校▽読谷村立読谷中学校▽県立真和志高校【沖縄県N I E推進協議会指定】与那原町立与那原中学校▽豊見城市立豊見城中学校

<2010年度>

【日本新聞教育文化財団指定奨励校】宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校【日本新聞教育文化財団指定】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校▽うるま市立勝連小学校▽宜野座村立漢那小学校▽読谷村立喜名小学校▽読谷村立読谷中学校▽県立真和志高校【沖縄県N I E推進協議会指定】うるま市立比嘉小学校▽与那原町立与那原中学校▽うるま市立石川中学校▽豊見城市立豊見城中学校 ※年度末で日本新聞教育文化財団が日本新聞協会と合併

<2009年度>

※これ以前はすべて日本新聞教育文化財団指定▽那覇市立さつき小学校▽那覇市立古蔵中学校▽うるま市立比嘉小学校▽うるま市立高江洲中学校▽宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校▽豊見城市立豊見城中学校

<2008年度>

那覇市立さつき小学校▽那覇市立古蔵中学校▽うるま市立比嘉小学校▽うるま市立高江洲中学校▽宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校▽豊見城市立豊見城中学校

<2007年度>

那覇市立銘苅小学校▽名護市立大宮小学校▽糸満市立三和中学校（注1）▽那覇市立石嶺中学校▽うるま市立石川中学校▽沖縄三育中学校（注1）座間味村立慶留間小中学校から実践者異動による実践校の変更

<2006年度>

那覇市立銘苅小学校▽名護市立大宮小学校▽座間味村立慶留間小中学校▽那覇市立石嶺中学校▽うるま市立石川中学校▽沖縄三育中学校▽県立向陽高校（注2）▽県立南風原高校（注2）（注2）実践者の休職などによる指定中止

< 2005年度 >

浦添市立当山小学校▽座間味村立座間味小中学校▽那覇市立小禄中学校▽那覇市立上山
中学校▽県立浦添商業高校

< 2004年度 >

浦添市立当山小学校▽座間味村立座間味小中学校▽那覇市立小禄中学校▽那覇市立上山
中学校▽県立那覇高校▽県立浦添商業高校

< 2003年度 >

那覇市立城北小学校▽沖縄市立室川小学校▽琉球大学教育学部附属中学校▽沖縄尚学高
校附属中学校▽県立那覇高校▽県立辺土名高校

< 2002年度 >

那覇市立城北小学校▽沖縄市立室川小学校▽琉球大学教育学部附属中学校▽沖縄尚学高
校附属中学校▽県立中部商業高校▽県立辺土名高校

< 2001年度 >

豊見城村立とよみ小学校▽沖縄カトリック小学校▽平良市立西辺中学校▽東風平町立東
風平中学校▽県立中部商業高校▽県立浦添高校

< 2000年度 >

豊見城村立とよみ小学校▽沖縄カトリック小学校▽平良市立西辺中学校▽東風平町立東
風平中学校▽県立首里東高校▽県立浦添高校

< 1999年度 >

那覇市立古蔵中学校▽那覇市立松島小学校▽県立首里東高校

2018年(平成30年) 8月18日 土曜日 (1/4)

NIE全国大会岩手・盛岡大会

15分

5分

5分

5分

5分

5分

5分

5分

5分

5分

5分

5分

5分

5分

5分

5分

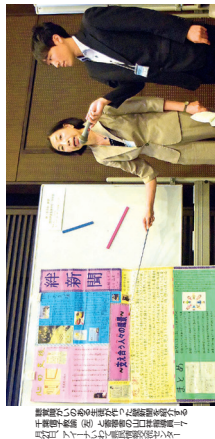
5分

5分

5分

新聞と歩む 復興、未来へ

実践発表



「切り抜き」表現力養う

岩手県立新聞社が、NIE全国大会で実践発表を行った。岩手県立新聞社が、NIE全国大会で実践発表を行った。岩手県立新聞社が、NIE全国大会で実践発表を行った。

県立岩手県立新聞



岩手県立新聞社が、NIE全国大会で実践発表を行った。岩手県立新聞社が、NIE全国大会で実践発表を行った。岩手県立新聞社が、NIE全国大会で実践発表を行った。

災禍記し、あすを生きる

新聞の役割、活用探る



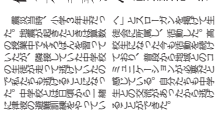
NIE全国大会(盛岡市、7月26日、27日の2日間)。

地域つなぐ手段



高橋 梨子さん (記者兼編集長)

震災経験者への報告



佐々木 千芽さん (県立岩手県立新聞)

伝えて風化防ぐ



佐々木 千芽さん (県立岩手県立新聞)

「できること」考える

水産漁業水産部



水産部が、NIE全国大会で実践発表を行った。

困難越える力磨く

盛岡市立松岡小



盛岡市立松岡小が、NIE全国大会で実践発表を行った。

「希望の記号」芸術に

県立岩手県立新聞



県立岩手県立新聞が、NIE全国大会で実践発表を行った。

社会の耐震性増す基盤



高橋 梨子さん (記者)



岩手県立新聞が、NIE全国大会で実践発表を行った。

本気の姿勢に感動



高橋 梨子さん (記者)

やれることを実践



高橋 梨子さん (記者)

子どもらの意欲を確立



高橋 梨子さん (記者)

参加者の声



高橋 梨子さん (記者)

教育

2018年度 NIE実践フォーラム開催

数値読み解き選挙実感

2018年度 NIE実践フォーラムは、11月18日（日）午後2時から、沖縄県立総合教育センター（沖縄県浦添市）で開催された。当日は、約100名が参加し、数値読み解き選挙の実感を共有した。

当日のメインイベントは、数値読み解き選挙の実感を共有する。参加者は、数値を読み解き、選挙の実感を共有した。また、数値を読み解き、選挙の実感を共有した。また、数値を読み解き、選挙の実感を共有した。

当日のメインイベントは、数値読み解き選挙の実感を共有する。参加者は、数値を読み解き、選挙の実感を共有した。また、数値を読み解き、選挙の実感を共有した。また、数値を読み解き、選挙の実感を共有した。

教育

身近な題材 授業に興味

意見読み込み考え深化

2018年度 NIE実践フォーラムは、11月18日（日）午後2時から、沖縄県立総合教育センター（沖縄県浦添市）で開催された。当日は、約100名が参加し、身近な題材を使った授業に興味を示した。

当日のメインイベントは、身近な題材を使った授業に興味を示した。参加者は、身近な題材を読み込み、考えを深化させた。また、身近な題材を読み込み、考えを深化させた。また、身近な題材を読み込み、考えを深化させた。

当日のメインイベントは、身近な題材を使った授業に興味を示した。参加者は、身近な題材を読み込み、考えを深化させた。また、身近な題材を読み込み、考えを深化させた。また、身近な題材を読み込み、考えを深化させた。

教育

記事使う目的意識して

NIEアドバイザーの5教諭が助言

2018年度 NIE実践フォーラムは、11月18日（日）午後2時から、沖縄県立総合教育センター（沖縄県浦添市）で開催された。当日は、約100名が参加し、記事を使う目的意識を深めた。

当日のメインイベントは、記事を使う目的意識を深めた。参加者は、NIEアドバイザーの5教諭から助言を受けた。また、記事を使う目的意識を深めた。また、記事を使う目的意識を深めた。また、記事を使う目的意識を深めた。

当日のメインイベントは、記事を使う目的意識を深めた。参加者は、NIEアドバイザーの5教諭から助言を受けた。また、記事を使う目的意識を深めた。また、記事を使う目的意識を深めた。また、記事を使う目的意識を深めた。

教育

新聞社会性培うツール

新聞実践4校を募集

2018年度 NIE実践フォーラムは、11月18日（日）午後2時から、沖縄県立総合教育センター（沖縄県浦添市）で開催された。当日は、約100名が参加し、新聞を使った社会性を培うツールを学んだ。

当日のメインイベントは、新聞を使った社会性を培うツールを学んだ。参加者は、新聞実践4校を募集した。また、新聞を使った社会性を培うツールを学んだ。また、新聞を使った社会性を培うツールを学んだ。また、新聞を使った社会性を培うツールを学んだ。

当日のメインイベントは、新聞を使った社会性を培うツールを学んだ。参加者は、新聞実践4校を募集した。また、新聞を使った社会性を培うツールを学んだ。また、新聞を使った社会性を培うツールを学んだ。また、新聞を使った社会性を培うツールを学んだ。

教育

科学と生活 未来見通す

理科

2018年度 NIE実践フォーラムは、11月18日（日）午後2時から、沖縄県立総合教育センター（沖縄県浦添市）で開催された。当日は、約100名が参加し、科学と生活の未来を見通した。

当日のメインイベントは、科学と生活の未来を見通した。参加者は、理科の授業に興味を示した。また、科学と生活の未来を見通した。また、科学と生活の未来を見通した。また、科学と生活の未来を見通した。

当日のメインイベントは、科学と生活の未来を見通した。参加者は、理科の授業に興味を示した。また、科学と生活の未来を見通した。また、科学と生活の未来を見通した。また、科学と生活の未来を見通した。

教育

授業改善へ有効性確認

内山直美教諭 実践報告者市若

2018年度 NIE実践フォーラムは、11月18日（日）午後2時から、沖縄県立総合教育センター（沖縄県浦添市）で開催された。当日は、約100名が参加し、授業改善の有効性を確認した。

当日のメインイベントは、授業改善の有効性を確認した。参加者は、内山直美教諭の実践報告を聞いた。また、授業改善の有効性を確認した。また、授業改善の有効性を確認した。また、授業改善の有効性を確認した。

当日のメインイベントは、授業改善の有効性を確認した。参加者は、内山直美教諭の実践報告を聞いた。また、授業改善の有効性を確認した。また、授業改善の有効性を確認した。また、授業改善の有効性を確認した。

教育

参加教諭の見方

リレーインタビュー

2018年度 NIE実践フォーラムは、11月18日（日）午後2時から、沖縄県立総合教育センター（沖縄県浦添市）で開催された。当日は、約100名が参加し、参加教諭の見方を聞いた。

当日のメインイベントは、参加教諭の見方を聞いた。参加者は、リレーインタビューを受けた。また、参加教諭の見方を聞いた。また、参加教諭の見方を聞いた。また、参加教諭の見方を聞いた。

当日のメインイベントは、参加教諭の見方を聞いた。参加者は、リレーインタビューを受けた。また、参加教諭の見方を聞いた。また、参加教諭の見方を聞いた。また、参加教諭の見方を聞いた。

教育

来年度実践4校を募集

地元県全区域 教材活用へ提供

2018年度 NIE実践フォーラムは、11月18日（日）午後2時から、沖縄県立総合教育センター（沖縄県浦添市）で開催された。当日は、約100名が参加し、来年度実践4校を募集した。

当日のメインイベントは、来年度実践4校を募集した。参加者は、地元県全区域の教材活用へ提供を受けた。また、来年度実践4校を募集した。また、来年度実践4校を募集した。また、来年度実践4校を募集した。

当日のメインイベントは、来年度実践4校を募集した。参加者は、地元県全区域の教材活用へ提供を受けた。また、来年度実践4校を募集した。また、来年度実践4校を募集した。また、来年度実践4校を募集した。

OKITEN 2019 EXHIBITION 71st.

新・化しつづけるアート。

作品募集

2019年 1/16(土)・17(日)

2019年 1/21(土)・22(日)

2019年 1/27(土)・28(日)

2019年 1/31(土)・2/1(日)

受付時間：午前11時～午後6時 受付場所：各会場

作品受付け：1/16(土) 11:00～17:00

会場：沖縄県立総合教育センター（沖縄県浦添市）

主催：NIE実践フォーラム実行委員会

協賛：沖縄県立総合教育センター

お問い合わせ：098-866-1111

http://www.okiten.com



沖縄タイムス社のN I E事業

出前授業・読み方セミナー

沖縄タイムスの記者、N I E担当者が学校・地域へ出向き、新聞の基本知識、読み方・活用法、記者の仕事などについて語ります。

【児童・生徒向け】

- ・新聞のしくみ教室（小人数・1コマ向け）
新聞の歴史の中で作られたしくみやルールを分かりやすく説明します。新聞ができる過程を見ながら、なぜ大事なことから書くのかなどを説明し、読み方のコツを伝えます。
- ・切り抜き新聞ワークショップ（大人数・2コマ向け）
実際の新聞を使って、切り抜き新聞作りなどのワークショップで新聞の特徴を学ぶとともに、グループで話し合いを活発にします。

【PTA向け】

新聞のしくみ講座やワークショップに親子で取り組みます。

沖縄県新聞スクラップコンテスト

小・中・高校生を対象に、日々の新聞から切り抜いた記事を使ったスクラップノート、切り抜き新聞、新聞感想文を募集。優秀作には県知事賞、県PTA連合会長賞、沖縄タイムス社長賞などを贈っています。作品受付は9～10月、11月審査発表・表彰。

学校の授業や夏休みの宿題として年々取り組みが広がっています。2018年で第8回を数え、応募は3千点を数えます。出品した生徒からは「知識が増え、見える景色が変わった」「視野が広がった」などの声が上がっています。

新聞社見学

沖縄タイムス本社で、新聞の製作工程や新聞の特徴を学び、施設や新聞歴史資料コーナーを見学します。小学生から一般まで幅広い層を対象に実施しています。

《お気軽にお問い合わせください》

沖縄タイムス社編集局N I E事業推進室 電話098(860)3618

メール times-nie@okinawatimes.co.jp



琉球新報NIEの取り組み

琉球新報社はNIEを通して、子どもたちが好奇心をかきたて、「生きる力」をはぐくむことを後押しする企画を展開しています。新聞を読み親しむことで文章を読み解く力や考える力、表現する力を培い、社会の出来事に関心を持ってほしい—そんな願いを込め、紙面作りをしています。新聞を好きになってもらうための出前授業、教員の新聞活用を支援する取り組みなどに力を入れています。

■「新報小中学生新聞 りゅうPON!」(2011年1月創刊)

- ・夢への扉、パワフルキッズ、キラリ★イチオシ、りゅうちゃんのうちなーぐち(1面)
- ・ニュースの木、読んで解いてみよう、教えてニュース塾(2面)→情報、ニュース解説
- ・レッツチャレンジ NIE、おきなわをもっとシリ隊、エール・メール、えいGO、サイエンス(3面)→学び
- ・美術でござる、国宝浪漫記、やってみYO!、ビジュアル版、なぞペー(4・5面)→発見
- ・日本語どんぶらこ、知っとくto得トーク、てつがくカフェ(6面)→メディアリテラシー、哲学
- ・ふしぎうちなーショート、教えて池上さん!、アスリート大百科(7面)、セイタ先生の「ワクワク実験室」→学びと発見
- ・りゅうPON! 掲示版、ジュニア通信員によるレポート(8面)→読者参加のページ

■記者による出前講座「おでかけりゅうPON!」 学校を訪問、主に小中高生が対象。

- ・新聞のつくりと、5W1Hを踏まえた記事の読み方、紙面の工夫点などを学び、読解力と表現力、読解力を養う「新聞の読み方講座」
- ・多メディアの特徴を学びながら、多くの情報を読み比べ、情報を活用する力をつける「メディアリテラシー講座」

■その他

- ・毎年9月発行「琉球新報こども新聞」→夏休み期間中、児童が取材して発信するNIE
- ・毎年9月「学校新聞コンクール」
- ・年1回「しんぶん感想文コンクール」
- ・夏休み「しんぼう新聞スクール」

2018年度沖縄県NIE実践報告書

2019年5月発行

発行 沖縄県NIE推進協議会（会長・仲村守和）

事務局 〒900-8678

那覇市久茂地2-2-2

沖縄タイムス社NIE事業推進室

電話：098-860-3618

FAX：098-851-5300

メール：times-nie@okinawatimes.co.jp